

お前はまだきあいパン
チを知らない

C—WEED

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

常識は捨てろ

理屈など不要

黙って戦え

「大丈夫だ、きあいパンチでぶっ飛ばせる」

要はきあいパンチでゴリ押しする話。

細かいことは気にせずにご覧下さい。知能指数が5000あれば十分楽しめるで
しょう。

目次

何かの記念に作られた閑話

汚いゴキブリを拾ったので虐待するこ

とにした | 1

ホウエン編 | 15

プロローグ | 15

1 | 23

2 | 33

3 | 45

4 | 56

5 | 69

6 | 81

7 | 92

8 | 107

9 | 125

10 | 141

11 | 156

12 | 181

13 | 194

14 | 213

15 | 229

16 | 250

17 | 271

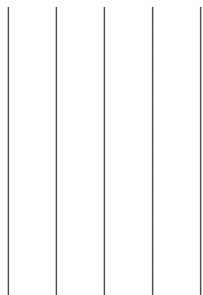
18 | 288

19 | 310

20 | 332

ア
ロ
ー
ラ
編

2 2 2 2 2
5 4 3 2 1



428 411 393 376 359

何かの記念に作られた閑話

汚いゴキブリを拾ったので虐待することにした

シンオウ地方を旅していた時のことだ。

火山の麓を歩いていると、汚いゴキブリがひっくり返って地面にめり込んでいるのを見つけた。

空に向けた四本の足を動かしてブレイクダンスでも踊っているつもりなのだろう。

しかし、ゴキブリのブレイクダンスなど誰が見たいだろうか。

ひっくり返して踊るのを止めさせた。

すると、地面に足が着いた途端、ゴキブリは薄汚れた体で此方に突進を仕掛けてきた。

人間に逆らうなんて生意気なゴキブリだ。立場を思い知らせてやろう。

誰かに見られるのもよくないので拠点まで連れていく。

逃げたり抵抗できないように宙に浮かせて運んだ。

拠点に着いたら早速虐待を始めた。

まずは全身に火傷しそうな程の熱湯を浴びせる。

連れが止めてやれと言ってくるが手を緩めることはない。

非常に硬質な繊維の塊で身体中をゴシゴシと擦ってやる。

この時点でゴキブリはダウンしている。

しかしまだまだこの程度では終わらない。

だらしなく開いた口に、とても食べられるようには見えない刺々しい鉋物をぶちこんでやった。

そして豪快に火炙りだ。汚物は消毒しなくては。

ゴキブリを虐待している間、煽るように舞い踊っていた蝉と入れ代わりで出てきた軍鶏が更に煽るように舞う。

盛り上がったところで炎を纏った突撃、ではなくきあいパンチ。

衝撃で目を覚ましたゴキブリは何が何だかわかっていない様子だ。

そろそろ仕上げだ。

単純に殴るのも十分虐待と言えるだろう。しかし敢えて直接は殴らせない。ギリギリ当てない。それによっていつ殴られるのかわからないという単に殴るよりも長期的な恐怖を味わわせる。

これでゴキブリも十分思い知った筈だ。

また外に放り捨ててやる。

だが、ただ捨てるのではない。

最後に、羽も無いのに空を飛ばされる恐怖を味わわせてやった。

アルセウスが宇宙を創造した時、ヒードランは洞窟を創造した。ディアルガが時間、パルキアが空間を司る神として知られているが、実はヒードランは洞窟の主である。

季節を告げたり、雷を鳴らしたり、嵐を起こしたり時を越えたり、封印されていたり命を与えたりするポケモンがいる中、ヒードランは洞窟の壁や天井に張り付き、悠久の時を過ごしている。洞窟を産み、洞窟に生まれ、洞窟に生き、洞窟で生涯を終える。それがヒードランである。つまり、ヒードランとは洞窟であった。

学者の間ではヒードランという名前は古代の言葉で洞窟を意味する言葉であるという説がある。「全ての洞窟はヒードランに通ず」そんな言葉もあるとかないたか。

それはさておき、このハードマウンテンもまた、洞窟である。

つまり、主たるヒードランもいる。のだが、どういうわけか、気が付いたらそこそこ重い石によって封印されてしまっていた。それは今から36万……いや、1万4000時間前のことだっただろうか。まあいい。

しかし封印されていても、ヒードランは洞窟の中にいた。むしろ、封印されていない時よりも洞窟に近かった。故にヒードランはそれはそれで満足していた。

しかし、その平穩は唐突に終わりを告げる。

「お、この石いいね」

「いいって……何に？」

「漬物石とか……」

「漬物なんて作らないでしょうに」

「じゃあほら、きあいパンチの訓練に」

「は？」

ヒードランを封印していた石が何者かによつて持ち去られてしまったのだ。

しかし、ヒードランは自分が目覚めたことに気づいていない。何故なら、目覚めていようと目覚めてなかつたら、彼が洞窟の中にいることに変わりはないからだ。

ところで、洞窟とは即ちヒードランであるとしても、封印されていた以上、彼のことを知るポケモンは少ない。そもそもポケモンから崇められていた訳でもない。

現ハードマウンテンの主がいる。ドサイドンである。サイドンにプロテクターを持たせ通信交換する、という非常に手間の掛かる進化をする。しかしこのドサイドン、生まれてこの方トレーナーに捕まったことはない。しかしドサイドンである。自然とは不思議なものだ。

さてこのドサイドン、縄張りを見回った後は、ハードマウンテンの一番奥の小部屋で休憩するのが日課となっている。腰を下ろすのに丁度いい石があるのだ。

正確には、あった。

「今日も今日とで見回りを終えたドサイドン。今日も縄張りに異常はない。いつもの小部屋に向かう。いつも腰掛ける石も良いが、あの小部屋そのものも気に入っていた。あの狭さがいいのだ。」

小部屋に入る。ドサイドンは後悔した。何が異常無しだろうか。大惨事だ。

まず、石がない。これでは座れない。

更に、石があつた筈の場所に見慣れないポケモンが鎮座していた。なんだこれは。

何が起こつたのかよく分からないドサイドンは、初め、このポケモンは石が変身したものではないかと考えた。ので、ポケモンに座つてみた。当然、そんなことはなかった。

あの石の座り心地ではない。尻を火傷した。

次にドサイドンはこう考えた。

このポケモンが石を何処かへ隠したのだ。ふてえ野郎だ。ぶちかまさなければ。

ドサイドンの手のひらには穴が開いている。岩石を放つ砲門だ。放つ岩石はどこから来るのか。当然、現地調達である。ガッツと割つてギユッツと詰めてバーンだ。

さて、御察し頂けただろう。ドサイドンはぶちかますために、十八番（BWまで）の岩石砲を選択したのだ。

ガッツと割れなかつたので掴み、ギユッツと入らなかつたので吸引力で確りくつ付

け、バアーン。

憎きあのポケモンは飛んでいった。ドサイドンはホツと息をつく。

あのポケモンをぶっ飛ばしたら石の在処がわからないということに気付いたのはこの翌日のことである。

さて、ドサイドンによって飛ばされてしまったヒードラン。

落下の衝撃で目が覚めると、そこは洞窟ではなかったのである。なんとということだろう。いつもなら爪が掴んでいる筈の洞窟の壁がない。天井がない。今のヒードランに降り注ぐのは洞窟の埃ではなく、火山灰と日の光だ。

何より、今のヒードランは逆さであった。落下の際、運悪くこうなってしまった。懸命に足を動かしてみるが背中が地面にフィットして動けない。ただただ足が空を切る時間が続いた。

いよいよ途方にくれていた時である。

「モジャンボ、きあいパンチ」

ドン、と衝撃を感じると、気が付けば体が宙に浮き、次の瞬間には普段通り、ヒードランの足は地面を掴んでいた。

ヒードラン、歓喜。

しかし、ヒードランは不器用だった。彼はこの気持ちと、感謝を伝える術を知らない。故に取った行動はシンプル。全力の五体投地。即ち、最敬礼。感謝のあまり、勢いよくその身を投げ出す。

しかし、最敬礼ならず。

ヒードランの体は宙に浮いていた。

「ありがとうフリーデイン。ついでにそのまま運んでくれ」

フリーデインは頷いた。

フリーデインは知能指数5000だ。トレーナーのピンチを察して勝手にサイコキネシスしたのだ。知能指数5000であればその程度、見ながら余裕で対応できる。

さて、運ばれるヒードラン。足どころか爪一本も動かせない。恐るべしサイコキネシス。

だがヒードランは困ったとは考えない。彼の脳内にあるのは洞窟のことばかり。最終的に洞窟に帰れるのならどこに行こうと気にしないのだ。

洞窟のことを思っただけでブーツとしていけると、不意に、地面に足が着いた。何処かに着いたのだ。当然見知らぬ場所。しかし、入り口があつてそこから中に入るといふことは洞窟に同じである。つまり、ここもまた洞窟なのだ。

「汚れてるからね。仕方無いね」

「何言ってるの……?」

見知らぬ、とは言え洞窟であることにリラックスするヒードラン。しかし安息は一瞬で終わる。

「エンペルト、ねっとう」

「あんたねエ!!」

熱い。いや、そこは別に問題ではない。寧ろ熱い分まだ良かったが、要は水だ。

ヒードランは水が苦手だった。熱湯であつても浴びせられるのはしんどかった。それも全身だ。ヒードランが意識を失うのにそう時間はかからなかった。

「いや、ほら塊あるから、ね?」

「そういう問題じゃ……」

口の中に何かが放り込まれ、ヒードランは反射的にそれを飲み込んだ。

「テツカニン、バトンタッチ。で、バシャーモは更に剣の舞」

何かを飲み込んで、少しだけ意識が浮上してくる。薄い意識の中で何かがせわしく動き回る振動が伝わってきた。

「よし、バシャーモ、フレアドラ……きあいパンチ」

そしてヒードランを襲う炎熱と衝撃。しかしこれらはヒードランの体力を削るものではなく、ヒードランの体を温め、気付けをするものだった。

燃える。体が内側から燃え上がるようだ。ただの貫い火の効果なのだがヒードランはその辺りには無頓着である。

しかしこの燃えるような感覚が目の前の男とポケモン達によって与えられたということはわかる。とは言えどうしていいかもわからない。この沸き上がるパワーを持て余し、戸惑っていた。

「折角だし強くして帰さないかね」

「何を」

「きあいパンチ」

「ちよっ」

またしてもフリーデンであった。念のため言うなら無作為抽出だった。にもかかわらず、またしてもフリーデンであった。

知能指数5000なら確率を操作するのも造作もない、ということだけ付け加えておく。

「御手柔らかな」

さて、きあいパンチのデパートことフリーデンである。今回のきあいパンチは、なん

と、当てない。ケーシイの時のそれと同じでありながら少し違うきあいパンチ。今回フリーデンが放つきあいパンチは、確り拳を振るった上で、当てない。そして拳からきあいが放たれる。

例えば拳を寸止めにしたらぶつからないので痛くは無いけど風を感じる。つまりそう言うことだ。

繰り返しフリーデンが放つきあいを浴び、ヒードランはますます戸惑っていた。こんな動きは見たことがない。そして戸惑いながらも、高まるものを感じていた。拳を向けられれば向けられる程、自分の中にエネルギーが満ちていくのがわかる。

洞窟程では無いが、とても心地好い。これならばいくらでも受けていられる。そう思っていたが、これまた唐突に、終わりを告げる。

「よし、もう十分だろう」

「何が？」

「何があつてああなつてたのか、俺には全くわからない」

「私もあんたが何言つてるのかわかんない」

「まあ、あれだ……止まるんじゃねえぞ」

男が天を指差す。それが合図だったのかはわからない。

拳がヒードランを打ち上げた。

ヒードランは空を飛んだ。

なお、天井をぶち抜いて飛ばしたため、このあと滅茶苦茶セツキョウされた。

一方のヒードランは二度目の飛行に目を輝かせていた。洞窟の外もそう悪くはない。そう思えるほどに。この重い体でも空を飛べる。これを知れただけでも今日は大収穫だ。

徐々に高度が下がる。このまま行けばハードマウンテンの中腹に着地することになるだろう。

そしてヒードランは見つける。かのドサイドンの姿を。自分を飛ばした元凶を。

恨みはない。怒りもない。ヒードランの心は静かなものであった。だがしかし、一方で、今がその時だと心の中で嘯くものを感じてもいる。その時がどの時なのかはヒードランもわからない。わからないが、委ねるのも悪くないと思った。

ヒードランは嘯きに身を任せる。彼の体は自然と頭を前に出し、全身から脱力した。

あるものはただ落ちているだけだと言うだろう。見る人が見ればすごいアイアンヘッドだと言うだろう。きあいパンチ野郎ならこう言うだろう。これもまたきあいパンチである。

つまり、囁くものとはきあい。囁きに身を任せるといふことは、即ち、きあいパンチであつた。

ドサイドンはと言えば、ヒードランをぶつ飛ばした後、このままでは石を見つけれないことに気付कि、ヒードランを探していたのである。まさか上から来るとは思わな

い。
取り巻きがギリギリで「上から来るぞ、気を付けろ！」と伝えた所で間に合う筈もない。そもそもきあいパンチの前に生半可な防御など無意味である。

激突。辺りに響く轟音。真新しいクレーターがその威力を物語っていた。

ドサイドンはなす術もなく崩れ落ちた。

自分を洞窟から追い出した元凶を打ち倒したヒードラン。今倒したドサイドンはハードマウンテンの主であつた。ということ、この瞬間、名実共にヒードランがこのハードマウンテンの主となつたのである。

ヒードラン勝利の咆哮。

そしてヒードランは山を降りる。

洞窟に生まれ、洞窟に生きるヒードラン。そんなヒードランが山を降りる。おかしいと思われようか。だがそんなことはないのだ。

彼は出会ったのだ。新たなきあいどうくつに。より新鮮で、より心地好く、終わりのないきあいどうくつに。

そしてヒードランは跳んだ。きあいパンチはコイキングですら有人飛行を可能にする。ヒードランもまた、跳んだ。

きあいパンチを通じて、ゴキブリは跳べるようになったのだ。

体内のきあいの導きに従って繰り返し跳ぶ。そして、見つけた。あの男だ。

さあ、あの男にきあいかんしゃを伝えよう。再び、跳躍。そして、空中で感謝の五体投地。

ある人はやはり落ちているだけだと言うだろう。トレーナーが見れば意識の高いへビーボンバーだと言うだろう。ルチャブルが見れば「バーカ！」と言うだろう。つまり、これもまた、きあいパンチであった。

尚、この日謎の飛行物体が確認され、目撃者の間で「鳥ポケモンだ」とか「すばやいエモンガだ」とか「メタグロスだ」とか意見がわかれている。

虐待から暫くして、道を歩いていると、空からゴキブリが降ってきた。

あのゴキブリだ。

上から来るぞ、気を付けろ！ と言う警告すらもないまま潰された。大方、あの虐待

への復讐だろう。

腹立たしいことだ。空から降ってくるのは女の子、という幻想も打ち砕いてくれたので余計に許せない。

なので二度と逆らえないように紅白の玉に閉じ込めてやった。

ホウエン編

プロローグ

「きあいパンチ」という技がある。

世界中で人気を博する育成ゲーム、ポケットモンスターシリーズにおいて、トップクラスの威力を誇る技だ。

タイプ：かくとう 威力：150 命中：100

数値上、この技を超えるかくとうタイプの技は存在しない。

初心者用ポケモンの進化系のみが覚える炎、水、草タイプの究極技であれば、撃つてしまえば反動でしばらく動けない。ノーマルタイプの破壊光線も同様。大爆発などに関しては捨て身の特技である。身を削るものもあれば、能力が下がるものもある。とかく強力な技は負担が大きいのだ。

一方、このきあいパンチには、撃つた後のデメリットは存在しない。威力も命中率も高いのに使える回数も多い。にも関わらず、撃つてもデメリットはないのだ。これだけ聞けばなんと素晴らしい技だろう。

撃つた後のデメリットはない。これは紛れもない事実だ。撃つた後には。

……デメリットがない訳ではないのだ。

きあいパンチには、溜めが必要だ。集中、と言い換えてもいい。成る程、ソーラービームのように溜めが必要な技は幾つかある。それらは総じて威力が高いのだから、きあいパンチにも溜めが必要なのも不思議な話ではない。

だが問題はこの溜めなのだ。

この溜めの最中に攻撃を受けてしまうと、集中力が途切れてしまい技を発動できない。

故に、きあいパンチは、強力ではあるものの、使い難い。使いこなすにはそれ相應の技術がいる。当然、そうなれば戦闘での採用率も下がってしまう。

だが、それで良いのか？

タイプ最強の技が使われにくくていいのか、ということではない。

最強の技ならば、相手の攻撃など物ともせずになぎ倒せるものでなくてはならないのではないか。ここぞという時の一撃が、その為の集中が、相手の攻撃に阻まれていいのか？

……良い筈がない。

最強とは、最も強いということ。最強という称号は強さの証明。勝利の証。

止められてはならないのだ。逆境は飲まれるものではない。はねのけるものだ。

……落ち着け。この対面なら、相手は代えてくる……筈。なら、ここはやはり、きあいパンチ一択……。

「頼むぞ……」

ローブシン は 集中がとぎれて
わがが だせなかった

「あああああああああツツツ!!」

画面の表示を見て、絶叫する。

こんなのは間違っている。あつて良い筈が無いのだ。

きあいパンチの威力に惚れた。きあいパンチによるワンパン、そんなロマンに憧れた。だが撃てない。撃たせてもらえない。……ああ、勿論、自分の読みも悪いのだろう。作戦も、覚えさせるポケモンもミスしているのかもしれない。だが、しかし、余りにも……余りにも、酷い仕打ちではないか……! !

不意に、目眩がした。意識が、遠退いていく。目の前が真っ暗になった。

目が覚めたら、体が縮んでしまっていた！

などというとんでもない、それこそ漫画のような事態が自分に起こってしまったら、一体どんな反応をしたら良いのだろうか。笑えば良いのか？ 不毛過ぎて草も生えない。

「……は……？」

森。そんなことは見ればわかる。どこの森だよ。というか家は？ 何故こんな所に？

……そうか、夢か。

周りを見てみると、足元にバッグが転がっている。自分の、なのだろうか？ こんなバッグを持っていた覚えはないんだが。

中に入っていたのは、傷薬にタウンマップ、トレーナーカード？ とノートと筆記具、あとモンスターボールが6つ。トレーナーカードは自分の名前だ。手の込んだ夢である。

モンスターボール。恐らく、俺のポケモンが入っているのだろう。全く記憶に無い。

投げてみる。……空か。次、空。空。空。開いた。中から現れたのは、ローブシン。想像するに、ゲームで自分が使っていたローブシンなのだろう。ローブシンしか居ないのは些か複雑な気分である。ローブシン以外にも気に入っているポケモンはいた。まあ、仕方ない、か。

「俺がわかるか？」

ローブシンは黙って頷いた。

恐る恐る手を伸ばす。ローブシンは動かない。やがて、自分の手がローブシンに触れる。カッチカチだ。なんとという上腕二頭筋。体温もちゃんとある。随分リアルな夢だ。

頬を強めにつねる。

痛い。

痛みまであるとは、どこまでもリアルだ。現実かと思う程のリアルさと頬の痛みで視界が霞んできた。

項垂れていると、ローブシンが頭を撫でてくれた。良いやつだ。年の功だろうか。孵化の時期から考えて年齢的には一歳ですら無いのだが、それは考えない方が良かった。う。

ローブシンとは言え年下に慰められてちゃいけない。気を取り直していこう。荷物

の中にタウンマップがあった筈。

マップを見た所、陸地の形状的にここはホウエン地方のようだ。しかし、当然ながら自分が何処に居るのか、という情報が表示される筈もない。

落ち着け、K O O Lになるんだ。地方がわかっただけでもまだマシじゃないか。地方が判ればポケモンの分布が解る。分布が判れば大体の位置がわかる。

ローブシンをモンスターボールに戻し歩きだす。が、ゲームとは違い、そうホイホイ野生のポケモンは見つからない。

暫く歩くと、海があった。……だからなんなのだろうか。未だここが何処かはわからない。強いて言えば海に面した森であるということがわかった。……まあ、上手くやればここで水分の補給はできるので良しとしよう。やり方は知らない。

海を眺めながら三角座りをしている。良い天気だ。

……そう言えば、ローブシンはゲームの通りなのだろうか。

「ローブシン、お前、技は普通に使えるか？」

ローブシンは無言で頷いた。

ごくりと唾を飲み込む。ならば、だとすれば、きあいパンチも、使える、ということになる。

「きあいパンチも……?」

当然と言わんばかりである。

「なら、えつと……あの木に向かってきあいパンチ」

近くにあった巨大な木を指差して指示を出す。

ローブシンが構えると同時に、拳が光りだす。1……2……えつ、もう撃つの?

ローブシンの放った拳は、しっかりと木に命中した。木の実が落ちてきた。飯ゲツト。

いや、そんなことを考えてる場合じゃない。

「……もう一回、もう一回だ」

ローブシンは先程と同じようにきあいパンチを放つ。結果は先程と変わらない。

「どういう、ことだ……?」

俺の言葉にローブシンは怪訝そうな雰囲気だ。だがそれはこちらも同じ。

「それは、きあいパンチなのか……?」

ローブシンは頷く。ローブシンが嘘を吐いているとは考えにくい。わざわざそんなことをする意味がない。

「……! そうだ、全力で、全力で、きあいパンチを撃つてみてくれ」

ローブシンの様子をしっかりと観察する。……全体的に先程よりも力が込められてい

るように見える。溜めも少し長かった。前の二発よりも明らかに威力の上がった拳は、遂に木の幹をへし折った。

「……ありがとう、ローブシン」

ローブシンはきちんと俺の指示に従ってくれている。ならば、これは紛れもない事実なのだろう。

ローブシンが全力を出して漸く、木が折れた。

木が頑丈だった？ 確かにその可能性はあるだろう。見た目的にも立派な木ではあった。

しかし、仮にも戦闘用の技だ。撃つ時にはそれなりの力を込める筈。

それが三発。いや、もしもあの時「全力で」と言うことを伝えていなければまだ折れていなかった可能性もある。

……そうだな、目を背けても仕方ない。認めようじゃないか。

この世界において、きあいパンチは、

弱い。

一日目 晴れ

この世界での日付がわからないので一先ず、○日目、という表記をすることにする。
まずは今日わかったことを整理しよう。

・ここはホウエン地方（推定）

・何処かの海に面した森

・きあいパンチが弱い

改めて確認して悲しくなる。

飯はローブシンのお陰で入手できた木の実。木の実はそんなに使ってなかったから名前はわからない。あまり美味しいとは思えなかったが、一先ず空腹を凌ぐことはできたのでよしとしよう。

今後の方針は

・森を出す

・きあいパンチをどうにかする

この二つが中心、かな？

森を出ることに関してはそんなに難しくないと思う。鳥ポケモンでも仲間にできれば空から町を見つけてもらえる。海沿いだし、キヤモメとかだろうか。どうせなら夢特性を粘りたい所だが、無理は禁物だろう。ボールも少ないし。疲れたので寝る。

二日目 晴れ

キヤモメが飛んでいるのは見えたのだがこつちにこない。暫く待ったが俺が耐えきれなかったので、森の探索をすることにした。

道中でクソザコナメク……ナマケロを捕まえた。

寝ている所を見つけたのでボールを投げたら捕まったのだ。ナマケロからしたら寝て起きたら捕まっていたという状況なのだが特に何のアクションもなかった。こいつは大物になると思っただが、よく考えるとただ鈍いだけかもしれない。

木の実をあげたらゆっつくりと動きだし、両手を上げた。喜びを表現しているのか……？ コロンビアを思わせるポーズだった。某UCのBGMが脳内で流れた。可能性のナマケモノ……何を書いてるんだか。将来的に種族値の化け物になることを考えればそんなに間違っていない気がする。

まあそれはそれとして。ナマケロが生息しているということは、この森はトウカ力の森、

ということなのだろう。トウカの森ってこんなに広かったんだっけ？ ゲームと現実の差異といった所だろうか。いずれにせよ、森から出られればそう遠く無い位置にカナズミなりトウカなり町があるだろう。

今日も飯は木の実。肉が食べたい。まあ、町に行くまでの辛抱か。……何の肉なんだろう。肉ってあるんだっけ？

三日目 晴れ

筋肉痛で動けない。いや、動きたくなかった。ので、ローブシンのきあいパンチの実験をした。といっても大したものではないが。

まず、ゲームと同様、攻撃を受けたら中断されるのか。

ナマケロの特性もあってテンポは悪かったが、何とか協力してもらい実験した。試行回数は10回。

結果、ローブシンは技を出すことが出来なかった。捕まえたばかりのナマケロのひっかくで中断されるタイプ最強技……。

しかもローブシンは進化の最終形。対してナマケロは初期段階だ。集中ってなんなんだろう。

次、攻撃以外の要因で妨げられるのか。PPのシステムがあるのかはよく分からない

ので取り敢えず3回ずつ行った。

1、木の実をぶつける。

場合によっては「なげつける」になってしまいかもしれないのでナマケロではなく俺が投げた。当たり所によるみたいだが、中断できた。

2、くすぐる

変化技にもあつた気はするが、取り敢えず今回は俺がくすぐつた。……中断できた。人間の手でできたつてことはポケモンの技なら余裕だろう。

3、足場を崩す

適当に石などを積んだ上で溜めて貰つた。積んだものを崩したら、中断できた。……正直、流れから考えるとこれはやらなくても結果は見えていた。

結果を見ればわかる通り、思っていた以上に貧弱だ。ローブシンが悪い？ そんな筈はない。意地っ張りな性格だ。ナマケロのひっかくで一回止められた時点でかなり頭に来ていたらしい。10回も繰り返し返したらそれはもう目も当てられない怒りようだった。それでも無闇に暴れない辺り流石といった所だろうか。

あと、PPは特に気にしなくても良さそうだ。実験が終わつた後普通にきあいパンチを4、5回木に向けて撃っていた。そう言えば、アニメでもきあいパンチ連打してるよいうな奴が居たような。

さて、実験で確認して、しみじみ思った。

きあいって、何なんだろう。

四日目 雨

唐突な雨。傘を持ってないって本当に困った。町に行けたら買わなきゃな。

いつもなら夜に日記を書いていたが雨の中では何もできないので昼間から書いている。早く止まないかな。

今は木のウロ……には入れなかったので取り敢えず木の下に居る。何とか雨を防げるけど勢いが強くなったらアウトだな。

できることもないので昨日の続きでもしようか。

きあいとは何か。

きあいパンチ、きあいだま、きあいだめの中で使われる「きあい」

これは如何なるものなのだろう。各技の説明を思い出せないが、きあいパンチは精神を高めてどうのこうのする技で、きあいだまは渾身の力とかで攻撃する技、きあいだめは集中力を高めて……急所に当たりやすくなるんだっけ。

精神力の向上と格闘の強化の関係はまあ、何となくわかる。集中する、というのはき

あいパンチときあいだめに共通している所だ。結果が違うが。

きあいだまは……あれも格闘最強技だよな。特殊の。波導弾と何が違うんだらう。いや、考えるまでもないか。波導は波導だもんな。でも波導弾が必中なのに対してきあいだまは70%……いや、この世界ならテクニク次第でどうでも当てられるかもしれないが……どっちもきあいとか波導とかぼんやりしたものを纏めてぶつけてるのに、この差は……。

きあいだまは色んなポケモンが覚えられるが波導弾は覚えられるポケモンを選ぶつてのも一因か……？

力任せに捻り出したエネルギーを球体にぶつけるのと、普通は感知出来ないエネルギーを操ってぶつけるのではまあ威力、命中共に違うのも納得だな。

とは言え、結局きあいが何なのかはわからない。要はパワーアップする何か、もしくはパワーそのものという認識なのだろうか。あやふやな認識できあいパンチを何とかできるとは思えない。

日記（レポート？）を書く手を止めて、ローブシンに話しかける。

「きあいって何だ？」

知らん、とでも言いたげに首を振る。やっぱり無口な奴だ。

わからないものをどうして扱えるのか。

俺も何か修行とかしたらきあい理解できるようになるのだろうか。

「……精神修行、とか？」

修行、と聞いて思い付いたのは滝行。丁度目の前には未だやむ気配の無い雨。どっちみち濡れるのは時間の問題か。

「ローブシン、荷物と服を頼む」

パンツ一丁になり、木の下から出て、胡座をかいて座る。パンツが湿って気持ち悪い。いや、考えてみたら雨の中なんだから全身ずぶ濡れだ。

雨の中、パンツ一丁で胡座をかいて目を瞑っている少年。字面でもうヤバい。おっさんじゃないのが救いなのだろうか。

いかんいかん。集中しよう。

どれ程の時間がたっただろう。随分と、静かな気がする。

集中していると、何かが頭に浮かんで来た。

——もっと、熱くなれよ!!

!?

——強くなりたくば、喰らえ!!!

—— 飛べよおおおおおお!!

—— オンドルルラギツタンデイスカー!!

—— 俺は人間を止めるぞ! ジョジョー!!

—— てめーらにはおしえてやんねー!!! くそしてねろ!!!

—— 満足させてくれよオ!!

—— なに、きあいパンチが弱い? それは、無理に強く撃とうとしているからだよ。逆に考えるんだ。弱くたっていいさ、と考えるんだ

—— 行け、ピカチュウ! 10万ボルトだ!!

—— まずは、その幻想をぶち殺す!

—— ディアバウンドの攻撃! 螺旋波動!!

—— ツエーイ☆

—— 二度もぶった! 親父にもぶたれたことないのに!!

—— オノオオオレエエ!!!

色んなものが浮かんでは消えていく……もしかして、これが、**真理**……!!

色々おかしいのが混ざっていたような……いや、それすらも**真理**なのだろう。**真理**とは全てであり、全ては**真理**。そういうことなのか……!!

こうしちゃいられない!!

さて、あの日から何日たったんだっけか。どうでもいいや。

今日は、修行の仕上げだ。浜辺で、海に向かって立つ。

「ローブシン、構えろ」

ローブシンは拳を腰だめに構え、目を瞑った。集中、しているのだろう。だが、初めて見た時とは明らかに違う。その拳は光を放たない。その体はピクリとも動かない。体全体が一つの巖の如く、揺るがない、静かな姿となっている。

やがて、カツ!! と目を見開いた。十分に力が溜まったのだ。

「きあいパンチ!!」

指示が出た瞬間には、既に拳は放たれていた。ローブシンの拳は、音を置き去りにしたのだ。遅れて響く爆発音。

「パーフェクト」

空気が、波が、弾けた。そして……海が割れた。

きあいとは、力。きあいとは、心。きあいとは、魂。きあいとは……全て。

きあいパンチとは、超越。

何日目かは知らん 晴れ

久し振りの日記だ。まあそんなことはどうでもいい。

真理まことに至つて以降、町に降りるとかどうでもよくなり、ずっと修行を行っていた。

そしてとうとう修行が終わった。明日、町に降りる。カナズミのジムで早速バトルといこう。念のため、ローブシンは出さないことにする。……まあ、出すまでもない、とも言えるかもしれない。

これから、世界に目にも見せてやろう。

きあいパンチが最強であることを、証明する。

2

最初のジムがあるカナズミシティを目指してトウカの森を歩いていると、デボンコーポレーションの研究員さんに出会った。

デボンコーポレーションと言えば、このハウエンで一番の企業。ポケナビとかを開発したのもこの会社だ。大手の会社なんだし冴えないように見えるけどこの人も結構なエリートなんだろう。

「あー、トレーナーさん！ この辺でキノココ見てませんか？ 私あのポケモン好きなんですよー！」

初対面の私に対する一声目がこれだ。研究員さんて変わってるんだね。

「見てないです」

「そうですか……」

「頑張つて探せばいると思いますよ」

「そうですよね！ ありがとうございます！」

そのまま草むらに入って行こうとする研究員さん。

「キノココ探してて良いんですか？」

「えっ?」

「いえ、荷物持つてるみたいだから」

研究員さんの手にある荷物を指差す。研究員さんは手元に視線を落として目の色を変えろ。

「そうだった! 早くカナズミの本社に届けないと!」

慌てて駆け出す研究員さんだったが……

「へっへっへ、見つけたぜ! おい! その荷物をこっちによこしな!」

怪しい人物に行く手を塞がれてしまった。研究員さんはどうする? なんて。

「だ、誰ですかあなた!? 渡すわけないでしょう!」

「うるせえ! 渡さねえなら力づくで奪ってやるぜ!」

そう言つて怪しい人はポケモンを繰り出した。

……ポチエナか。怪しい人物の癖にちよつとかわいいポケモン使つてるなんて……。

「ぷっ」

あ、吹き出してしまった。

「ああん?」

「あつ! トレーナーさん! 助けてください! 私今戦えるポケモン持つてないんです」

言うが早いのか、研究員さんは私の後ろに隠れた。いい大人が……カッコ悪。

「お前、さつき笑いやがったな？ 喧嘩なら買ってやるぜ！」

面倒だな。カナズミシティまでどのくらいかかるのかわかんないし。でも研究員さんがなあ……。後ろに目をやると、研究員さんは生まれたての小鹿のように震えていらつしやった。

やるしかないのか。

「先手必勝！ ポチエナ、体当たり!!」

ポチエナが走ってくる。まだこっちはポケモン出してないのに。

でも、まだポケモンを出していなかったのは幸運だったのだと思う。

モンスターボールに手をかけたその時、轟ッ！ という音と共に目の前を何かが通りすぎて行ったから。

木々をなぎ倒しながらやってきたその何かに巻き込まれて、ポチエナは紙のように宙を舞い、木にぶつかつた。

見るまでもなく戦闘不能だろう。

「うん、良い威力だ。ナイスパンチ」

声が出た方を見ると、私と同じくらいの年に見える男の子とヤルキモノが立っていた。

「丁度人も見つかった。ツいてるね」

彼らの後ろには、彼らが移動する時に邪魔だったらしい木が根本から折れて散らばっていた。

「俺はコブシ・レン。森暮らしの短パン小僧さー！」

彼は長ズボンを穿いていた。

旅立ちの日 晴れ

俺達の旅立ちを祝うような快晴だった。

森を歩く、と言っても俺達が居たのは道から外れた森の外れ。まともな道などない以上まともには歩けば消耗するのは当然だ。しかし町に降りると決めた以上そう時間は掛けたくない。

誰かは忘れたが先人は言っていた。「歩いた後にどうのこうの」つまり、道は切り開くものなのだ。故に、キガヨケテル（物理）によって進んだ。避けられなかった木については察してもらおう他ない。

道中、人を見つけた。この世界に来る前ぶりの人だった。デボンコーポレーションの연구원とポケモントレーナーのハルカ。この二人もカナズミに行くと言うことだったので同行させて貰った。

この組み合わせだということはアクア団だかマグマ団のイベントの後だったのだらう。

研究員さんはキノココを見つけることは出来なかった。実はキノココを持っていることは内緒である。

あとハルカちゃんやんはセンリさんのお子さんらしい。つまり、主人公だ。

森の出口辺りでスバメを捕まえた。俺を追いかけてきたらしい。キガヨケテル（物理）に怒っていたのかもしれない。一応ポケモンとかは巻き込まないように気を付けてはいたんだが。取り敢えず、その執念が気に入ったので捕獲した。

で、色々あったような無かったようなだが、無事、カナズミについた。

文明万歳。ポケモンセンターって素晴らしい。声を大にしてそう言いたい。ポケモンを回復できて飯が食べられて宿泊もできる。ベッドで寝るとか森暮らしには想像もつかない贅沢だ。

明日はジムに挑む。そう言えばハルカちゃんも一緒に行くらしい。主人公のお手並みを見せてもらおうとしよう。

「おはよう、ハルカちゃん」

「おはよう」

「じゃ、行こうか」

「うん」

今一緒に歩いているのは、昨日のヤルキモノの人。コブシ・レンと言うそうだ。カナズミジムに挑むそうなので一緒に一緒にしている。

「そう言えば、どっちから挑戦する？」

「あー、俺は別にどっちでも良いんだけど……急いでる？」

「そんなには」

早くパパに挑みたいとは思うけど、旅はしつかり楽しみたいからね。

「うーん、じゃあ、ハルカちゃん先どうぞ」

「何で？」

「カナズミに早く来れたのはハルカちゃん達のお陰だからね」

「そうかな？」

あんな風に木を吹き飛ばしながらならそんな時間は掛からなかったと思うんだけど。

「あ、もしかして」

「ん？」

「ジムリーダーのポケモン、偵察するつもりでしょ」

「そんなことするわけないよ。必要ないし」

ジムリーダーに挑むのにそう言えるのは凄い自信だと思う。初めてのジム戦だって言ってたし。……でも、あのヤルキモノなら負けることはなさそうだよね。

そんなことを話していたらジムの前に着いた。

「じゃあ、お先に」

「たぶん勝つとは思うけど、頑張ってるね」

「はい」

○月×日 晴れ

一先ず見学なので書いている。

カナズミジムに入って驚いたこと。ツツジさんがロリじゃない。もしかしてアドバンス時空なのか。そう言えばハルカちゃんもORASとは服のデザイン違うな。肩が出てる系ってことは、エメラルドかな？

バトルが始まった。ツツジさんの初手はイシツブテ。対するハルカちゃんはワカシャモ。ハルカちゃんはアチャモ選んだだね。ケッキングパパにも有利だし。ここでもまあ、わりと、有利だよな。うん。イシツブテ相手は余裕そう。はい、勝ちです

ね。2体目もイシツブテ。ここも問題なく突破出来るだろう。問題は次なんだよなあ。

ノズパス登場。面倒だよな。なんかやたら硬かった記憶がある。ハルカちゃんはど
うするのか……交代!?! 別に何もおかしくなかった。成る程、キノココか。

あとは省略して良いだろう。ハルカちゃんの勝ち。以上。

次は俺だな。まあ負けるとかありえないけど。

ツツジさんのポケモンの回復を待つてから、レン君がバトルフィールドに立った。

「先程聞いていたかもしれませんが、私はツツジ。カナズミシティジムのジムリーダー
です」

「レンです。しがないポケモントレーナーですが、よろしくお願いします」

「良いバトルをしましょう」

「はい」

やっぱりツツジさんの初手はイシツブテ。さつきそうだったし、変える必要もないよ
ね。

「行け! スバメ!」

えっ……。

レン君の方は予想外。何でスバメ？ ヤルキモノでいいじゃん。

「……あなたはタイプ of の相性を知らないんですか？」

「知らない筈ないでしょう」

「なら、わかると思います。スバメを出したのは間違いですよ」

これはツツジさんに同意するしかない。レン君は何を考えてるんだか。

「それを判断するのはまだ早いです」

「……まあ、良いでしょう。イシツブテ、体当たりです！」

「スバメ、きあいパンチ！」

レン君は何を言ってるの？

ほら、スバメも困惑してる。

「昨日教えたじゃないか！ 頑張れ！」

そんなことやってる間に、イシツブテの体当たりが命中。結構なダメージが入ってそう。

「スバメはきあいパンチを使えないでしょう」

「誰がそう言ったんですか？」

「誰が、というか、常識です！」

でもレン君は譲らない。

「スバメ、もう一回だ！ きあいパンチ！」

やっぱりスバメは動かない。レン君の指示に応えようとはしてるみたいだけど、どうにもできないみたいだ。

「無理難題をポケモンに押し付けるのは止めなさい！」

「無理なんて誰が決めたんですか！ スバメならできます！」

レン君の考えてることがわからない。スバメにパンチは無理でしょ？

「スバメ、お前ならできる。お前だってヤルキモノのきあいパンチを見ただろ？」

見ても出来ないと思う。

「ヤルキモノにできてお前にできないなんて、そんなことあるわけ無いじゃないか！」

きあいパンチはできないよ。

「ヤルキモノとお前と、何が違うって言うんだ？ お前には骨がある。体がある。口がある。目がある。お前とヤルキモノは同じなんだ。違う所なんか無いんだ！」

骨格が違うと思う。

「もしかしたらお前はきあいパンチを履き違えているかもしれない。だから教えてやる！ きあいパンチには、腕なんかいらさない！ 拳なんかいらさない！ お前には体がある！ 魂がある！ だったらきあいもあるんだ！ きあいさえあれば、できる!!」

もう何を言ってるのかわからない。

「もう見てられません。イシツブテ、岩石封じ！」

「お前の根性、見せてくれ！ これでラストだ！ きあいパンチ!!」

スバメにイシツブテの放った岩が迫る。今度もスバメは動けないかも……えっ？ スバメは岩を回避してイシツブテに突っ込んでいく。

「イシツブテ、体当たり！」

イシツブテは転がりながらスバメを迎え撃つ。激突の瞬間。拳が見えたような気がした。

「見せて貰ったぜ。お前のきあいパンチ」

イシツブテとスバメは相討ちで戦闘不能。でも、モンスターボールに戻る時のスバメは満足げに見えた。

そこからの試合は、ヤルキモノのきあいパンチですぐ終わった。最初から出せばよかったのに。

「えーっと、お疲れ様」

「ありがとう。ハルカちゃんもお疲れ」

「(色々と) 凄いバトルだったよ」

そう言うと、レン君は嬉しそうに笑っていた。

その後、レン君はポケモンセンターに行ってから色々とぶらぶらするそうだ。私は別行動を取ることにした。

「どこ行くの？」

「病院」

「風邪でも引いた？」

「違う違う。眼科だよ」

レン君は心配そうだった。

あと、眼科でツツジさんと会った。

3

(○月×日の続きから書かれている)

俺のバトルも無事終了。スバメもよく頑張った。ぶつつけ本番だったものの、それに仕上がったと思う。いいセンスだな。

そしてヤルキモノの安定感。喜びのコロンビアは癪みみたいだ。ナマケロの時と同じようなすつとぼけた表情で両手を掲げているのは笑えた。いい感じに嬉しいとやっている気がする。今までもバトルして勝ってきただろうに何がそんなに良かったのかと思っただが、そう言えば初の対人戦だった。

森暮らしだったからね。仕方ないね。

ハルカちゃん俺のジム戦を見た後病院に行った。眼科だそうだが……心配だな。バトルの時に砂ぼこりでも入ったりしたんだろうか。俺も気を付けよう。

その後はシヨップでボールを補充してカナシダトンネル方面に向かった。捕まえらるるポケモンは捕まえておきたい。

が、途中で呼び止められた。アロハシャツのメタボデイのおっさん。そう、エニシダさんだ。ジムでのバトルを見ていてくれたらしい。おもしろいバトルだったそうだ。

光栄だね。おもしろい、が滑稽っていう意味じゃないことを祈ってる。

でまあ、思ったより盛り上がっちゃってバトルについて談笑したら、独特な格好のお兄さんが走っていった。いや、逃げてたのかな？

で、それを追いかける見覚えのある研究員さん。気づかれて荷物取り返してくれって頼まれちゃったよ。

これ、俺の仕事じゃなくない？ 別にいいけどさ。

エニシダさんに別れを告げカナシダトンネルへ。入り口の前にご老人。ハギさんだ。ピー子ちゃんですわわかってました。

バトルするのは少し面倒な気がした。上手く説得する方向で動いてみた。

駄目だったよ。あいつは話を聞かないからな。

今日はキノココの御披露目をした。キノガツサにきあいパンチができるんだからキノココにもできる。そう思ってやらせてたんだが、勢い余って壁にめり込んでしまった。要練習、だな。まあ、無事に荷物もピー子ちゃんも取り返せたのでよしとする。

研究員さんは大層喜んでくれて、デボンコーポレーションの本社に連れてってくれた（連行されたとも言おう）。俺はポケモン捕まえたかったんだが。

途中でハルカちゃんを見つけたので一緒に連行した。

ポケナビをもらった。手紙を預かった。ム口行き確定。まあ、格闘タイプのジムリー

ダーに是非きあいパンチを見て貰いたいから良いけどね。

更に研究員さんから荷物を預かった。カイナ行きも確定。釈然としないでござる。

あとポケモンを捕まえた。エネコとツチニンとゴニョニョ。どんなメンバーにするか迷ったが、ツチニンの進化に備えてゴニョニョとエネコに外れて貰った。

そんな感じ。

「レン君、ムロタウンにはどうやって行くの?」

「ハギさんに乗せて貰う」

「誰?」

「キャモメ好きの船乗りのおじいさん……だな」

レン君にそんな知り合いが居たことにびっくりだ。昨日もデボンの研究員さんにごく感謝されてたし。

「そう言えば、ハルカちゃん」

「何?」

「トウカの森ってカナズミ側から抜けるとどのくらい掛かる?」

「会った時みたいにやったらばすぐじゃないの?」

直線で抜けられるのは大きいと思う。環境にはすごく悪そうだけど。

「あれは道がわからなかったからだ」

「そうなの？ えーっと、確かカナズミからなら道沿いでも割と早かったと思うよ。でも、どうして？」

「ハギさんの家がトウカの森の向こうだから」

「……カナズミからの船を待つんじゃないダメなの？」

「旅費が浮く」

カナズミシティを出る辺りに差し掛かると、見覚えのある人物が立っているのが見えた。

「あっ！ ハルカ！」

お隣さんになったユウキ君だ。オダマキ博士の息子さんで私よりトレーナーとしてちよつと先輩。でも前にバトルした時は私が勝った。

「こんにちは、ユウキ君」

「こんにちは、元気そうだな。ポケモンは捕まえてる？ 俺は結構捕まえたよ」

「ぼちぼちな」

「そつかそつか……それで、君は？」

「俺はレン。通りすがりの短パン小僧さ」

レン君は普通に長ズボンを履いている。

「そうなのか。俺はユウキ。最近の短パンって色々あるんだな！」

「よろしく、ユウキ君。最近のトレンドでは逆に長ズボンを履くんだ。だから、君も短パン小僧さー！」

「そうだったのか！ ありがとう！ じゃあ俺も今後は短パン小僧を名乗るよ」
そんなトレンド聞いたことない。

ユウキ君はオダマキ博士に似てるのか、ちよつと抜けてる所があるんだよね。

「そうだ！ 出会いの記念にバトルしようぜ」

「……オツケー！ やろうか！」

「じゃあ、審判は私？」

ムロタウンに急がなくて良いの？ まあ、いいか。

出番少ない上にヒーローでもないのに毎回遅れて登場するライバルに出会った。でもテンション上がってあること無いこと吹き込んでしまった。

それならバトルを挑まれた。笑顔だけど、もしかして怒ってるのだろうか？ ここはせめて、満足できるバトルを提供せねば。

「じゃあ……使用ポケモンは、何体にする？」

「俺は何体でもいい」

「同じく」

「ならもう、私が決めるよ。……2体でいいね。じゃあ、どうぞ」

ハルカちゃん、進行が雑じゃないか？ 別にいいけどさ。

「よし、行け！ コータス！」

「コオオオオ！」

コータスの鳴き声で波紋の戦士を思い出した。それはともかく、見た感じあんまり育ってなさそうだ。この時期、行ける範囲でどうやってコータスなんぞ捕まえたんだろう。……チートか？

そんな筈ないよね。

「行け！ スバメ！ きあいパンチ！」

ボールを投げながら指示を出すというアニポケクオリティ。使わせていただきます。

スバメはボールから飛び出した勢いもそのままにコータスに向かって突っ込んでいく。

「スバメがきあいパンチだって!？」

驚愕を露にし、一瞬呆気にとられるユウキ君。

「迎え撃てコータス！ 体当たり！」

ユウキ君の指示でコータスも動き出す。しかし、既にスバメのきあいパンチは準備が整っていた。きあいの込もったスバメの突撃。溢れるきあいは拳を形作る。

きあいとは真理。真理とはきあい。即ち、きあいパンチとは真理の一撃。

体当たりごときで止められる筈が、無い。

「コータス、戦闘不能」

「そんな……」

「スバメ、ナイスパンチ！」

「スバツ!!」

スバメも誇らしげだ。

「凄いパンチだな。でも、こいつはどうか？ 行け、ミズゴロウ！」

続いて出てきたのはミズゴロウ。ハルカちゃんはまだもうワカシャモにしてたんだが。

……ペースは人それぞれだよ。

「続けて行くぞ！ きあいパンチ！」

「引き付けてかわすんだ！」

スバメは矢のように、いや、拳のように突っ込んでいく。

が、ミズゴロウはユウキ君の指示に沿って、上手く避けた。バトル慣れしてるな。

対するスバメは、まだ経験不足感が否めない。きあいパンチも形になってきたばかり

だからな。

だが、

「電光石火で回り込め！」

「っ！ ミズゴロウ、後ろだ！」

「きあいパンチ！」

今度は、避けさせない。

「ミズゴロウ、戦闘不能」

——
やっぱり、レン君は意味わかんない。なんかもう、スバメも普通にきあいパンチしてるし。

……いやいや落ち着くのはハルカ。あれはパンチじゃないでしょう？ 確かに拳に見えたけどあれがきあいパンチだなんて……おかしいはずよ。 確かに拳に

でも昨日の眼科では異常無しって言われたんだよね……。

「凄いなレン君！ スバメがきあいパンチを使えるなんて!!」

「スバメだけじゃないよ。ポケモンは皆、すごい力を秘めているんだ。トレーナーである俺達は、その力を引き出してあげなくちゃね」

「そっか、そうだよな！ 俺も頑張らないと！」

ユウキ君素直過ぎるんじゃない？

レン君がもつともらしいこと言ってるってのもあるけど。でも、だからと言ってレン君の言ってることを真に受けるのは不味い気がする。……きつと私の常識がそう言ってるのね。

「じゃ、俺行くよ。またなハルカ！ レン！」

「あ、うん、またね！」

「おう。きあいパンチを覚えたくなったらいつでも言ってくれ」

ユウキ君は楽しげな笑顔で去っていった。……変な影響受けない内に別れたのはユウキ君にとって良かったのかな？

いや、それだと私はどうなるのよ。

「どうしたの？ ハルカちゃん」

「あ、何でもないよ」

その後は特に問題なくトウカの森を抜けた。何だろう、何も無い方が逆に不安になる。こう言うの何て言うんだっけ？ ……嵐の前の静けさ？ じゃないと良いんだけど。

「ハギさん、入りますよ」

「ここら待って待ってピー子ちゃん。……ん？ おお、レン君。そちらのお嬢さんはお友達かな？」

友達……？ いや、うん、まあ、友達だよ。一応。

「あ、はい。ハルカです。よろしくお願ひします」

「よろしくな」

普通のおじいさんだ。なんかキヤモメ追い掛けてたけど。レン君の意味わからなさからしたらひどくまともに見える。

「してレン君、わしの所に来たという事は、早速海を渡りたいんじゃないかな？」

「はい、ムロとカイナにそれぞれ用事が」

「ムロにカイナか、任せなさい。わしに掛ければアツーと言う間じゃ」

そんなやり取りの後、早速船に乗せてもらった。中型のボートだ。

そう言えば、気になったのでハギさんに聞いてみた。

「あつと言う間って言ってますけど、そんなにムロタウンって近いんですか？」

「ん？ いや、そんなに近くは無いなあ」

「じゃあどうして」

「飛ばすからじゃよ」

「えっ」

○月△日 晴れ

今日は
いる)

酔った(震えた字で書かれている)

(急に引つ張られたかのように長い線が引かれて

(○月△日の続き)

もうハギさんの運転する船には乗りたくないもんだ。しかし残念。ハギさんの船で来ちゃったから帰るにしてもハギさんの船に乗る他無い。何か理由つけて乗らないって手も無いが無いけど、親切でやってくれてることだからね。

さて、ムロタウンにやって来て、まず石の洞窟へ向かった。ムロジム？ いやいや、取り敢えず届けるもん届けるべきでしょ。カイナにはまだ行かないけどね。

嘘吐いた。本当はポケモンセンターで休憩してた。ハギさん(運転)激しすぎイ！
なんてね。

体調戻ってから石の洞窟へ。確かにまあ、洞窟って言うからには暗かったよ。でもさ、あんなあからさまな段差登れないとか、ないじゃん。登ったよ。きあいでき。森暮らしを舐めちゃいけないね。

ハルカちゃんも普通に洞窟探検しながら大誤算探すって。大誤算は段差登った先の部屋に居るのに。

そう思っていたんだよ。その時は。

居なかった。まさに大誤算。もしかして入れ違いかと思つて一回ムロタウンに戻つて話を聞いて回つたけど特に戻つてきた姿は見えないらしい。ならまだ洞窟に居る筈。それで洞窟に戻つて、今度は正規のルートを行つたわけだ。そんな訳あるまいとは思いつつも一応マツハ自転車で登る系の坂登つたりもしたよ。

自転車なんて無くたつて問題無い。あらゆる道具つてのは人の体の延長なんだ。自転車は人の足の延長。道具を使えば楽つてだけで、道具無しにはできないつてことにはならないのさ。やはり森暮らしのきあいを舐めちゃいけない。

でも居なかつたんだよ大誤算。ほんと、ダイゴさんだよ。あ、逆だ。悔しくて帰りがけにケーシイとココドラを捕まえた。ココドラはボックスに送られた。

で、早速捕まえたケーシイのレポートでムロタウンのポケモンセンターに戻つたら、居るではないか。大誤算とハルカちゃん。エントリーコール使えよつて思ったけど登録してなかつた。なら仕方ないね。

手紙は渡したので取り敢えず目的は達成。
疲れたのでジムに行くのは明日にする。

「お疲れ様」

「ダイゴさん見つけたって教えてくれたらこんなに疲れなかったんだけどな」

「そんなこと言われても。先行つちやっつたのはレン君じゃない。しかも道なんて無いところを」

「道は自分で切り開くものだよ」

レン君の謎のバイタリテイは今日も健在だった。でもそれに従った結果疲れてるんじゃないや世話無いね。

「ジムは明日にするの？」

「うん、ハルカちゃんは？」

「明日、かなあ」

レン君のバトルを見ていると、常識が歪んでいく気がする。だからできれば観戦したくない。……でも、確かこのジムリーダーは格闘タイプの使い手だとか。

格闘タイプの専門家はレン君のバトルを見てどんな反応をするんだろう。ちよつと気になる私がいる。

「今度はレン君からね」

「はいはい」

そして翌日。ムロジムへ向かう。今日のレン君は心なしか生き生きしてるように見

える。

「楽しそうだね」

「そりやそうさ。だって格闘タイプのジムリーダーと戦うんだからね」

「レン君は格闘タイプの使い手ってわけじゃないじゃん」

今のところ私がみたことあるのはヤルキモノとスバメだけ。どっちもノーマルタイプだ。

「確かにポケモンは使っていないね。でも、きあいパンチは格闘タイプの技だ。だから俺も立派な格闘タイプ（の技）の使い手さ」

「ああ、うん、そうだね」

……最近、きあいパンチっていう響きが嫌になってきている。

「ようこそチャレンジャー。ボクはムロタウンジムリーダーのトウキ！ この辺りの荒波に揉まれ、暗い洞窟で修行しているのさ！」

「はじめましてトウキさん。俺はレン。きあいパンチ使いです」

短パン小僧とは名乗らないのね。いや、それよりも、専門家相手にきあいパンチ使いなんて名乗っちゃったよ。

「へえ！ 君もきあいパンチを使うんだね！ ワンリキー？ いや、マクノシタかな？

……あ、ごめんよ。バトルをすればわかることだね」

スバメです。願わくばスバメとヤルキモノで終わってほしい。

「さあ、始めようか！ 行け！ ワンリキー！」

「スバメ！ お前のきあいを見せてやれ！」

出たー。最近のレン君の定番、初手スバメだー。……駄目だわ。テンション上がらない。

……あれ？ 何でスバメは飛んでないの？

「スバメか……相性はそっちが有利だね。でも……ワンリキー、地球投げだー」

地球投げ……確か、使うポケモンが育つてれば育つてるほど威力が上がる技。相性は関係なくダメージを与えてくる……ってパパが前に言っていた。

レン君は指示を出さない。一体どうするつもりなの？ いつもならきあいパンチって指示を出してる筈なのに。

スバメがワンリキーに掴まれた。

「今だ！」

「なに!？」

スバメが翼を一気に広げた。ワンリキーの拘束が外れ、ボディが空になる。

「叩き込め！ きあいパンチ！」

スバメはそのまま翼を振りかぶり、ワンリキーを打ち据えた。……また、拳が見えた。なんなのこの現象。

ワンリキーはそのまま戦闘不能。

「いいね！ 凄いやレン君！ 作戦もそうだが、今のきあいパンチ!! 拳圧だけでビリビリ来たぜ！」

「恐縮です」

けんあつ？ 拳圧って言ったの？ 風圧の間違いなんじゃ……。

「これは期待以上のビッグウェーブだ！ 楽しくなってきた！ こつちもやるぞ！ アサナン、きあいパンチだ！」

トウキさんの投げたボールから飛び出したアサナンは、拳を光らせながらスバメに向かって走っていく。

「迎え撃つぞ！ きあいパンチ！」

スバメも翼を広げてアサナンに向かって突っ込んでいく。いつものきあいパンチだ。

……待ちなさいハルカ。いつものきあいパンチって何？ スバメがいつもきあいパンチを撃つなんてそもそもおかしいでしょう？ 惑わされちゃいけないわ。

二つの拳（？）はぶつかり合い、爆発した。

パンチがぶつかり合って爆発するって何なの？

「ハハ、引き分けみたいだね」

「ですわね」

アサナンもスバメも目を回して倒れていた。

「ボクはこいつがラストだ。頼むぞ！ マクノシター！」

「……ケーシイ！」

ケーシイかあ。レン君捕まえてたんだ。でも……どうせきあいパンチなんでしょ？

「さあ行くぞケーシイ、きあいパンチ！」

知ってた。

ケーシイは考える。今のこの状況を。

これはトレーナー同士の対戦。そしてこの場にポケモンは向かいにいる太いのと自分のみ。つまり、自分が戦わなければならないのだ。

現状、自分が扱える技はテレポートのみ。野生であつた頃はそれで逃げれば済んだ。……逃げられなかったから今に至っている訳だが。

恐らく、使える技がテレポートだけだからと言ってテレポートで逃げる訳にはいかない。自分のトレーナーとなったこの人物は許さないだろう。再び場に出されるのがオチだ。

「さあ行くぞケーシー、きあいパンチ！」

再びケーシーは考える。今自らに下された指示について。

パンチは知っている。自身の拳を武器として、相手を殴打することだ。

だが、きあいとは……？

……わからない。

筋肉柱ロープシンのきあいパンチを見た。やる気ヤルキモノ猿サルのきあいパンチを見た。茸キノコのきあいパンチ

を見た。鳥スバメのきあいパンチを見た。

しかし、それでも尚わからない。

わからない以上、下手に動くことはできない。故に、ケーシーは動かない。

「……？ マクノシタ、つつぱりだ！」

太マクノシタいのが此方に走ってくる。つつぱり……手のひらを使って相手を突く行為だ。特

別な技術は不要。故に恐らく連続で浴びせられることになるだろう。

このまま何もしなければ。

ケーシーは逃げを選択した。ボールへ戻るのではない。バトルフィールド内で転移することですつぱりを回避した。

だが、逃げるだけでは駄目だ。攻撃をしなくては。

「きあいパンチだ」

また、この指示だ。一体どうしろと言うのか。

ケーシイは自分の手を見る。細い腕だ。パンチを撃つにはあまりにも細い。こんな腕で放つ拳など、目の前の太いものには効く筈がない。寧ろ、パンチを撃つことで逆に自分がダメージを負いかねない。

「マクノシタ、ビルドアップ！」

太いのは大きく息を吸い込んで全身に力を込める。先程より、さらに力強くなった。奴の体は風船か何かか？

こうなると、今の自分では一度攻撃を受けるだけでも危険。どうすれば……。

「ケーシイ、難しく考えなくていい。強みを活かせ」

強み……？ ケーシイは考える。自らの強みとは何か。

肉体的なものに強みは存在しない。それは確信できる。

「きあいパンチは、突き詰めれば、気持ちの問題だ。恐れるな、考えるな、ただ、感じろ。お前の中のきあいに身を任せるんだ」

ケーシイは改めて考える。自分の中のきあいとは？

きあいに心当たりは無いが、念力なら、サイコパワーになら覚えがある。

ケーシイという種は肉体が貧弱だ。故にそれを補うため、サイコパワーに特化している。

もしかするとサイコパワーを使えと言うのだろうか。確かに自分の強みとはサイコパワーであろう。

「マクノシタ、つつぱり！」

ならば、サイコパワーを使い、自らの腕力を強化して殴るか。

いや、そんなことに意味はない。筋肉ダルマに肉弾戦を挑むなど、何の益があろうか。そうこうしている内に太いのは迫ってくる。

近づかれたら、負ける。ここで、ケーシイの思考はある一点に絞られる。

此方に来るな。

拒絶する意思を示すように咄嗟に付き出す両手。次の瞬間、太いのが飛んでいった。

何だ、今のは？

「いいぞ、ケーシイ。ナイスパンチ。今度はちゃんと溜めてからやってみる」

起き上がり、再び此方へ向かってくる太いマクノシタの。

成る程、今のがきあいパンチか……。感覚はわかった。あとは、繰り返すだけだ。

先程よりも強く、先程よりもはつきりと、狙いを込めて放つ。

それは、新たなきあいパンチの誕生。触れない拳。肉弾戦を捨てた、きあいパンチの新たな可能性。それが生まれた瞬間であった。

「ボク達の負けだね。でも、凄く楽しかったよ！」

「こちらこそ、ありがとうございます」

「いいパンチだった。スバメも、ケーシイもね。またいつかバトルしよう！」

「はい！」

二人とも、凄くいい笑顔。想像できてたけど、でも、こうなって欲しく無かった。誰か、レン君の道を正してくれる人はいないの？

「レン君は普段どんなトレーニングしてるんだい？」

「普段は、基本的に正拳突きですね。ポケモン達にもそれぞれのきあいパンチを素振りさせてます」

「成る程……ボクらは足腰を鍛える為にサーフィンをやってるんだ。よかったら一緒にどうだい？」

「いいんですか？ 俺初心者ですけど」

「大丈夫！ 勿論教えてあげるよ！」

「ありがとうございます！ お返しと言っては何ですけど、トウキさんさえ良かったら、トウキさんのポケモンにきあいパンチお教えしますよ」

「本当かい!？」

まあ、意気投合するのは良いことだよね。
でも……盛り上がってる所悪いんだけど、私のジム戦は？

○月▽日 曇り

ムロジム戦。とても楽しかった。

格闘タイプのポケモンとの戦いは何て言うか、同じ土俵で戦ってる感じ、というか……とにかく楽しかった！

トウキさんも凄くいい人だった。明日トレーニングをご一緒することになった。言ってみるならそう、

森暮らし、海へ

はい。

まあ、何にせよとても良い出会いだった。

あとはカイナでクスノキさんに荷物渡したらやることは終わりだね。

ハルカちゃんも微妙な顔してたけど、トレーニングを一緒にやるらしい。一体何を考えているんだ……なんちゃって。ハルカちゃんは真面目だから荷物届けるのが遅れるのが嫌なのかも。

明日から別行動にするのを提案してもいいかもしれないね。

そう言えば、ハルカちゃんも無事ジム戦は勝ちました。

5

「じゃあ、そっちは頼むね」

「うん、届けるだけだし、大丈夫だよ」

「ではハギさん、よろしくお願いします」

「うむ、任せなさい。さて、ハルカちゃん、早速乗り込んでくれい」

相談の結果、俺がトウキさんとトレーニングしてる間にハルカちゃんがカイナシティに荷物を届けに行くことになった。

ハギさんの船から手を振るハルカちゃんが何となく安堵しているように見えるのは気のせいだろう。

あと、届けるだけだし大丈夫ってフラグだよなあ……。

○月▲日 晴れ

絶好のサーフィン日和だった。

はじめは慣れなかったけどトウキさんの教え方が上手かったこともあって割と直ぐに上達できた。

直ぐ、と言つてもまだ常識的な範囲内だ。初心者だった癖に某ホモと連弾できるほどピアノが上達した彼程直ぐではなかった。

サーフィンいいね！ ホウエンは海に面した町が多いからム口を出発した後もちよくちよくやつちやおう。

……と思つたけどサーフボード買うところからか。金が惜しいから暫くお預けだな。さて、サーフィンにトレーニング、技教えが一段落した辺りでハギさんが戻ってきた。サイコソーダを差し入れてくれた。美味しいなこれ。カイナに行つたらダースで買おう。……持ち歩くこと考えたらダースは無理だな。

新たな楽しみとそれが不可能という現実がちよつと残念な思いを抱きつつ、俺は11番道路へ向かう。

「115番道路……というと、どこだったかね？」

「カナズミの北側ですよ」

「おお、成る程。あの小島に行きたいんじゃない？」

「ええ、そうです」

流石ハギさん。年の功だね。

「115番道路か……ボクも前に行ったことあるけど……たぶん何も無いよ？」

「そうですね……何も無いかもしれません。でも、何かあるかもしれない」
トウキさんはピンと来ないだろう。

だが、元プレイヤーの俺はわかる。と言うか、気になる。

115番道路、にある小島。なみのり無しではいけない場所。プレイヤーだった頃はトウカシティジムまで行った後しか行けなかった。

何しろ主人公をカイナに送った後ハギさんは小屋に戻ってしまうので、以後主人公は進むしか無くなるからな。

だが、今の俺は主人公ではない。ストーリーに縛られることは無い。

115番道路の小島。それは、ゲームにおいてきあいパンチの技マシンがあった場所なのだ。

レン君から預かった荷物を届けに造船所に来ただけど、クスノキさんは不在だった。博物館に行っているらしい。

さて、それでクスノキさんに会うために博物館に行った。入場料とか聞いてない。そりゃあ、払えるけどさ。

中には海についての展示が沢山。あと見たことある格好の人達も沢山。
もしかしてこの人達も展示の一部なのかな？ そんなわけないね。

嫌な予感がしたけど二階に上がった。意外なことに変な人達は二階には全然居なかった。そしておじさんが一人。あれがクスノキさんだろう。もしあれがクスノキさんじゃなかったら、あの変な集団の中にクスノキさんが居ることになる。笑えないね。

「あの、すみません。クスノキさんですか？」

「? ええ、私がクスノキです」

良かった。クスノキさんは変な集団の一員じゃなかった。

「デボンコーポレーションから、荷物です」

「ああ! 届けてくれたんですね! ありがとうございます!」

さ、私の仕事は終わった。キンセツシティに向かおう。一人だと一々困惑することがなくていい。

でも、そうは問屋が卸さなかった。

考えてみれば当然。あんなゾロゾロと変な人達がいるんだもの。何事も無い筈ないよね。

「おえええええ……」

「ハハハ、まだまだきあいが足らんとう」

ハギさんはそう言いつつ背中をさすってくれた。しかし、あれだな。きあいが必要なとか言われると、是が非でも耐えなくちゃいけない気がするな。次は酔わないように頑張ろう。

吐き気が治まったので、早速探索へ。

「じゃあ行つてきますね」

「おう、わしはその辺で釣りをしとるからな。帰る時によんどくれ」

「はい」

さて、木々の間を縫いつつ進んでいく。流石にこんなところでキガヨケテル(物理)は使えない。本気で何もない島になってしまう。何より自然は大切にしないと。

なんて、下らないことを考えつつ木をへし折つてみると、きあいパンチの技マシンが置いてあつた岩場が見えた。

見た感じ何も無い。

……いや、誰か居る。

近づいてみる。やっぱり誰か居る。

ゲームで言うところの空手王のグラフィックになりそうなおっさんだ。柔道着を着て目を瞑り胡座をかいて座っている。

ああ、あの姿を見てみると、真理に至ったあの日を思い出す。

まあそれはいいや。話し掛けてみよう。

「すみません」

「何用か？」

おお、テンプレのような武人感。

「ここで何をしていたらっしやるんですか？」

「修行だ」

ですよねえ。

「修行、ですか。一体何の？」

「フ、気になるか。ならば教えてやろう」

おっさんは立ち上がって此方に向き直り、ドヤ顔でこう言った。

「私はきあいパンチ親父！ 格闘タイプ最強の技、きあいパンチを伝承する者だ！」

……ほお。

いや、落ち着け。この人はきつといい人だ。きあいパンチ使いに悪い人は居ない、筈。

「して、少年、私に話し掛けたということは、君のポケモンにきあいパンチを覚えさせた
いということだな？」

手持ちは皆きあいパンチ使えるんですがそれは……。

「……いえ、まずは俺とバトルして貰えませんか？ 是非、あなたのきあいパンチを見せて頂きたいんです」

そう、是非とも見せて頂かなければ。

人に教えるってことは、それ相応のきあいパンチを使えるってことだもんね？ そうだよな？

「フム、良いだろう。格闘タイプの技の真髓、教えてやろうではないか」

真髓……。真理きあいでは、無いんだな……。

「行け！ エビワラー！」

「……キノガツサ」

……キノガツサ出してしまった。うーん……うーん、一回我慢しよう。

「きあいパンチだ！」

「……キノガツサ、一旦待っててくれ」

頷くキノガツサ。直ぐに向き直り身構える。

一方エビワラーは拳を引いて集中している。やがてキノガツサに向かつて飛び出した。何の変哲もないきあいパンチを見るのは久し振りの気がする。

「かわせ」

スツと、わざわざ紙一重でかわすキノガツサ。心なしかドヤ顔に見える。

「今のをかわすとはなかなか……だが、エビワラー、もう一度だ！」

溜めはそんなに長くない。だから念のため、出が早い技を使う。

「マツハパンチ」

パンツ!! という破裂音と共にエビワラーが後ろに飛ばされる。

きあいパンチ発動阻止成功……阻止、できてしまうのか……。

「ほう、きあいパンチの発動を阻止できると知っていたのか……きあいパンチは格闘タイプ最強の技、しかし、撃つためにはリスクが伴うのだ」

そう、でしょうねえ……。まあ、俺も、そうでしたしねえ……。

「だが！」

「キノガツサ、キノコの胞子」

キノガツサの頭のかさから大量の胞子が噴出する。それを吸い込んだエビワラーは意識を失い、崩れ落ちた。

「ぬう……起きろエビワラー！」

「きあいパンチ」

そう言うのであれば、こう使えば良いんだよ。

いつもとは違う、ただの平凡なきあいパンチ。だがそれはエビワラーを戦闘不能にす

るには十分だった。

「良いきあいパンチだ！ 先程からの攻防といい、君もなかなかの使い手と見た！」
「どうも」

「だが私もきあいパンチ親父を名乗る者として、負けるわけにはいかん！ 行け！ サ
ワムラー！」

……ほお、サワムラーか。これは、期待できるかな？

「飛び膝蹴り！」

ダニイ!?

あの変な集団、アクア団というそうだ。したつばの人達を倒した後出てきた、リー
ダーを名乗るちよいワル親父風のおじさんがそう言っていた。

海を増やすんだって。ちよつと何言ってるかわからなかったなあ。

今私は博物館を出て、更にカイナシティも出て北に進んでいる。

サイクリングロードは自転車無いから今回はスルー。もし自転車が手に入ったら
行ってみよう。

サイクリングロードの下を通るキンセツまで繋がった道があるらしい。110番道

路だったかな？ さつきオダマキ博士が教えてくれた所によると、分布してるポケモンも違うらしいから可愛いポケモンがいたら捕まえようかな。

さて、その110番道路の中頃へ差し掛かった。

道の真ん中でキョロキョロしてる人が居る。軽く不審者だけど、知り合いだね。

あ、こつち見た。

「あー！ ハルカ！ こんなところにいたんだな。調子はどう？ ポケモン捕まえてる？」

「さつきプラスルを捕まえたよ」

「そっか！ じゃあ、バトルしようぜ！」

うん、何でそうなるのかな？

「いいけど……」

「よし、じゃあ早速！ 行け！ ヌマクロー！」

最初はヌマクロー……。プラスルじゃ不利だよな。だったら。

「キノココ、頑張つて！」

「キノココか……相性はこつちが不利だな。でも、こつちには新技があるんだ！」

新技……気になるけど、こつちはいつも通りやろう。

「やどりぎの種！」

「かわせ！」

……うーん、中々当たらない。普通に頭突きするべきだったかな？

「よし！ ヌマクロー！ 新技を見せてやろうぜ！」

早速使ってくるのね……どんな技なの……？

少しでも早く備えられるように、ユウキ君の口の動きに注目する。

……見たことのある口の動きだ。そう、つい最近まで何度も見たような……。

「きあいパンチ！」

何てことなの……。

「きあいパンチは、使わないんですか……？」

「何を言っている。サワムラーは蹴りに特化したポケモンだ。故に、きあいパンチには向いていない。向いていないことをさせるのは無駄であろう！」

……何となく、そんな気はしていた。

それもそうだ。攻撃を受けて中断してしまうきあいパンチを使ってくるんだもの。

そして、技自体も、かわせ、なんて指示だけで簡単に避けることができってしまうんだもの。

そりゃあ、サワムラーみたいな、如何にもパンチへキツクみたいなポケモンにきあいパンチを覚えさせようとは思わないよな。

「戻れ、キノガッサ」

……だが、それでいいのか？

きあいパンチ親父なんて名乗ってるのに、きあいパンチの可能性を信じないなんて、そんなことがあつていいのか？

良い筈がない。

だからこそ、俺はこの人を倒さなきゃいけない。

この人に教えなきゃいけない。きあいパンチは、そんな技じゃないってことを。その程度の技じゃないってことを。

「ローブシン、頼む」

「見たことのないポケモンだな。だが」

「……一つだけ、言わせて頂きます」

「何だ？」

「あなたはまだきあいパンチを知らない」

「ローブシン、きあいパンチだ」

「私がきあいパンチを知らないだど!? よくもそんなことを！ サワムラー、飛び膝蹴りだ！」

ローブシンに向かって飛び掛かるサワムラー。膝がローブシンに直撃する。

だが、ローブシンは怯まない。微動だにしない。ただ、集中している。

「何故だ!? 何故止められない!?!」

「きあいがあれば止められない。それだけのことでは?」

「いや、そんな筈はない！ ブレイズキック！」

サワムラーの足が炎を纏う。ジャンプし、ローブシンへ飛び蹴りを放つ。

……ライダーキックみたいだ。

しかし、そんなカッコいい技を以てしても、ローブシンは動かない。

「やらせはせん！ やらせはせんぞ!! メガトンキック!!」

続いて放つのは元祖からある蹴り技。命中率は高くないもののその威力はすてみタックルと同等。

だがしかし、尚もローブシンは動じない。

「おのれえ……」

「ローブシン、やれ」

「いや、まだだ！　どんな技であれ、当たらなければどうということはない！　距離をとれサワムラー！　どうやら相手のポケモンは素早さは低いぞ！」

指示に従い、ローブシンから離れるサワムラー。

しかし、ローブシンはそんなことは関係ないと言わんばかりに拳を振るう。

その動きは確かに緩慢な物だった。力が入っているようにも見えない。

……だが、この技はきあいパンチなのだ。

力はいらない。当たれば倒せるのだから。故に、最強。

早さも要らない。振れば当たるのだから。故に、最強。

使えば勝てる。それがタイプ最強を冠する技。そうでなくて、どうして最強なんて語ることができるでしょうか。

端から見ればコメディか何かに見えるだろう。拳の届かない位置にいた筈が、気付けば殴り飛ばされていたのだから。

一瞬の攻防？ 否、これは攻防などではない。

単なる必然。リングが地に落ちるように、光が当たれば影ができるように、某主人公がリーグでなかなか優勝できないように、当たり前前のが起こったに過ぎない。

それが、きあいパンチであるから。理由などそれ以外にありはしない。

それを受けたサワムラーが戦闘を続けられないのも、確認するまでもないことだった。

「ハギさん」

「お、帰るかね？ よし、船に乗ると良い」

「はい、取り敢えずムロタウンに戻りましょう」

「あいわかった。で、どうじゃったね？ 何かあったか？」

「今日から俺、きあいパンチ親父です」

「ハハハハハ、そいつはいい！」

(○月▲日の続き)

きあいパンチ親父なんて居るんだな(小並感)

つい熱くなってローブシン出しちゃった。テヘペロ。文字でやっても何の価値もない。まして男だ。

本気できあいパンチやったら、こう、熱い気持ち伝わったのか知らんけど、きあいパンチ親父さんが泣いていた。

何かいっぱい喋ってたけど、大体言いたいことは、

自分はきあいパンチを知らなかった。あなたがきあいパンチ親父を名乗るに相応しい、みたいな。

最初は親父は嫌だつて断ったけど、あんまり押すもんだから引き受けちゃったよ。まあ、貰えるもんは貰つて損は無いよね。年取れば親父だし。

あとサワムラーも貰った。エビワラーと共に修行しなおすんだとか。それに当たって自分はサワムラーの可能性を信じてやれなかったからサワムラーのトレーナーとしては相応しくない、みたいな。俺が連れてつて可能性を引き出してやってくれ、と。そういうのはご自身でやるもんじゃないんですかねえ？

別に良いけどさ。

で、ムロタウンにもどつてトウキさんに挨拶し、エントリーコール登録して、ハギさ

んの家に戻った。

下手に森に入ってまた森暮らしすることになったら困るのでキンセツを目指して移動するのは明日にしよう。

ユウキ君のヌマクローの唐突なきあいパンチに衝撃を受けたものの、レン君のそれほどデタラメなものじゃなかった。

ヌマクローが使えるのはおかしいけど、普通に手を使って撃つてたし、止めようと思えば止められたし……どうやって覚えさせたのか気になる所だけど、きあいパンチのことなんて私が気にする必要なかった。

そんなこんなでキンセツシティに着いたけど、なんか思っていたより疲れてたので、一通り街を見て回るだけにした。

それが昨日。

今日はジムに挑む。

……つもりでジムの前まで来たんだけど。面識ある人が何かやってたら話し掛けるべきなのかな……？ スルーしちゃ……

「あ、ハルカさん！」

ダメでした。

「久し振りね、ミツル君」

「お久し振りです！ そうだ、ハルカさんからも叔父さんに言つてくださいよ！ 僕とラルトスなら大丈夫だって！」

「ええ……それは私もわからないから……」

「そんな……そうだ！ だつたらハルカさん、僕とバトルして下さい！ ハルカさんに勝てたら叔父さんも認めてくれるよね？」

「そりゃあ、そこまで言つてる上で勝てるのなら少しは信憑性がでるが……だからと言つて、なあ……」

「お願いします！ ハルカさん！」

何これ……すごく断りづらい。ジム戦前なのに……。

いや、でも、ミツル君の叔父さんも心配だよね……ここはミツル君を止めてあげるべきかな？

「わかった。バトルしよう」

「やった！ それじゃあ早速……行け！ ラルトス！」

行動早いなあ……。元々病弱だったのがこうなったらそりゃあ……不安だわ。

まあ……ラルトス一体に負けるわけ無いよね。

「……………僕の、負け、ですな」

さっきまでの勢いが嘘みたい。ちよつと罪悪感。

「叔父さん、僕、シダケに戻ります。ハルカさん、ありがとうございます。……やつぱり、トレーナーって凄いですね。ただポケモンを持っていて、戦わせてるだけじゃ、ダメなんだ……」

「ミツル君、そんなにしよげることはないよ。これからもつともつと強くなっていけばいいじゃないか！ さ、うちに帰ろう。みんな待つてるよ」

「はい……」

ミツル君はトボトボと歩いていった。大丈夫かな？

「ハルカちゃん、だったね。これからジム戦だったんだろう？ そんな時にすまなかつた。もしよかつたらシダケタウンに遊びにおいで。大したもてなしはできないだろうが、きつとミツル君、喜ぶだろう」

「はい、いずれ伺います」

で、ミツル君の叔父さんは帰っていったんだけど、入れ替わりでエニシダさんが来た。「今の勝負、見てたよ！ 君はあの少年と友達なんだよね？ それでも手加減せず戦い、打ち負かした……」

何なんだろうこの人。お説教でもするのかな？

「トレーナーってのはそうでなくちゃね！ 私はそんなトレーナーを見てるのが大好きなんだ！ これからも応援してるよ」

「はあ、ありがとうございます」

誉められた？ そんなに嬉しくないけど。何だろう……そうだ、レン君みたいな雰囲気があるからだ！ エニシダさんもレン君も変人だから……。

……

さて、気を取り直してジム戦行こう。

○月▼日 曇り

さて、ハギさんの家を出発して、森を抜け、カナズミを通り抜け、カナシダトンネルへ。

さて、カナシダトンネルの中間辺りでは道が岩で塞がれている。で、その岩を壊すべく殴り続けるお兄さんが一人。聞けば向こう側に彼女さん？ まあ知らんけど、取り敢えず会いたい人が居るそう。

感動的だな。

だが（そのまま殴り続けるのは）無意味だ。

頑張ってる人を応援しないのは良くないよね。まして今の俺はきあいパンチ親父だ

からね。

啓蒙しなくてはなるまいて。

きあいパンチで岩を砕いて差し上げましたとも。……岩砕き親父？ 岩砕き？

……知りませんな。

お礼がしたいということなので向こう側にいた女の人（ミチルさん）とお兄さんに着いていった。

そしたらミツル君に会った。

おそらくハルカちゃんに負けた後なんだろう。凹んでいた。元気づける意味も込めてきあいパンチを教えてあげた。

びつくりしたのは、（きあいとは何かを求め続ける）覚悟があるかって聞いたら、勿論って答えたこと。

そんなに敗北が堪えてたんだね。

きつとこれから彼は良いトレーナーになるだろう。（廃人のように）道を踏み外すことない真つ当なトレーナーにね。ORASじゃないから大丈夫だよたぶん。

その後、キンセツシティへ。ジムの前を通り掛かったら丁度ハルカちゃんが出てきた。

別に急いでないし俺はジム戦は明日にしよう。

従姉妹のミチル姉さんとその恋人のミチオさんが連れてきたその人は、ハルカさんに負けて落ち込んでいる僕に質問を投げ掛けてきた。

「どうして落ち込んでいるんだい？」

「……僕、トレーナーのことをよくわかっていなかっただんです。ただポケモンを捕まえて、戦わせるだけだと思って……だから、僕とラルトスならできるって……」

「それで？」

「それで、キンセツシティまで行ってジムに挑もうとして……その前に負けました。お陰で目が覚めたんですけど……」

「そうか」

その人は、少し考える素振りを見せてから、また質問をしてきた。

「強くなりたいかい？」

「……はい。ラルトスを強くしたいし、何より、僕自身も、強く、なりたくいです」

そう、ラルトスだけでも、僕だけでもダメなんだ。僕達は、トレーナーとポケモンは、一緒に強くなっていかなきゃならない。

「君は……覚悟はあるかい？」

「はい、勿論です」

僕達は強くなる。そのためなら、辛いことだつて乗り越えて見せる。

「なら、良いだろう。とつておきの技を教えてあげようじゃないか」

「どんな技なんですか？」

「きあいパンチさ」

○月□日 晴れ

ジム戦終了。

電気タイプのが厄介って、攻撃されるにしてもするにしてもどっちなに麻痺のリスクがあることだよ。ないやつもいるけど……いるっけ？

ゴクリンのきあいパンチがちよっと何が起こったのかわからなかった。あとスバメがオオスバメに進化した。

あわや戦闘不能かと思ったら進化して、麻痺をもともせずきあいパンチを撃つてライボルトを沈めたのはとてもかっこ良かった。ツツジさんとの戦いの時に困惑していたのが嘘のようだ。アイツ、主人公の器だったんだね。

電気タイプと戦ってみて思い出したんだけど、俺、水タイプのポケモン持っていないね。波乗りとかどうしよう。

……サーフィンかな？

それはさておき、キンセツシティの北の道はよく落石があるそう。で、その落石で

道がふさがりやすい。

ゲームやってた時のあの岩の謎が解けたね。テツセンさんはジムとか街の改造よりも道の舗装をやった方が良いと思う。何で舗装しないんだろう。個人で解決できるからか？ 岩砕き親父大活躍だね。

さて、きあいパンチで岩を破壊すると、向こうにはインタビューアーさんとカメラマンさんがいた。

バトルしたらインタビューーお願いされたから快く引き受けた。今回のバトルに関して一言、と。

だから言ったんだ。

「時代はきあいパンチです」

ってね。これにはインタビューアーさん……マリさんだっけ？ も苦笑い。カメラマ

ンさんは黙って頷いてた。

カメラマンさんは見所ありそうだ。機会があればきあいパンチを教えてあげたい。

ロープウェイ入口にマグマ団の連中が屯していた。イラツとしたけどぶっ飛ばすのは止めておいた。ロケット団じゃないもんね。大怪我させるのはさすがにあれだ。

確か流星の滝のイベントあるんだっけ。その後煙突山でリーダー戦か。

ロープウェイに乗れないなら仕方ないってことで炎の抜け道に入ってドガスとワ

ンリキーとドンメルを捕まえた。今回のジム戦はこいつらかな。

今はフエンタウンにいる。考えてみればハルカちゃんが行っただろうから俺が行く必要無いし。森暮らしのきあいをもってすればあの急斜面くらい登れなくはないしね。

火山灰も嫌だし。でもデゴボコ山道くらいなら行ってもみようかな。

取り敢えず温泉に入りながらハルカちゃんの健闘を祈るとしよう。

ジム戦終えて出てきたらレン君がいて、「目と目が合ったらバトル。常識でしょ？」と
か言い出したから焦った。冗談だったらしいからよかったけど……。

やっぱりレン君は変な人だ。

翌日、レン君はジム戦があるそうなので別れた。丁度落石は無かったのでラツキー
だったね。

フエンタウンに行こうとしたらロープウェイ入口にアクア団とはまた別の怪しい集
団がいた。

いるだけならまだ良かったけど通してもくれない。

話を盗み聞きした感じだとハジツゲタウンのソライシ博士がどうか、ホムラさんが
向かったとかなんとか……。

取り敢えずこの人達じゃ話にならないし……ホムラさんって上司だよな？　ホムラ

さんに文句言つてどかしてもらうしかないかなあ。

そんな訳で今ハジツゲタウンに向かつてる。

けど、火山灰が酷すぎる。女の子としてはやってられない。灰に潜つて忍者ごっこしてる男の子とかいたけど意味わかんない。

でもレン君なんかはノリノリでやりそうだなあ。

「灰の中からきあいパンチだー」みたいな感じで。

火山灰にイライラしながら進んでやっとハジツゲタウンに着いた。でも休んでられない。ソライシ博士は流星の滝に向かったそうだ。

面倒なことはさっさと済ませないと。

流星の滝はハジツゲタウンから少し離れた所にあるみたい。歩くのやだ……と思つたけどキンセツシティの自転車屋さんが自転車を貸してくれたのを思い出した。

早く気づいてればこんな、火山灰まみれになることもなかったのに……今さら言つても仕方ないか。

自転車で気分爽快、そう思つていられたのは少しの間だけだった。

途中からやたら坂道が増えてきた。自転車に乗つてたら歩くより疲れそう。

で、やっとかつと流星の滝に着いた。

中は滝の音が凄いけど、マイナスイオン？　みたいなのがなんか良い感じな気がする。急いでない時に来たら良い場所かも。

中にはソライシ博士？　らしいおじさんと赤い人。ホムラさんはあの人かな？

「ウヒヨヒヨ、この隕石があれば煙突山のアイツが……ウヒヨ？」

あ、気付かれた。

「あの」

「誰だか知らないがマグマ団の邪魔をするなら容赦しないぜ！」

「ロープウエ」

「待て！　マグマ団！　世界をお前らの思い通りにできるなんて大間違いだ！」

「だから」

「ウヒヨヒヨ……アクア団まで来たのかよ……一々相手にするのも面倒だな……隕石は手に入れたしさっさとずらかるぜ。あばよ！」

誰も話を聞いてくれない。なんなのこれ。ホムラさん？　はさっさと行っちゃおうし。

アクア団のリーダーの……何てヒトだっけ？

「お前とは確かカイナの博物館でも会ったな」

「えーっと、そうですね」

「あの時はマグマ団のしたっばだと思ったんだが……妙な奴だ。マグマ団とは陸地を増

やすなどと抜かして破壊活動を繰り返す危険な集団だ。我々アクア団と違ってな！
お前も気を付けることだ」

「あ、はい」

アクア団も大概迷惑だし（頭おかしいって意味で）危険だと思いますとかは言わない方がよいよね。

「アオギリ様、マグマ団を追いかけないと」

「そうだな……奴ら、煙突山で何をしでかすかわからない。急ぐぞー」

成る程、あの人、アオギリさんだったね。覚えてないのバレなくて良かった。絡まれたら面倒くさそうだし。

ホムラさん行っちゃったってことは、多分今から戻ればあの人達ロープウェイ入口から移動してるはずだよな。

そうと決まればさっさと戻ろう。

帰りは自転車であっただ道があまり自転車向けじゃなかったからお尻が痛くなった。

ロープウェイはフエントウンに直通ってわけじゃない。一旦煙突山で降りて、デコボコ山道を下ることでフエントウンに着く。

で、ロープウェイで登ったはいんだけど、やたらアクア団とマグマ団がいて通れそうにない。これ、この騒ぎ収まるの待つか、片付けるまで通れない感じ……だよな。

ああ、フエンタウンが遠い……。

終わった。頑張った。疲れたよお。

フエンタウンは温泉があるんだって。こんなに頑張ったんだもの、きつと気持ちいい。

温泉はポケモンセンターと繋がっているようだ。

ポケモンセンターの中に入ると、テレビがついていた。別に普段テレビをよく見るわけじゃないけど、ついてたら見ちゃうよね。

……見なきゃ良かった。

「時代はきあいパンチです」

うん、知ってる人だった。何でテレビに出てまできあいパンチを押ししてるの？ それに、随分とまあ、楽しそうに、ね。

私はこんなに苦労してたのに……。

「あれ、ハルカちゃんだ」

察した。

浴衣だった。満喫してるね。

床を殴ったこの手が痛い。

朝だ。温泉に入ったお陰か肌の艶とかそういうのがなんか良い感じがしないでもない。

昨日、大分疲れた様子のハルカちゃんに会った。どうやら流星滝く煙突山のイベントをこなしてきてたらしい。俺は丁度お風呂上がりだったからか、恨めしげな目で俺を見してきた。

まあでも美少女は火山灰で薄汚れてても美少女だから。

何の話だろうね。

「こないだのジム戦でオオスバメに進化したんだよ」

「へえ」

「あ、そうだ。後でポケモンを交換してくれない？」

「いいよ……ええ？」

「あー、違う違う。ユンゲラーとゴリーキーを、ね」

何を隠そう、俺は友達が少ない。エントリーコールに登録しているのは両手で足りる

程だ。

森暮らしだったし、多少はね？ いや、逆に考えるんだ。会ってバトルしたばかりの人間をホイホイ登録する方がおかしい。絶対後で「誰？」ってなる。昨日の敵は今日の友？ いやいや、敵が味方になるとか死亡フラグでしょ。

さて、ジムに着いた。

——
落ち着くのよハルカ。

こんなのはいつものこと。そう、もう何回も見てきたじゃない。

慣れるのよ。……いや、慣れちゃだめ。

慣れるんじゃないよ……そう、受け流すのよ。

「ようこそ……じゃなくて、よくぞここまで来たものだな！ 私はこのジムリーダーを務めさせて頂く……じゃなくて、ジムリーダーを任されたアスナだ！」

「どうもはじめまして、レンと申します。フエンタウンって良いところですよ。温泉、凄く気持ち良かったです」

「そうだよね！ ……この温泉最こ……じゃなくて、この町の温泉は素晴らしいものだ。気に入ってもらえて嬉しく思う」

「あ、話そらしちゃってすみません。それじゃ、早速始めましょう」

「……ジムリーダーに成り立てだからって油断しないことだ！」
……ジムリーダーさん、初々しいなあ。

さて、深呼吸。

開幕きあいパンチなんてもう当たり前。狼狽えちやいけないわ。

「さあドガス！ きあいパンチだ！」

楽しそうで腹がt……いいえ、楽しそうなのは何よりよね。

レン君は楽しみつつ、私は情報収集できる。win-winの関係よ。ええ、この程度、なんてこと無い。無いつたら無い。

レン君の指示で、ドガスは大量の煙を吹き出す。如何にも体に悪そうだ。

今回のきあいパンチは煙を出すだけ？ 案外、普通なのね……いや普通ではないけど。

そう思ったのも束の間、煙が拳を形作り、ジムリーダー、アスナさんのドンメルを殴り飛ばした。

でもさすがにジムリーダーのポケモン、ちゃんと起き上がってきた。

「よしっ……」

思わず声が出てしまった。気を付けよう。

……あれ？ 起き上がってきたのは良いけど、なんかふらついてる？

「まさか、毒か!？」

「ドガースの出す煙は、割と有害ってのは有名な話ですよね」

真正面から殴ったかと思えば、なんて姑息な手を……。あれ？ 殴ったって言うんだっけ今の。

毒のダメージもあって、それからすぐドンメルはダウンした。

「なかなかやるな！ だがいつまでもそうはいかないぞ！ マグマッグ！」

「きあいパンチ！」

「日本晴れだ！」

……？ 攻撃技じゃない？

マグマッグもやられてしまった。え、アスナさん大丈夫なの？

「ありがとう、マグマッグ。さあ、ここからだ！ バクーダ！」

「何をしてこようとこっちのやることは変わりません。きあいパンチー！」

「メロメロー！」

「あつ……」

バクーダがドガースに向かってウインクした。ドガースの動きが止まる。

メロメロつて確か、違う性別のポケモンに使うとメロメロになって攻撃が出せなくなる、みたいな技だよね。

……あれにメロメロになっちゃうんだね。

「ドガースしっかりしろー！」

「今のうちだバクーダ！ オーバーヒート！」

バクーダの背中のコブから凄まじい熱量の火炎が放たれ、ドガースに飛んでいく。

着弾、爆発。ドガースは……戦闘不能ね。

さすがジムリーダー、この調子で頑張つてほしい。

レン君の次のポケモンはバネブーだ。

「メロメロ！」

「くっ……」

バネブーもメロメロにかかってしまう。レン君の表情が歪んでる。その調子ですアスナさん！

「おいバネブー、お前があのだバクーダにメロメロなのはわかる」

ヤバイ、レン君の謎説得が始まった。アスナさん急がないと……！！

「でもな、それで攻撃しないってのは違うぞ」

何を言ってるの？ ほら、アスナさんもキョトンとしてる。

バネブーはしっかりと耳を傾けている。ビヨンビヨンとバネの音を響かせながら。

「お前のその想いは、見るだけじゃ、じつとしてるだけじゃ伝わらないんだ！ ぶつかれよあのだバクーダに！ されるがままじゃ駄目だ！ お前が惚れたアイツは、お前の想

いも受け止められないちっぽけな存在なのか？ 違うだろ!? だったら、ぶつけるんだ！ お前の想いを、お前の愛を！^{きあい} そして伝える、その大きさを、その重さを！」

メロメロの効果なんだから惚れたも何も無いんじや……。ほら、アスナさんもポカンとしてる。

つてアスナさんはそれじゃだめでしょ!? 早くしないと多分バネブー攻撃してくるよ!?

「さあ、見せてやれ！ きあいパンチ！」

バネブーの目に、炎が点る。ビヨンビヨンという間拔けな音を響かせながらも、その跳躍はプロボクサーのそののように、次の一撃が全力であることを匂わせる。

我に帰ったアスナさんもバクーダに指示を出す、すでにバネブーは大きく跳躍していた。

バネブーは、頭の真珠を手に持ち、端から見ても全力と分かる勢いでバクーダの頭に叩き付けた。

……バクーダ、戦闘不能。

もう何か、言葉が出てこない。

○月◇日 晴れ

フエンタウンジム戦。

ゲームやってた当時、メロメロに苦戦させられたのを、実際に食らってから思い出した。

俺ったら低能ね。

ドガースのきあいパンチはなかなか汚かった。汚物的な意味じゃなくて忍者的な意味で。まあメロメロ食らってやられるんだから可愛いもんだよ。

今回のMVPは多分バネブーだろう。メロメロの誘惑に抗ってバクーダを倒した。良い♂だったね。その後コータスにやられたけど。

あと、その後出した時にメロメロ食らってから、ヤルキモノがメスだったことを知った。

なんか……ごめんな。

「うん、良い。実に良い」

ジム戦を終え、ポケモンセンターでポケモンの交換。

一度ハルカちゃんの元に行ってから手元に戻ってきた二体を見ながら満足感に浸る。ゲームやってた頃はユンゲラーには済まないことをしたと思う。今となつては過去の話だが。

「良かったね」

「ありがとうハルカちゃん。ハルカちゃんが協力してくれたお陰さ」

「気にしなくていいよ」

うん、やっぱりハルカちゃんは良い子だ。ジム戦の途中で聞こえた「よしっ」みたいな声はきつと空耳だろう。

「次のジムはトウカシティだね。どういうルートで行く？」

「？ 選ぶほど選択肢あつたっけ？」

どうやらハルカちゃんは知らないらしい。なら、導く以外あり得ない。

「まずは普通のルート。キンセツシティに戻って、シダケタウン、カナシダトンネルを抜

けてカナズミ、その後森を抜けてトウカシティっていうルートだね」

「……私はそれで良いと思うんだけど」

「二応聞いてよ。もう一つのルートは、キンセツシティに行くのは一緒なんだけど、その後カイナシティ方面に向かって、途中でちよつとだけ海を渡って103番道路からコトキタウンに向かうルートだよ」

「二応聞くけど、どうやって海を渡るの？」

「飛ぶか、泳ぐかだね。乗れそうな水ポケモンを持つてるなら乗ってけるだろうけど」
生憎俺は持ってないから……泳ぐかな。ついでに捕まえようしよう。

「普通に行こうよ」

呆れ顔で言われた。

「でもなかなかできない経験が「普通に行こうよ」……わかったよ」

フエンタウンを出発してから3日、いよいよ今日がパパとのバトル……勝てるかな？

いいえ、勝つのよ。

「で、どっちから「私が行くわ」……そう、頑張つてね」

「よく来たなハルカ」

「パパ、私、強くなったよ」

「ああ、そうだろうな……こうしてこの場でお前と向き合っていることが嬉しくて堪らないよ。ジムリーダーとして、全力を尽くす！ お前のこれまでの旅の成果を見せてもらおう！ 行け！ マツスグマ！」

「プラスル！」

……

プラスルが倒されて、ペリッパーが倒されて、キノガッサも今倒れた。

パパの方も、マツスグマ、パッチールが倒れ、キノガッサと相討ちの形でヤルキモノも倒れた。

自分で言うのもなんだけど、凄い接戦だと思う。でも、ここから、私にはまだワカシャモが残っている。

「お互いに、残すところあと一体か……感慨深いな」

「……負けないよ！」

きっとパパのラスト一体もエースポケモンだろう。

「私とて、譲るわけにはいかない。頼むぞ！ ケツキング！」

「お願い！ ワカシャモ！」

……私の、負け。

最後はカウンターだった。もし、あと一撃でも決められていたら……そんなもしもを考えてしまう。

「……惜しかったな」

「……」

取り敢えず、バトルしてくれてありがとう、とか、言おうとしたんだけど、悔しくて言葉が出てこない。

「……次は、負けないよ」

「ああ、楽しみにしている」

まさかのハルカちゃん敗北。俺の場合、当時は取り敢えずバシャーモにしてから挑んでたっけな。まあ俺のことはどうでもいい。

やっぱケツキング強いね。ケツキングパパなだけある。

ハルカちゃん悔しがってんだろうな。

後で声掛けとこう。

「次は俺とお願ひします！」

「君は、ハルカの友達かい？」

「はい、レンといいます」

多分。いや、俺は友達だと思ってるんだけどさ。

「そうか、娘の友達だからと言って手加減はしないぞ？」

「望む所です！」

フリーデインは知っている。自らのきあいパンチの形を。

フリーデインは知っている。自らの力の増大を。

フリーデインは知っている。自分と同様、きあいパンチもまた進化しうるということを。

故に、フリーデインは考える。その知能指数5000の脳細胞で。自分の、新たなきあいパンチの形を。

「パツチール、フラフラダンスだ！」

目の前でウサギ擬き^{パツチール}が妙な踊りをするのを眺めながらフリーデインは自らの手を見る。

あの頃よりも太さを増した自らの手。

手に持ったスプーンを曲げてみた。念力ではなく、腕力で。容易に曲がった。

これは、もしかするといけるのではないか？

フリーデンの中でそんな思いが膨らむ。

「あの、フリーデン？ きあいパンチは？」

主の指示を聞き流してしまっていたようだ。これはいけない。

未だ新たなきあいパンチの形は見えない。ならば普段通りのものを撃つ他ない。

たかがウサギ擬きの体力を削りきる等、フリーデンにとつては造作もないことだった。

「おお、ナイスパンチ」

知能指数5000たる自分からすれば当然のこと。フリーデンは再び思考に戻る。

新たなきあいパンチを模索するにしても、元のものよりも弱くなつては意味がない。力が増したとは言え、自らの手で殴るのが得策かはまだわからない。

試す必要がありそうだ。

続いて相手が繰り出してきたのはヤルキモノのヤル気猿。我が先達なら兎も角、このエテ公ヤルキモノに自分の相手が務まるのか……？ まあ、こんなのはいつものことか。

「きあいパンチ」

故にフリーデンは自らの拳で殴る。お前などサイコパワーを使うまでもない、そんな思いを込めて。

結果、拳を痛め、相手には大したダメージは入らず、あげく騙し討ちという手痛い反撃を食らってしまった。

しかしフリーデインは気にしない。些か不甲斐ないとは言え、自分の拳を使ったきあいパンチは難しいと言うことがわかったからである。

やはり、サイコパワーを使う他ないのだろうか。

進化を経て、自分のサイコパワーも増大した。であれば威力は以前とは段違い。ならばこれも充分な進歩なのではないか？ そんな考えがフリーデインの脳裏をよぎる。

だが、あくまでフリーデインは妥協しない。威力が上がったから良し？

そんなものはろくな成長の出来ない俗物どもの思考だ。知能指数5000の自分ができることではない。

「ヤルキモノ、もう一度騙し討ちだ！」

「迎え撃てフリーデイン！ きあいパンチ！」

相手のエテ公ヤルキモノが向かってくる。同時に主から指示が出る。

しかし、再びこれまで通りのきあいパンチを使うのは知能指数5000のプライドが許さない。

フリーデインは自分の手を見る。……スプーンがあるではないか。

武器の使用……それは賢さの証明。文明の証。知能指数5000たる自分に相応し

いのではないか？

故に、フーデインは曲げた方のスプーンでエテ公ヤルキモノの攻撃を受け止め、まともなスプーンでその脳天を殴り付けた。

崩れ落ちるエテ公ヤルキモノ。

まさに攻防一体、知能指数5000たる自分に相応しい新たなきあいパンチ。

……そう思おうとするのだが、どうにもしつくり来ない自分がいる。

「な、ナイスパンチ。大丈夫か？」

主は何を心配しているのか。多少ダメージは受けているが、こんなにも頭が冴え渡っているというのに。

主に向かって頷く。

「そ、そうか。なら良いんだけど……」

「そのフーデイン、よく鍛えられているね」

「ありがとうございます。自慢のポケモンですよ……あ、間違えました。皆、自慢のポケモンです」

主が何やら話しているがそんな事はどうだつていい。それよりもきあいパンチだ。

何故先程のきあいパンチで納得がいかないのか。考えられる可能性は、やはり、先程のきあいパンチさえも自分の新たなきあいパンチに相応しくないと心のどこかで感じ

ている、ということだ。

ならば、一度原点に帰るべきか。

「マツスグマ、腹太鼓だ！」

マツスグマ
元タヌキが腹を叩いて自身を鼓舞するのを眺めながら、フーデインは自らの原点、初めていきあいパンチを振り返る。

あの時の相手は太いの。自分はまだケーシーであった。

そう言えば、あの時は太いのの攻撃を食らえば負けると確信していたのだった。

今回の相手もやる気と力に満ち溢れているのが見て取れる。既にダメージを負っていることを考えれば、知能指数5000の自分といえど攻撃を食らえば危うかろう。

あの時は、そう、強みを活かせと言われたのだ。

進化した今、改めて考える。今の自分の強みとは何だ？

腕力？ 否、今進化した今でもなお自分の肉体は貧弱だ。

では、サイコパワー？ 否、先のいきあいパンチにしつくり来ていないのだから違う何かがある筈なのだ。

ここで、フーデインに天恵が降りる。

否、天恵などという不確かな、運任せなものなどではない。これは言わば必然。知能

指数5000の脳味噌が導き出したPerfect Answerだ。

「きあいパンチ！」

「ずつきだ！」

マッスグマ
元タヌキが此方に駆けて来る。そして、フリーデインもまた元タヌキに向かつて駆け出

す。その足に迷いはない。

知能指数5000の脳味噌が導き出した答え。

フリーデインの強み。

それは、頭脳。知能指数5000の、頭脳。

故に、フリーデインは、きあいパンチに

頭を使った!!

知能指数5000の頭脳から繰り出される、知性溢れる頭突き。

マッスグマ
元タヌキの頭突きとぶつかり合い、元タヌキの意識を刈り取った。

しかし、フリーデインもまた、蓄積したダメージと、今の大きな衝撃で意識を失った。

薄れ行く意識の中でフリーデインは思った。……今のきあいパンチ、おかしくないか

……?

普段にも増してレン君のポケモンの奇行が目立つ。

敗北のシヨックが吹き飛ぶ程奇妙な光景だった。

……? よく考えるところも変だったね。まだシヨックで頭が回ってないみたいだ。

……まあ、妙な動きをしてたけど、一体だけでパパを追い詰めるなんて凄いなと思う。

頭おかしいけど、確かに力はあるんだなあ……。

でも、今の状況は私を味方している。

「パパー！ 頑張つてー！」

パパは驚いている。そんなにおかしい？ あ、ついさつき自分に負けたせいで落ち込ん

でる筈の娘から応援されたらそりゃ驚くか。

レン君もちよつと驚いてるみたいだけどそんなことはどうだっていい。

今までは大っぴらにレン君の対戦相手を応援できなかったけど、今回は、今回に関し

ては、何の問題もない。

だつて、パパだからね！

「レン君なんて倒しちやえ!!」

あー、スツキリする。

パパには是非娘の応援に答えてレン君を打ち負かして欲しい。

いい加減、出鱈目に終止符を打たなきゃ……！

パパのラスト一体はケツキング……戦ったからこそ分かる。あのポケモンはめっちゃくちゃ強い。

きつと、逆転してくれる……！

げ、ヤルキモノだ……。

ヤルキモノは、レンの手持ちの中で、原点ロにして頂点ンとキノガッサを除けば、比較的まともなきあいパンチを撃つポケモンである。

まず、拳で撃つ。色物が多いレンのポケモンのきあいパンチの中では最も基本に忠実である。

次に、撃つ前に溜める。これもまた、きあいパンチの基本に忠実と言える。普段の戦闘時に気を張っていない、というわけではない。

ひとえに基本に忠実に、ヤルキモノの真摯な姿勢がそうさせていた。ナマケロの頃、トレーナーであるレンに教えられた基本を忠実に守り続けているのだ。

とは言え、あくまで基本は基本、自分にあつた形にならさなければそれ以上はない。

ヤルキモノという種族は、やる気に満ち溢れている。それは内臓一つとってもそうであり、特に心臓は他のポケモンとは一線を画する早さで拍動している。

それはどういうことか。

ヤルキモノという種族は、とかくじつとしていられないのだ。

そんな中できあいパンチのために溜める、ということが如何に難しいことか。

ヤルキモノの努力が伺える。とは言え、このヤルキモノが溜める、と言つてもほんの数秒。それ以上は意思に関わらず体が動いてしまう。

基本に忠実なきいあいパンチは、溜めに大きく左右される。ほんの数秒の溜めでは威力は出ない。

故にヤルキモノは数で補った。片方で殴る間にもう片方で溜める。それを繰り返すのだ。動きながら溜める、という無理難題。しかし、動くことが当たり前なヤルキモノにとってはそう難しいことではなかった。

そして今、ヤルキモノは窮地に立たされている。

相対するケツキングに、きいあいパンチが決まらないのだ。怠け、一つ技を出せばしばらく休んでからしか技を出せない、というデメリットとなる特性を持つケツキング。

技を決めることなど容易い。初めはヤルキモノもそう思っていた。

しかし、いなされるのだ。それこそ片手間に。かわすでもなく、いなす、反らす。それを怠けながらもできる程にケツキングは経験豊富であり、ヤルキモノの攻撃はそれが簡単に出来てしまうほど真つ直ぐであった。

挙げ句、カウンターである。痛い、あまりにも手痛い反撃だった。

此方の攻撃は決まらず、相手の攻撃は刺さる。これを窮地と呼ばずしてなんと呼ばう。

体の奥底から沸き上がる感覚を押しえつけながら、ヤルキモノはケツキングに立ち向かっていった。

ヤルキモノが出てきた時にはキツいかもって思ったけど、ケツキングは案外余裕そう
だ。

そうでなくちゃね！ さすがパパ。

……でもあのヤルキモノ、いつもと様子が違うような。

何だろう？ 何か、我慢してる？

「ヤルキモノ」

うわ、始まった。

「パパ！ 攻撃、攻撃！」

「ハルカ、少し静かにしていなさい」

パパ!?

「お前、進化を我慢してるな？」

あ、ヤルキモノがビクツてした。凶星ってことかな？ 成る程、進化を我慢してるんだ。

……何で？

「大方、わかってるんだろう？」

何を？

「進化したら、今までのようなきあいパンチは使えなくなるってことが」

はあ、そうですか。それがなんなのかな？

ヤルキモノのきあいパンチ……やたら連打することを除けば比較的まともなきあいパンチだった。

それが使えなくなる……？ そっか！ 進化したらますます常識から逸脱しちゃうから！ だからヤルキモノは進化したくないのね！

「お前が努力の末に今のきあいパンチにたどり着いたのは知ってる。ずっと見てきたからな。愛着もあるんだろう……まあ、気持ちにはわかるさ」

うんうん、だったら進化しろなんて言わないよね？

「でも、それだけじゃないだろ」

ヤルキモノがまたビクツとした。……レン君はエスパークか何かなの？

「お前は、ケツキングになることで、連続できあいパンチを撃てなくなることを恐れている。そうだろ？」

またまたヤルキモノがビクツとした。

「ふざけるな！」

……怒ってるね。

「お前は目の前のケツキングを見てわからないのか？ ケツキングってのは、動けないんじゃない。必要以上に動かないだけだ。何故頻繁に動かないと思う？ 一回動けば十分だからだ！」

今日の演説はちよつと長めだなー。

「自分の技に愛着を持つのは良い。だが、変わることを恐れるな！ お前の進化はお前の努力の結果だ！ それがお前を裏切る筈無いだろ！ お前のきあいパンチは連続で撃てなくなるんじゃない！ 何回も撃つ必要がなくなるんだ!!」

そーなのかー。

「……パパー？」

「今良いところだから、な？」

ワーオ。

「お前は強くなれるんだ。恐れるな。逃げるな。……俺に、お前の最高のきあいパンチを見せてくれ」

ヤルキモノは……頷いた。

体が光に包まれ、より大きく、力強い姿に変わっていく。光が晴れるとそこには新たなケツキングの姿が。

えーつと、おめでどう、かな？

「パパ」

「カウンターの用意をしておくんだ」

「さあ、ケツキング……きあいパンチ!!」

……あれ？ 拳が光ってない。溜まってないんじゃないの？ ケツキングピクリともしないし。

どうなってるの？

そう思った次の瞬間、レン君の方のケツキングが拳を突き出した。え……離れてるよ？

と思ったら、パパのケツキングが崩れ落ちた。

……は？

進化を受け入れ、拳を振るう。

今までとは違う肉体。今までとは違う感覚。

体が軽い。もう、何も怖くない。

そして、その拳は、問答無用で勝利をもぎ取る。

この日ケツキングは、原点にして頂点の真理の一撃、その境地へと、至った。

○月◆日 曇り

ハルカちゃん敗北。なかなか惜しかった。まあ、次があるさ。

俺は勝った。

ケツキングパパまじジムリーダーの鑑。俺がヤルキモノに話してる間ちゃんを待たせてくれたんだぜ？ いい男だ。

今回バトルで使ったのはフーディンとヤルキモノ。フーディンは開幕フラフラダンス食らって、混乱しながらセリさんのポケモンを倒した。うーん、新しいきあいパンチの模索……だよな？ それと混乱が重なって、あんな、俺でも流石にどうかしてると思っちゃう感じになったのかね？

ヤルキモノはケツキングになった。やったぜ。

ローブシン並みのきあいパンチを撃てるようになったぜ。やったぜ。

そう言えば最近、ハルカちゃんが俺に冷たい……というか、厳しい、が近いのかな？ 別に何も邪魔とか嫌がらせとかはしてこないんだけど。なんかちよいちよい俺に敵対的というか、セリさんとのバトルの時とかどうとうセリさん応援してたし。

いやまあ父親応援するのはなんらおかしいことではないんだけど。
僕達仲良しです！

今度誰かに自己紹介するときがあつたらそう宣言してみよう。たぶんちよつと嫌そうな顔するんだろうな。

俺何かしたっけなあ……？

きあいパンチ教えようとしたら断られた。

「落ち込んでるかと思つたけど、大丈夫そうだね」

「うん、もう平気。それよりも、早く強くなりたい！」

バトル以外では、レン君は基本的にいい人だ。やっぱりどこか常識を捨ててる節があるけど。

「ところで、きあいパンチなんてどう？」

「は？」

今なんて？ 何も聞こえなかった。

「だから、センチさんに勝つために、きあいパンチを覚えさせてみないかって」

「ん？」

聞こえてしまったけど、ちよつとよくわからない。きあいパンチを、なんて？

「いや、無理には言わないけどさ。何て言うか、あと一步届かないって感じに見えたからさ。新しい技でも覚えさせたらどうかなー、と」

「それで、きあいパンチ？」

「うん。タイプのにも弱点つけるよ？」

「うーん、今はいいかなあ……やっぱり、自分達の手で勝ちたいし」

本音を言えば、非常に足踏み入れたくない。私のワカシャモがよくわからないきあいパンチ（仮）を撃つなんて……悪夢よ。パパに負けるより辛い。

でも、新しい技、か。格闘タイプの技、何か無いかな……？ きあいパンチ以外で。

2日後、色々試したけど、結局、新しい何かを見つけれないまま。パパとの再戦に臨むことになった。

「手加減はできないが……お前の成長、見せてもらおうぞ！」

「今度は負けないよ！」

パパはパッチールを繰り出した。私は……キノガツサを

……つてあれ？

「シャモ！」

ワカシャモが勝手に出てきちゃった。

ワカシヤモは悔やんでいた。

ハルカの期待に答えられなかった。ハルカの手持ちの中で一番の古株である自分は、エースなのだ。エースである以上、負けは許されない。逆境を覆せるからこそエース。ここぞという時に任せられるからこそエース。

自分がエースであるという自覚を持つワカシヤモにとって今回の敗北はそれほどまですに屈辱的なものだった。

何故負けた？ 相手が強かったから？

否、自分の力が足りなかったのだ。

夜中、こつそりとモンスタールボールを抜け出し、木に向かって蹴りを放つ。

現状のメインウエポン、にどげり。

しかし、この技で倒しきれなかったからこそ、今の状況がある。これで、いいのか？ この技で、いいのか？

ワカシヤモは迷う。

この迷いを振り払うように、何度も何度も蹴りを放つ。しかし、迷いは、不安は、拭いきれない。

そしてそんなワカシヤモに近づく者が一人。

「勝ちたいか？」

その人物は、きあいパンチ野郎であった。友人であるとは言え、ハルカはこの少年に複雑な思いを抱いている。故に、ワカシヤモもまた、何とも言えない気持ちになった。

だが、その問いには頷いた。

「ハルカちゃんはあると言っていたけど、お前自身はどうだ？ きあいパンチ、興味無いかな？」

ワカシヤモは再び迷う。

ワカシヤモ自身は直接対峙したことはない。しかし、その威力は、脅威は、何となく伝わっている。

格闘タイプ最強の技、きあいパンチ。この技があれば、勝利を以て汚名を雪ぐことができよう。

しかし、ハルカは断った。自分達の力で勝つのだ、と。

ワカシヤモは首を横に振った。

「そうか……」

お前に用は無いと言うように、レンに背を向け、再び木を蹴る。

「一つだけアドバイスしといてやる……」

再戦の時。汚名を注ぐ時。

他のポケモンに任せてなどいられない。自分が、勝つのだ。

「交代するか？」

「……自分から出てきたってことは、戦いたいんだよね。交代はしないわ」

「そうか、なら、行け！ パッチール！」

相手のポケモンが出てきたのを確認したワカシャモは、ハルカの指示を待つことなく走り出す。

「えっ、ワカシャモ!?!」

ハルカが困惑した声を上げる。だがワカシャモは足を止めない。

「サイケ光線！」

「かわして！」

サイケ光線の軌道は直線的だ。かわすことは難しくない。

サイケ光線を避けつつワカシヤモはさらにパッチールへと近づく。

「にどげりよー!」

改めて言われるまでもない。

ワカシヤモは、自身のにどげりを以て勝負を制することを心に決めていた。

十分に接近し蹴りのモーションに入る時、ワカシヤモはレンの言葉を思い出していた。

「お前の使える格闘タイプの技、にどげりは文字通り二回相手を蹴る技だ。一回蹴るより二回蹴る方がそりや威力高いような気がするよな」

「でもな、違うんだよ。にどげりよりも威力の高い単発の蹴りはいくらでも存在する。……何故だと思う?」

「昔話で言ってたが、初心者は矢を二本持ちゃいけないんだと。二本あったら、一本目を外しても二本目があるから大丈夫だって考えて、一本目の矢を疎かにしちまうからだと」

「ああ、お前を初心者って言ってるわけじゃない。むしろ初心者じゃないだろうからこそ聞くんだが、お前はちゃんと、蹴りの一発一発を、特に、にどげりの一発目の蹴りを、大事にしてるか？」

いつもより深く踏み込み、いつもより強く地面を蹴り、いつもより鋭く、蹴りを放つ。二発目など考えない。ただ一撃、この一蹴りで仕留める。ただその一心で放つ渾身の蹴り。

それを急所に受けてしまったパッチールは一瞬で崩れ落ちた。

「あ、えつと……すごいよワカシャモ！」

「……まだ甘いな」

ハルカの引き気味の賞賛は勿論、レンの小声での呟きもワカシャモの耳には届いていた。

まだ甘いなどと、そんなことはわかっている。

もつと素早く、もつと鋭く、もつと華麗に、ハルカが引くことすら忘れるような、そんな蹴りにしなれば。

パッチールでウォーミングアップは済んだ。次はヤルキモノ。憎きケツキングの進化前。リハーサルにはちようどいい。

「ヤルキモノ、きりさく攻撃だ！」

今度は相手も近接攻撃。

「かわしてにどげり！」

回避する指示が出る。しかし、ワカシヤモは動かない。

こちらの攻撃も近接、相手も近接。こちらが動かないなら相手が近づいてくる。近づいて来たなら、避けるまでもない。

相手より先に攻撃し、相手を戦闘不能にすれば良いのだ。

ヤルキモノが腕を振り上げる。

ここだ。

懐に飛び込み。その勢いのまま、がら空きの鳩尾を蹴る。飛ばされるヤルキモノ。今のはそれなりに手応えがあった。

だが、ヤルキモノは起き上がってきた。ワカシヤモ、驚愕。

「今度こそ当てるぞ、きりさく攻撃だ！」

「ワカシヤモ！」

放心している暇はない。奴は倒れなかった。戦闘はまだ終わっていない。

しかし、ヤルキモノとてジムリーダーのポケモンである。その隙を逃す程甘くはない。

反応が遅れたワカシャモは爪による一撃をもらってしまった。

無様だ。自分はとことん、甘い。何がどげりだ。何が一撃で決めるだ。結果はこの様。相手は倒せず、自分は攻撃を受けた。

しかも、しかもだ。一撃で決めることに集中し過ぎてにどげりであることを忘れてしまった。二回目の蹴りを入れていない。

この体たらくでどうして汚名返上などできようか。情けない自分に対して怒りが沸いてくる。

体が熱い。もしや猛火が発動してしまったのか？　ますます情けない。ただの一撃で大ダメージを受けてしまったことになる。

体が熱い。この怒りをどう沈めよう。……いや、沈める必要などない。ぶつけてしまえばいいのだ。

気が付くと、視界が高くなっていた。一步踏み出す。歩幅が広い。これはどうしたことだ？

「ワカシャモ、あなた……進化したのね」

ハルカの声を聞いて、自らの体を見る。成る程、確かに今までとは違う。力も、増し

たようだ。

これならば……いや、過信してはならない。もう繰り返すものか。慢心は捨てよう。

そして繰り返されるワカシャモ、否、バシャモの蹴り。

その蹴りは、炎を纏っていた。

「ブレイズキックか」

「ブレイズキック？」

「今バシャモが出した技だよ。その名の通り、炎を纏った蹴りさ」

脇からレンの解説が入る。

「この土壇場で進化か。うん、いいぞ、その調子だ。トレーナーとポケモンは常に、成長し続けることができるんだ」

ヤルキモノが倒れ、次に出てきたのはマッスグマ。

「腹太鼓！」

「ブレイズキック！」

進化したからか、頭が冴えてきた。

ああ、認めよう。自分は未熟だ。下手くそだ。にどげりなんて技もまともに使えない。

だが、蹴るしかないのだ。

戦わなければ、蹴ることをしなければ、勝つことなどできないのだ。

「逆に考えるんだ。蹴れば勝てるぞ」

そう言えばそんなことも言われていた気がする。

……やはり、蹴るしかない。

跳躍、そして空中で回転、狙うはマツスグマの脳天。

回転によって威力を増した炎の踵落としが炸裂する。

「今のカッコいいな」

レンの眩き。

「カッコいいよ！ バシャーモ！」

ハルカの賞賛。

だが、まだ足りない。自分が自分を認められない。

「頼むぞ、ケツキング！」

こいつを越えなければ。

「カッコいいよ！ バシャーモ！」

いきなり出てきたり、一撃で倒したり、いきなり進化したり、一撃で倒したり、今日のワカシャモ、じゃなくてバシャーモは何処かおかしかった。

でも、バシャーモがすごく頑張ってるのはよくわかる。

あと一体。ケツキングを倒せば私達の勝ち。

きつとバシャーモはケツキングを倒したくて、その一心で燃えてるんだよね。

「頼むぞ、ケツキング！」

やっぱり、あのケツキングは強そう。違うわね、間違いなく強い。だけど、バシャーモなら、きつと越えられる。

「あなたの力、見せてあげて！ ブレイズキック！」

走るバシャーモ。そしてケツキングに向けて足を振るう。足は炎を纏っていない。

……ん？

あの日碎かれた誇りを、取り戻す。

自分の蹴りでこいつを倒す。

ブレイズキックでは駄目なのだ。新しい技では、駄目なのだ。

自分は、にどげりを使って敗れた。

であれば、にどげりを以て勝たなければならない。

執念も自信も、蹴りを放つ時に意味はない。そんなものがあつては蹴りに揺らぎが出る。だからこそヤルキモノを仕留めきれなかった。

無心でただ蹴る。筋肉を、膝を、骨を、自らの全てを蹴りの為に使う。

まず一撃。良い当たり……いや、自己評価など無意味。結果が全てを物語る。

良い当たりだったと、ここで油断したからこそ反撃を受けた。

蹴ったのだから当たるのは当たり前。そこに良いも悪いもない。

バシヤーマは学習している。故にバシヤーマは油断しない。この技はにどげりなのだ。ここで止めてはただの蹴り。

故に、

バシヤーマは二度蹴る。

△月○日 晴れ

ハルカちゃん大勝利。

いやまあ、より正確に言えばハルカちゃんと言うよりはバシヤーマなんだけど。

アドバイスが役に立っていた……いたよね？ 役に立っていたように良かった。

最後のバシヤーマはすぐく決まっていた。

シヤモは二度蹴る、なんてね。

ハルカちゃんは指示をスルーされる形になって複雑な顔してた。

でもにどげりで負けたんだからにどげりで勝ちたいよね。

そこら辺の男のロマン的なのをわかってあげられるようになったら、バシヤーマと

もつと仲良くなれるんじゃないかな。まあ知らんけど。

さて、次はヒワマキシテイ、いよいよ水タイプポケモンが欲しい今日この頃。

トウカシテイにある池と言うか沼と言うか水溜まりというか、まあそんな感じの所で水ポケモンの捕獲を試みた。釣り竿を持ってなかったので適当に枝折って釣り竿にした。コイキングの引きにすら耐えられなかった（枝が）。

釣り竿つてどこで貰えるんだっけ。

面倒だったのできあいパンチ漁をした。簡単にやり方を記しておく。

きあいパンチで水面殴る↓水ザバア！ ↓ポケモン打ち上げられる↓速やかに捕まえて残りは水の中へ

ハイガニとコイキングを捕まえた。

良い子は真似しないように。ハルカちゃんにはドン引きされた。

そもそもハルカちゃんが釣り竿貸してくれれば良かったのにといいのは言わないでおいた。

「泳いで渡るのも悪くないと思うんだよ」

「ならレン君は泳げばいいんじゃない？」

今日も今日とてハルカちゃんの対応は、……何だろう、ドライだ。

「うん、まあ俺はそれでも問題ないんだけど。ハルカちゃんはどうするの？」

「確か対岸行きの船があったでしょ？」

「船も良いけどさ、海を泳いで渡るなんて、なかなかできないことだと思わない？」

「やりたいとも思わないよ」

もう少し乗ってくれてもいいと思うんだけどなあ……こうなると、此方としてもドツ

キリをやる他ない。

指笛を吹く。すると、ハルカちゃんのモンスターボールからバシャーモが出てくる。

「じゃあ、手筈通りに」

バシャーモはハルカちゃんを肩に担ぐ。

「えっ……ちよつと、なにこれ？」

さて俺はオオスバメにでも……お？ 俺も担がれた。これは想定外。大方俺もつい

でにウエイトにしようって腹なんだろう。

俺とハルカちゃんを担いだバシャーモは、海に向かって駆け出す。砂場が終わる。

バシャーモの足は海へと踏み出した。

「あれ？ 沈んでない？」

バシヤバシヤと激しく水を弾く音がしている。

「ぶつつけ本番にしてはよく出来てるよな」

「ちよつとこれ……」

バシャーモの羽毛が邪魔で喋りづらい。

「下を見ればわかるさ」

レン君の言葉に従って、下を見る。バシャーモが足を素早く動かして水を弾いている。

「なにこれ……」

「走ってる、と言うよりは、水面を蹴っているって言うのが正解かなあ」

色々という意味がわからない。

「船代が浮いて良かつごぼつ」

レン君の言葉の続きは想像できる。問題は途中で途切れてしまったこと。そう、沈ん

だのだ。

理由は、バシヤーマが力尽きたから。

レン君は右肩、私は左肩に担がれていた。レン君が沈んだ。つまり、私も沈んだ。言葉が途切れたのはこのため。

「こんなこともあろうかとオオスバメに待機してもらって良かったよ」

悪びれもせずへらへら笑いながら服を搾るレン君。確かに助かったけど、この状況を招いたのもレン君だ。少しは反省してもらいたい。

あの後私は空中で待機していたオオスバメに回収され、対岸に運ばれた。バシヤーマはちやっかりモンスターボールに戻っていた。後でお説教しないと。

一方レン君は、いつの間に出していたのか、ハイガニと競争しながら泳いできた。

浜に上がって最初の一言があれである。この一連の出来事はレン君が仕組んだもの、ということだ。

「何でこんなことしたの!？」

「バシヤーマが修行したいって感じで俺に視線を送って来たから提案したらバシヤーマが乗ってきただけだよ」

レン君はいつからバシヤーマとそんなに仲良くなったの!?! ……つてもしかして、

パパとのバトルで様子がおかしかったのも……。

「もしかして、トウカシテイでも」

「きあいパンチは断られたからにどげりについてアドバイスはした」

はい確定。油断も隙もないのね。本当にいつの間にか？

レン君による常識の侵略は私では止められそうにない。誰か代わりに止めてください。

「それよりハルカちゃんも服乾かしたりしないの？ 風邪引くんじやない？」

レン君がこつちを見ながら言う。確かに、服が海水で濡れて張り付いている。

「ちよつと、こつち見ないでよ」

「いやいや、その程度じゃあ、ねえ？」

失礼な話だ。いや、見ないのなら別に問題ないんだけど。

「……よし、こんなもんだらう」

レン君はまだ明らかに湿ったままのブラウスを羽織った。肌に張り付いて黒のタンクトップが透けている。

「まだ濡れてるじゃん」

「馬鹿とか馬鹿じゃないとか関係なく、俺は風邪引かないから問題ないの」

意味不明。だけど否定できるほどの根拠があるわけでもない。

「ん？ あれって……」

何かに気付いたらしいレン君が走っていく。

「くしゅんっ」

私も服を乾かさないと。

「バシャーモ、火、お願い」

「あら、あなたはあの時の……確かレン君！」

「どうもお久しぶりです」

どうやらレン君は知り合いの人を見つけたみたい。

「時代はきあいパンチ！ ……前にインタビュアーに答えて貰った時の答えよ。ちゃんと覚えてるんだから」

どうやらテレビの人らしい。そのインタビュアー見たもんね。というか、色んな人を相手にする筈のインタビュアーさんにも覚えられてるとか……。相当印象が強かったんだね……。まあ、それもそうか。

「じゃあ早速バトルですね！」

「……うん、そうね！ やりましょうか！」

ちよつと間があつたのはなんなんだろう。

「おーい、ハルカちゃん」

えっ、私も呼ばれるの？ 何で？

「お友達？」

「はい！ 俺たち凄いい仲良しなんですよ！」

……スマイルよ、スマイル。たぶんカメラ回ってる……？ どっちにしても油断しちゃ駄目。

「ダブルバトルだよ！ 初のタッグ戦だ」

毒されつつあるバシャーモみたいに、非常識が私のポケモン達に移ったらどうしよう……？ ……バシャーモに戦ってもらおう。

「格闘タイプサイコー！」

バトル後のレン君のコメントだ。バトルでレン君が使ったのはレアコイル。技は言うまでもない。もう、どんなのが来ても驚かなくなってきた。慣れてきてて本当に嫌だ。

考えてみると、レン君の言う格闘タイプは某技のこと、そうになると、前回のインタビューで答えてたことと大して変わらないんじゃないかと思った。けどそれを私が指

摘しなくたって良いよね。だって疲れてるんだもの。

△月□日 雨

キンセツシティを出発して無理やり天気研究所まで来た。

道中マリさんダイさんに出会った。俺たち仲良しですって言ってやってやった。案の定ハルカちゃんは微妙な顔をしていた。

で、バトル↓インタビュー。今回はハルカちゃんとダブルバトル。俺はレアコイル、ハルカちゃんはバシャーモだった。ダイさんのレアコイルの日本になるように、ついで俺なりの配慮。砂鉄のきあいパンチとかかっこいいよね。今日は急いでだから教えられなかったけど、今度会ったらその時こそ教えよう。

それはそれとして、道中海水でびしょ濡れになったものの、適当に乾かして進んだ俺の判断はそんなに間違っちゃいなかった。この雨ならどの道服なんて濡れる。

ハルカちゃんの服も張り付いている。そんなに高揚感はないが。メイちゃんクラスなら俺も喜んだろう。まあ、仕方ないね。スレンダーなのは悪いことじゃない。

俺はともかくハルカちゃんは風邪引かないといいね。

カッパも傘も持つてるけど黙っておいた。

橋を塞ぐアクア団と交渉を試みたけど通してくれなかった。ので、交渉（物理）か川

を渡るかにしようかと思っただけ、どっちもハルカちゃんに止められた。流石主人公。真っ直ぐだね。

「おつ、ベッドもパソコンもあるじゃん。俺ここで待っていい?」

「駄目に決まってるでしょ」

「ですよー」

研究所の中にはアクア団がいっぱいいる。私だけじゃ相手してもらえない。

「通気孔にきのこの胞子ぶちこんだらすぐ終わるんじゃないかな」

何を言ってるのかわからない。

したつばを倒して先に進む。

「オーツホツホツホ! われわれ……」

高笑いするおば……お姉さんが目の前にいるけど、今はそれどころじゃない。レン君がどこかに行ってしまった。

一体いつの間に……? それに、何の為に……まさか、私に任せて先に行っちゃったの!?

「……なっちゃう! やっつけてあげるわね!」

レン君がそんなことするわけない！　なんて言えれば良いんだけど、しないとは言えないというか、レン君ならやりかねないというか……。

そうだったら、許せない。

「バシャーモ！」

「オーツホツホ！　強くて憎らしくなっちゃうわ！　マグマ団だけでも目障りなのに、あなたはどうして私達の周りを嗅ぎ回っているの!？」

いつの間に居なくなつたの……入り口では居た。仮眠室でも居た。一階のフロアの時は居た。二階は……二階！

そうだ。二階に行く時に登ってこなかったのね！

「大変です！　たつた今マグマ団の連中が天気研究所を通過して送り火山方面に向かつて行きました！」

「なんですつて!?　……こうしちゃいられないわ！　我々も送り火山へ急ぐわよ！　全員移動の準備をなさい！」

「はい！」

考え事をしている間にアクア団は引き上げて行つた。

研究員の人達からお礼を言われて、ポワルンというポケモンを貰った。可愛い。嬉しい。でも今はそれよりレン君だ。

急いで階段を下りると、レン君は普通に居た。何故か掃除道具を持って。

「何やってるの?」

「掃除じゃなかったら何なんだろうね? ……掃除とは何か、か……哲学的だなあ」

「何で掃除なんかしてるの?」

「バトルしたら散らかるじゃん。ここ研究所だよ? 散らかってるのはよくないじゃない?

い? 勿論、散らかったものを戻したりしただけだから、下手にいじったりはしてない

よ」

「え、ああ、そう……」

「散らかしたら片付けるって、常識、じゃない?」

レン君もその後研究員さん達にお礼を言われて、ポワルンを貰っていた。なんか、レン君に常識を語られるのは、複雑だ。

天気研究所を後にして、ヒワマキシテイを目指して進む。

「ハルカ! ん? レンもいるじゃないか!」

後ろから声がした。

「ああ、久しぶりだね」

ユウキ君だった。

「私はそんなに久しぶりじゃないけど」

「ここでポケモン探してたのか？　ってそれより、レン！　久しぶりに会ったんだから、バトルしようぜ！」

「お、そうだな」

「前とは一味違うってところを見せてやるぜ！」

一味、か……たぶんきあいパンチのことだよね……。

思い返せばあの頃はまだ比較的理解できるレベルだったなあ……。

……ん？　いや、待ってよ？　あの時点でスバメのきあいパンチでしょ？　理解できてないじゃん。危ないわ、本当に慣れって嫌。

「ハスブレロ、メガドレイン！」

「きあいパンチ！」

今回は、いや今回もレン君はきあいパンチしか指示しない。指示を受けたオオスバメは、一旦ハスブレロから距離を取り、ドリルみたいに回転しながら突っ込んでいく。

スバメの頃より強そう。すごい。

回転で攻撃を弾きつつ、確実にダメージを与えている。そして直撃の瞬間に拳が……。もう諦めよう。そういう技なんだ。私の目がおかしいわけじゃない。

「やっぱり強いな！ でもまだまだ！ マグマッグ！」

ユウキ君の二番手はマグマッグ。雨の中で戦わせるにはかわいそうなポケモンだ。じゅーじゅー言ってる。

「交代だ！ レアコイル！」

出た。レアコイルだ。私はレアコイルが苦手だ。レン君のせいで。

「きあいパンチ！」

きあいパンチが気持ち悪いから。もうレアコイルがきあいパンチを使えることには突っ込まない。

レアコイルのきあいパンチは物理技だ。磁力を使つて砂鉄を操つてパンチをする、とこののをレン君に聞いた。

まあそこはいいとしても、使うときのレアコイルが……あ、やっぱり気持ち悪い。

腕が6本。通常U字磁石があるところに砂鉄が集まって腕を形成した結果、腕が6本生えているように見える。

おそらくコイルの時には腕2本だったんだろうけど、レアコイルだから三倍。気持ち

悪さも三倍だ。

6本の腕から繰り出されるきあいパンチに、マグマッグはなすすべなく倒れた。

砂鉄であつて本当の腕じゃないからこそ、本物の腕では不可能な動きをすることも気持ち悪さの一因だと、バトルを見ていて思った。

「流石レンだな！ やっぱり強い。だが、こいつなら！ 頼むぞヌマクロー！」

きあいパンチのヌマクローだ。あのきあいパンチがレン君に、レン君のポケモンに通じるのかな……？

「行くぞヌマクロー！ きあいパンチだ！」

ヌマクローの拳が光る。

「へえ……」

レン君は興味深そうな顔で見ている。指示を出さなくていいのかな？

ヌマクローの拳がレアコイルに当たる。効果は抜群、だよな。でもレアコイルは倒れない。

「きあいパンチでも倒れないのか……」

がっかりするユウキ君。

レン君は考え込むような表情で何も言わない。

「そのきあいパンチ……誰に教わった？」

「え……きあいパンチ親父って人だけど……」

え、誰それ。きあいパンチばっかり使ってきそうな名前だけど。

レン君の表情が微妙な感じになった。

「成る程な。戻れ、レアコイル」

レアコイルを戻して繰り返したのは、サワムラー。ホウエンには生息していない珍しいポケモンだ。……あんなポケモン持ってたのね。

「ごめん、バトルを続けよう」

「お、おう！ ヌマクロー、もう一回きあいパンチだ！」

再びヌマクローの拳が光る。

「わかるか、サワムラー、あの技の歪みが」

サワムラーは頷いた。技の、歪み？ 何言ってるの？

そうこうしてるうちにヌマクローはサワムラーに迫ってくる。

「見せてやれ」

「きあいパンチ！」

その拳は、足だった。

「せっかくだから、改めて自己紹介させてもらおうよ……俺はコブシ・レン」

レン君はドヤ顔で言葉を紡ぐ。

「きあいパンチ親父だ」

……ハア？

1
1

「きあいパンチ親父だって!？」

「いかにも」

「じゃああの人は？」

「先代だ」

「……そうなのか」

「信じられないかな？」

「いや、なんとなくわかるっていうか、言われると、成る程って感じではある」

二人は話を通じてるけど、私からすれば、何もわからない。何が成る程なの？

あと、ヌマクローダウンしてるんだから戻してあげたら？

「名乗りついでに見せてあげるよ。本物をね」

私の困惑を余所に話は進む。レン君はサワムラーを戻してケツキングを出した。

本物って、ケツキングが出てきたってことは……謎の遠隔きあいパンチが出るの？

あれが本物？ 何言ってるの？

「きあいパンチ！」

レン君の声がして、気がついたら、ケツキングは動作を終えていた。いつの間に溜めていつの間に動いたのかもわからない。でも、今日の前には、左の拳を掲げ、仁王立ちするケツキングの姿がある。

……何か、まぶしい……？ 上を見ると、空を覆っていた雨雲に、巨大な何かに貫かれたような穴が空いていた。

……ん？ いや、まさかね？

「真のきあいパンチは、雲を貫くのさ」

もう知らない。

(△月□日の続き)

天気研究所でのなんやかんやを終え、ヒワマキシティに向かっていると、ユウキ君が現れた。俺がバトルを挑まれた。さすがにいきなりは驚いたよね。

勝ちましたけどもね。

先代のきあいパンチ親父にきあいパンチを習ったそうさ。ヌマクローはきあいパンチを覚えられないはずなのにあのおっさんどうやってたんだ？

スバメのきあいパンチを見ていたおかげで、ヌマクローも自分ができないとは思って

いなかったから、とか？ まあ細かいことはどうでもいいや。

その後エニシダさんが現れた。きあいパンチを誉められた。さすが廃人ホイホイのオーナーなだけある。話がわかる人だ。エントリーコールも登録した。

近いうちに連絡するつてよ。バトルフロンティア楽しみだな。

で、ようやくヒワマキシテイに着いた。ジムは明日にする。

「通れない……」

「そうみたいだね」

ジムの横の道を通せんぼするカクレオン。確かシルフ……じゃない、デボンスコープを使えばいいんだったつけな。

「どうしようか？」

「うーん……たぶん時間が経ったら誰かが気付いて何とかしてくれるんじゃない？」

「ああ、確かにね。じゃあ、一旦別行動とかにする？」

「うん、そうしよう」

心なしかハルカちゃんの表情が明るくなった気がする。俺と別行動だからか？ 一体俺が何をしたつてんだ。別にいいけど。 一

俺はただきあいパンチを追及するのみ。

別行動と決めたら、ハルカちゃんも割とすぐに何処かへ行ってしまった。ので、俺はカクレオンをどうにかしようと思う。誰か、つてのが俺でも別に問題ないだろう。

見えない壁、というかカクレオンというのは厄介だ。しかし、見えないだけ。

見えないと当たらないはイコールではない。見えない、だがそこにいる。なら、当たる。当たるなら、きあいパンチの敵じゃない。

「きあいパンチ！」

「あ、もしもしレン君？ 今ダイゴさんに会って、デボンスコープっていう道具を貰ったの」

「へえ、良いもの貰ったね」

「見えない物が見えるようになるから、ジムの横のも何とかできるかも！」

「あ、それなんだけどき、もう通れるようになったよ」

「……そうなんだ」

折角の道具を無駄にってしまったのは俺のせいだよな。だが私は謝らない。

「……うん、別に、いいよ……うん」

「なんか……ごめん」

謝っちゃったぜ。

まあ、そりゃあ、レン君なら何とかできるっていうか、しちやうんだろうとは思ったけど、何か、ね。あからさまに手掛かり手に入れて、これ使える！　って思った挙げ句、もう大丈夫ですってのは、ね。

「だから謝ってるじゃん」

「そーいう問題じゃないの」

「そうだろうけどさ」

「謝罪と賠償を求めろわ」

「えー……わかったよ」

「今回のジム戦、きあいパンチ無しね」

「成る程……」

あれ？　反応薄いね。問題ないのかな？

「……………え、まじで？」

……そういう顔が見たかった。いつもいつもきあいパンチで困惑してる私の苦しみを
知るがいいわ！

「破ったら……次の町……ミナモシテイまで逆立ちね！」

「……オーケー、やってやろうじゃないか。きあいパンチ無しでもやれるってことを見せやるさ」

「私はこのヒワマキジムでリーダーをしているナギ。鳥ポケモンと心をかよわし、一緒に大空を舞い……どんな苦しい勝負も優雅に勝ってみせる……という意識で日々戦っています」

「俺はレンと申します。ポケモンにこだわりはありませんが、ポケモンの可能性を信じて日々ポケモンと一緒にきあいパンチを追及しています」

「……まあ、いつものことよね。でも今回はバトルでは使わないんだから……純粹にバトルを観ていられる筈……！」

「きあいパンチ……私の使うポケモン達にはあまり効かないでしょうが……」

「今回はきあいパンチは無しでやれと友人に言われております」

「そうですか、まあ、どちらでも構いません。私は私のバトルをするだけ……さあ、私とポケモンが織り成す華麗な舞を見せましょう！」

「チルット、燕返しです」

指示を受けたチルツトが、レン君のマタドガスに迫る。……レン君は指示を出さないの？

顔を見ると、険しい表情で何かを呟いているのが見えた。……聞こえるかな？

「きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……」

あつ……。

いや、私のせいじゃないし。

「レン君しっかり！」

ハツとした顔をしてマタドガスに指示を出そうとするけど、既にチルツトはすぐそこに迫っていた。

間に合わない。

「すまん、マタドガス……反撃だ！ きあ……んん！ 落ち着け俺。きあいパンチは駄目だ……ええつと……体当たり！」

うん、それでいいのよ。これこそ真つ当なバトル。

レン君の指示でマタドガスはチルツトに向かって……ん？ 何で回転してるの？

マタドガスに進化する時、ドガースの意識は二つに分けられた。

頭の中がスツカスカのデカイ方とそれなりに中身が詰まった小さい方といった具合に。

ドガスであつた頃からきあいパンチばかり撃つてきたが、今、自分は体当たりを指示された。

小さい方は考えた。

これは普通の事態ではないと。きあいパンチ使い、否、きあいパンチ狂いたるレンがきあいパンチを指示しないという今の状況はおよそ尋常ではない。何か裏があるのだ。指示通りに動くのは一旦待つべきだ。

一方、デカイ方は考えない。

体当たりを指示された。よろしい、ならば体当たりだ。丁度先程攻撃を食らつてムカついていたのだ。やり返さねばスツキリしない。

ここで、一つの矛盾が生じる。

片方は動こうとせず、片方は動こうとする。結果、どうなるか。マタドガスは回転を始めた。

デカイ方は動くため、小さい方は動かないため、お互い力を込めた結果、小さい方を中心に、デカイ方がぐるぐると、独楽よろしく回り始めたのだ。

両者は別々の意思であるが、元々は一つであった。故に、テレパシー的な物で意思疎通が可能だ。

デカイ方は問うた。何故動こうとしないのか。お前はあの鳥に思い知らせてやりたくはないのかと。

小さい方は答えた。何故お前はもつと考えないのかと。きあいパンチ狂のレンが体当たりと指示するなど、通常ではあり得ない。何か意図がある筈だと。

だがあくまでデカイ方は考えない。意図があるにせよ無いにせよ、取り敢えずあの鳥に一発かましてからで良いではないかと。

マタドガスは回転を続ける。

ここで、小さい方は思い付いた。

この回転を利用するのはどうか。レンはこのことを意図していたのではないか。回転の力を利用した、煙を使うのとは違う、物理的なきあいパンチ。それを生み出させようとしたのではないか。

しかし、デカイ方には伝わらない。

故に小さい方は端的に伝える。

自分が、お前を使って、あの鳥を殴る。お前は黙って振り回される。

それでもデカイ方は理解しない。スカスカは伊達ではないのだ。

流石にイラツとした小さい方は乱暴に言葉を並べる。

お前が、きあいパンチだ！

ここまで来てようやく、デカイ方は理解する。

成る程、つまり、オレがきあいパンチになるってことだな。

二つの意思がきあいパンチという目的のために一つとなる。

回転は早さを増していく。

チルツトは再び攻撃するために近づいてくる。

狙うは顔面。

接続部分は腕、デカイ方は拳。ローブシンのそれを目標に。

小さい方はあえて回転の角度をずらす。これにより、打撃は真横ではなく、斜め上からチルツトを襲う。

頭への打撃を受け、さらに、地面へ叩きつけられる。

チルツト、戦闘不能。

……今の、きあいパンチじゃね？

あれ？ 俺、体当たりって、言ったよね？ 聞こえてなかったのかな……いや、そんなわけないよな。え、何、もしかしてお前から俺に逆立ちでもしてろって言いたいのか？

気のせいだよな。うん。

いやしかし、これ、ハルカちゃんの判定がアウトだったらダメなんじゃ……うん、首傾げてるね。際どいぞこれ。

「戻れ、マタドガス」

マタドガスを戦わせ続けるのはリスキーな気がする。チェンジだ。チェンジ。

ちゃんと指示通りに動いてくれる奴じゃないと……。

「きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……」

口を滑らせたら負けだ。落ち着いて行こう。

……フリーディンは賢いし、ちゃんとやってくれるよな。

「頼むぞ！ フリーディン！」

フリーディンは知能指数5000である。知能指数とは即ち賢さ。その数値が5000もあるのだ。それはもう、とんでもなく賢い。

知能指数5000の知性溢れる自分は主から頼りにされている。その自覚がある。知能指数5000たる自分が自覚しているのだからほぼ間違いない。

「トロピウス、日本晴れです」

この珍妙な生物トロピウスがやることなど容易に想像できる。溜めを短縮したソーラービームを撃つてくるのだろう。

しかし、知能指数5000たる自分であれば、発射を潰すなど造作もない。放つ直前にきあいパンチをぶつけてやれば一発だ。

「ソーラービーム！」

「フリーデイン、サイコキネシスだ！」

フリーデイン、硬直。

敵の行動は読めていた。知能指数5000たるフリーデインにとっては息をするように簡単だった。だが、主の行動までは読めなかった。フリーデイン、手痛い計算ミス。

この硬直の間にソーラービームは放たれ、フリーデインはその直撃を受けた。

痛恨なり。

まさしくフリーデインにとって屈辱であった。前回のジム戦で晒した醜態もひどかったが、今回も情けない。

よかろう。きあいパンチ無しでやれと言うのであれば、それを完璧にこなして見せよう。

次のソーラービームは潰す。確実に。

「ソーラービーム！」

「撃たせるな！ サイコキネシス！」

サイコキネシス、いや、テレポートで十分だ。珍妙な生物の頭の真下へ移動し、拳で顎を打ち上げる。当然、口は閉じられ、発射寸前だったソーラービームは口内で暴発する。

トロビウス 珍妙な生物は口から煙を上げながら倒れた。容易い仕事だ。

「ちよ……お前……」

主は何を心配しているのか。

今のはきあいパンチではない。ただのパンチだ。

続いて出てきたのはペリッパベリッパ。不気味な目をしている。

「ペリッパ、超音波です！」

「ヤバい、よけろ！」

知能指数5000たる自分は、混乱などしないのだ。故に、避けるまでもない。仁王立ちで超音波を受けてやった。

ほら見ろ。何とも無いではないか。知能指数5000は伊達ではない。

「……まあいいや！ 反撃だ！ サイコキネシス！」

フーデインは、動かない。

フーデインは、考えていた。何故、きあいパンチを指示しないのか。何故、きあいパンチを撃つてはならないのか。

刹那であった。知能指数5000の思考は一秒も要らない。考えた末、フーデインは主の思考を読み取ることにした。

”きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……きあいパンチはダメ……”
フリーデンは理解する。この状況を。

フリーデンは知っている。これは、フリと言うやつなのだ。

押すなは、押せ。やめろは、やれ。

きあいパンチはダメは、きあいパンチ以外はダメ。そういうことなのだ。

ここまで合計約一秒。動くにはまだ余裕がある。

前回の頭突きは失敗だった。いや、威力はあったが……諸刃の剣は最後でいい。

他に何か無いか。

そこで気づく、フリーデンの新たなきあいパンチ。サワムラー足野郎が使い、バシヤモシヤモが使い

(バシヤモシヤモのそれはきあいパンチではないが)、フリーデンが使っていないもの。

「しっかりとしろフリーデン！ サイコキネシスだ！」

指示を聞いて、フリーデンは駆け出す。

前回、フリーデンは頭を使った。そして今回も頭を使う。

これは指示を無視しているわけではない。サイコキネシスをしないわけではない。攻撃として使わないだけ。相手の動きを封じ、自分が宙に浮くために使っている。だか

ら問題ない。

空中で停止したペリツパーに、フリーデインが迫る。

今の自分は荒ぶる鷹。哀れな小鳥に現実を教えてやるのだ。

そして放つ、きあいパンチ（蹴り）。

ペリツパー、戦闘不能。

フリーデインは満足げに地面に降り立った。荒ぶる鷹を思わせるポーズを決めながら。強制送還を示す赤い光に包まれながら、フリーデインは首を傾げていた。

もう俺はダメかもしれない。

フリーデインは混乱させられる運命でも背負ってるんだろうか。しかも最後のはたぶんきあいパンチだったし。

ハルカちゃんは険しい表情で首を傾げている。

……まだ、セーフ？ 良かった……。

逆立ちなんて勘弁だもんな………あれ？

逆立ちくらいならいけるんじゃない？

いやいや、待て、流石にミナモシテイまで逆立ちは無茶だ。

気を取り直して行こうじゃないか。フリーデンがあまり頼りにならなそうとなると……新入りに頼むか。

あのフリーデン、やつぱり強い……。

でも、サイコキネシスって指示されたのに蹴るっておかしいよね。

あれ、アウトじゃない？

……一回までなら誤射かもしれないって言うよね。……一応、見逃しておこうか。次やったら、アウト。うん、そうしよう。

ナギさんはエアームド、レン君はカクレオンか。……捕まえたのね。

カクレオンは、怒っている。トレーナーであるレンに対して。存外根にもつタイプなのだ。

確かに、ジムの横の道を塞いでいたのは、悪かったかもしれない。自分も、邪魔するつもりでそこにいたのだ。無理やり退かされても仕方ないと言えば仕方ないだろう。

しかし、あろうことか、唐突にきあいパンチだ。

そりゃあ、飛ばされる。こちとら普段はノーマルタイプだ。弱点を突かれてはたまっ

たものではない。

挙げ句のはてに捕まってしまった。何だこれは。

横暴である。悪い人間でないのはわかるが、納得いかないものはいかない。

故にカクレオンは決めていた。最初のバトルでは言うことを聞かないでいようと。

「カクレオン、サイケ光線！」

……無視する。相手のエアームドは油断しているようだ。

遠慮なく騙し討ちしてやろう。

サイケ光線を撃つかのようを見せて、跳躍。……堅そうだ。ならば、此方も堅い部分で殴るのが筋。全力で肘を顔面にぶつける。

エアームドも、レンも、驚いているようだ。

……気分がいい。

今の攻撃で、エアームドは高度が下がり、自分の方が上に居る。

丁度いい。追撃だ。叩き落としてやろう。折角覚えたのだから、使わなくては勿体無い。

空中で仰け反り、力を溜める。

「ちよっ……止めろカクレオン！ それはダメだ！」

自分は怒っているのだ。聞いてなんてやらん。

多少頑丈だろうが、関係ない。耐えられるものか。

必殺の舌きあいバンチを食らうがいい。

エアームドは打撃に強い。

故にエアームドには自信があつた。

自慢の鎧は堅くて強い。炎と電気以外はなかなか通らない。だからこそ、挑んで来る相手は炎タイプか電気タイプ。あるいはその技を使えるポケモンだ。

しかし、今日の前に居るポケモンはどうだ？ 炎も、電気も、使えそうには見えない。だからこそ、高をくくっていた。

これまでわざわざ物理技で挑んできた相手は、大抵、拳や足を負傷して終わる。

「カクレオン、サイケ光線！」

成る程、遠距離か。賢明な判断だ。

発射の瞬間、華麗に回避して反撃に転じてやろう。そう、思っていた。

来る。そう判断し、回避しようとした時だった。

……光線が来ない。

唐突な肘。

そして、予想外の、舌。

何とも形容しがたい衝撃がエアームドを襲う。

光線ではなく、打撃、更に、舌。頭から地面へ叩き落とされる。思いがけない、色々、思いがけない。精神面と物理面、二重の衝撃はエアームドの意識を刈り取った。

……オーケーわかった。もうやめだ。

良いだろう、やってやるよ。逆立ちなんて屁でもねえ。

きあいパンチ、撃とう。後のことは、後で考えよう。

所詮俺には、きあいパンチ以外なんて、無理だったんだ。

「雰囲気が変わりましたね」

「わかります？」

「ええ、風がそう言っています」

ジムリーダーすげえ。

「ここから、あなた方は今まで以上の力を発揮するのでしょうか……」

「まあ、そうなりますね」

「……いいでしょう。バッジは差し上げます」

ん？

「それはどうい……」

「あなた方の力は見させてもらいました。バッジを渡してよいと判断するには、充分です。それに、あなた方にはまだ余裕があると思いますが、私のポケモンはあと一体。ここからの逆転は難しいでしょう」

つまり、どうい……ことだ……

「諦める、という意味ではありませんよ……ジムリーダーとしての私はここまで。ここからは一ポケモントレーナーとしてお相手します……」

「………光栄です」

………たしか、ラストはチルタリスだっけ？ まあ問題ないでしょう。

「あなた方の使うきあいパンチは、格闘タイプ最強の技……ならば、此方も、タイプ最強を以て戦います」

「あなた方に神を見せてあげましょう……!」

……いや、カードゲームじゃあるまいし。

「チルタリス!」

ナギさんの声と共に、チルタリスが高く舞い上がり、激しい光に包まれる。

……神って何よ。

ナギさんもしかして患ってるの? あとでバトルするの嫌なんだけど……いや、あれは、何かしら火がついたからああなっただけよね。大丈夫、大丈夫。

「ポケモンの技は沢山ありますが、その中で唯一、神を冠する技があります……。この技はたとえ伝説のポケモンであっても使うことのできない特別な技……」

「そう、言うなれば、選ばれしポケモンのみが至ることのできる境地……」

「さあ、舞いなさい、チルタリス! ゴツドオ……バアアアード!!」

すごい、レン君が全然喋ってない……!

いや、それはそれよね。

チルタリスは、燃えるような紅蓮のオーラを纏ってカクレオンに向かっていく。
「カクレオン！ きあいパンチ！」

カクレオンが勢いよく舌を放つ。けど……押し負けた……！ そのまま吹っ飛ばされて、カクレオンは戦闘不能。

これは……来てるよ！ 頑張れナギさん！ レン君なんて、きあいパンチなんて、倒しちゃえ！

「……オオスバメ！」

レン君はオオスバメを繰り出した。

「遂に来たぞオオスバメ。とうとう、別のタイプ最強の技とぶつかる時だ。……飛行タイプ最強の技なら、飛行タイプ最強の技だからこそ、きあいパンチで破らないとなあ！」

「スバツ！」

「来ますよチルタリス！ もう一度、ゴッドバード!!」

「きあいパンチ！」

オオスバメ得意の突撃型きあいパンチ。チルタリスのゴッドバードとぶつかって、拮抗してる……？ いや、オオスバメの方が弱いみたい。もう押されて……ああ、押し負けちゃった。

……これは本当に行けるんじゃない？

「オオスバメ、今こそお前の根性を見せる時なんじゃないか？」

ん？

「ここで負けたら、お前は、飛行タイプとしても、タイプ最強技の使い手としても、負けたことになる。それでいいのかわ？」

始まってしまった……。

「立ち上がれ、そしてまたぶつかるとだ。神に翼なんてない！ ありもしないものの偶像に負けるなんて、耐えられないだろ？ お前の翼は、お前の力は、お前の魂は、その程度じゃない筈だ！ きあいパンチは、神すらも超える！ お前が、超えてみせろ！！ 魂を燃やせ！！」

……ノーコメントで。

「まだ立ち上がりますか」

オオスバメが立ち上がった。

なんか、燃えてる。いや、比喩とかじゃなく、青白い炎を纏っていて、なんか燃えて

るように見える。何この現象。ゴッドバードって飛行タイプだから燃える筈ないし……ならこの現象はオオスバメ自身によるもの？ まさか本当に魂が燃えてるとか？ セルフ根性だとしても言うの？

……もうやだ。

「ぶちかませ！ きあいパンチッ!!」

「ゴッドバード!!」

赤と青オーラを纏った二体は、流星のように尾を引きながら何度もぶつかり合い、やがて、青が赤に打ち勝った。

そしてレン君は、今後しばらく逆立ちで過ごすことになる。

1 2

「おい、何だアイツ!？」

「こつち来てるぞ！」

「何で笑ってるんだ!？」

「くそっ……逃げろ!!」

こつちは逆立ちしてるだけなんだが。いい大人がそれにここまで大袈裟に反応して、逃げ惑ってたんだから、笑うしかないよ。

「バカかお前ら！ 侵入者だぞ！ 捕まえるよ！」

「だったらお前も逃げてんじゃねえよ！」

「……ホラー映画でも見てるような気分だぜ」

「ブー」

バネブーが同意するように鳴く。出した覚えはない。何で出てきたんだよ。せめて俺の頭から退いてくれよ。バネの音がうるさいんだよ。

……ポケナビが鳴ってるな。

「バネブー、取ってくれ」

「ブー」

「ありがと。……もしもし、レンです。あ、ハルカちゃん、どうしたの？……潜水艇が？」

うん、そうか、頑張ってる」

「俺？ 今、アジトっぽいの見つけて入った所だよ」

「……あー、まあ、そうなんだけどき、思ってたより問題ないよ。逃げてったし」

「うん、マグマ団の人が」

「え、そりゃあ、仕方無いでしょ」

「だって俺、逆立ちだぜ？」

△月◆日 雨とか色々

逆立ちの休憩がてら書いている。

ヒワマキシテイを出てミナモシテイに向かっていた俺（逆立ち）とハルカちゃんだったが途中で、送り火山に向かうアクア団の連中を見てしまい、「放っておくわけにも……」というハルカちゃんの意見に従い、送り火山に向かうことになった。

頂上に行くと、案の定例の玉がパクられる所だった。アクア団だけじゃなく。マグマ団も玉持ってたつてんだから大惨事よ。

これまた放っておくわけにもというところで手分けすることに。ハルカちゃんもアクア団が向かうって言ってたカイナシテイへ。俺はマグマ団のアジトを探すところから。勿論逆立ちしながら。

場所を知らなかったら辛かっただろうね。やっぱり知識って大事。

岩の前に居たしたっぱは逆立ちした俺の姿を見て逃げた。失礼な話だよな。

先程の連絡によると、カイナシテイで潜水艇がパクられたそうなので、ハルカちゃんにはミナモシテイのアジトへ行ってみるそうだ。

一方その頃、俺は逆立ちをしている。……この字面のシールドさよ。

マグマ団のアジトは火山にあることもあつてか、床と言うか、地面が熱い。空調は効いているものの、地面には誰も気を配っていないらしい。彼らの装備が長靴だからかな。結構性能いいんだろう。

そんなこともあつて、俺も手に靴を履いて？ 移動している。素手よりは遥かに快適だ。

長時間の逆立ちは体によろしくない。しかしかといつてちよくちよく休憩してられ

るかと言ったらそんなこともない。体調管理要員としてフリーデンが基本的に俺の後ろに佇んでいる。血管とかそういうのをどうのこうの。サイコパワーって便利だな。

同じサイコパワーでもスリーパーが背後に立っていると事案である。でもフリーデンだとそうでもない。知能指数50000って偉大だ。

バネブーは何がしたいのかよく分からない。俺の頭の上で跳ねている。

「ウヒ……何だ、お前」

「何で真顔になるんだよ。ウヒヨヒヨって言わねえのかよ。そんなに逆立ちしてるのがおかしいか。」

「なるほど、したっばどもが慌ててたのは、お前が原因だな？」

「俺は何もしていませんよ」

「そう、逆立ち以外はね。」

「……まあいい。ここは通さねえ」

「以下きあいパンチ。」

「ウヒヨヒヨ……こんな変なのに負けるってのは、複雑だぜ」

「あなたの笑い声、被ってますよ」

「ウヒヨ？ なんの事だ？」

さて歩くこと……どのくらいだっけ？ どうでもいいか。

グラードンのいそうなエリアに来た。

何故わかるのかって？ そりゃあ俺が空気を読める男だからさ。なんかほら、気温高いし。

おつ、やってるね。

「マグマに眠るグラードンよ……何をしても目覚めなかったお前が求めていたのは藍色の玉……そうなんだろう？」

藍色の玉を片手に一人でポケモンに語りかけているオジサマを影から見守る逆立ちの少年……絵になるね！

「さあ、ここにもってきてやったぞ！ この輝きで目を覚まし、お前の力を私に見せるのだ！」

オジサマことリーダーマツブサが藍色の玉を掲げた。玉が光を放つ。

光を浴びたグラードンは目を覚まし、一声吠えようと、再び目を閉じ、マグマの中に沈んで行った。……飛んでいくわけじゃないのか……。

「……グラードン！ 一体、どうしたと言うんだ!? 藍色の玉ではダメだと言うのか？」

どこへ消えてしまったんだ」

さて、出ていくタイミングだろう。

「お前か！ あつちでもこつちでも……」

何だ、言葉の途中で黙つちやつて。

「誰だお前は！」

「通りすがりのきあいパンチ親父だ！」

すり替えたりはしていない。だって俺は地獄からの使者じゃないからね。

「何だ、何なんだお前は!? 何故逆立ちをしている!?!」

「誰かを助けるのに理由が要るんですか？ 要らないでしょう！ つまり、俺が逆立ち

することにも理由なんかいらぬ！」

「ええい、知ったことか！ お前が何かしたんだな？ 許せん、マグマに叩き落としてや

る！ 行け、グラエナ！」

「仕事しろバネブー！ きあいパンチ！」

「ブー！」

「噛み砕く攻撃だ！」

グラエナが大きく口を開けバネブーに迫る。迎え撃つバネブーは頭の真珠を手に取り

り、バネを絞る。そして、跳躍。

真珠は、吸い込まれるように、グラエナの口の中へ。

衝撃がグラエナの歯を、顎を、頭を襲う。グラエナの意識が薄れていく。

だが、まだグラエナは倒れない。グラエナにも意地があるのだ。噛み砕くという指示を受けた。ならば噛み砕かなければならない。

しかし自分の口は真珠が塞いでいる。バネブーを噛み砕くことはできない。

ならばやることは一つ。せめて、真珠を噛み砕く。ギリギリと顎に力を込め真珠に圧力を掛ける。やがて、ヒビが入り、真珠は砕けた。

一仕事終えた満足感と共に、グラエナは意識を失った。

一方、バネブーはと言えば、号泣していた。あの真珠は物心ついた時からずっと、そして戦闘においても常に、自分の傍ら（頭の上）にあった。そう、例えるなら、相棒のようなものだった。

それが奪われたのだ。

声にならない声で真珠のことを呼び続けていた。しかし、もはや真珠は答ええない。考えてみれば壊れる前も答えてはくれなかったのだが。

自分の使い方には問題なかった筈だ。問題があった筈がない。だってきあいパンチ

にしか使っていないのだ。壊れる理由がない。壊せる筈がない。そう、きあいパンチ一発で沈むような奴に真珠を壊せる筈がないのだ。

ああ、しかしだ。現に真珠は碎けてしまった。壊れたものは戻らない。もうこの真珠ときあいパンチすることはできないのだ。

たった一度の攻防。しかし、そこでバネブーが失ったものはあまりにも大きかった。

ゆゑる”き”ん”

「クロバット、影分身だ」

「バネブー、やれるか?」

バネブーは頷いた。

これは敵討ちだ。報復だ。真珠が味わった痛みを思い知らせてやらねば。

「きあいパンチ!」

バネブーは跳ぶ。そして、殴る。真珠亡き今、バネブーは自らの拳を振るい、戦っていた。殴っては分身が消え、殴っては分身が消える。そして、最後の一体。漸く感じる手応え。これが、殴るといふ感覚。

まず一撃。殴った反動で後ろに下がり、バネの力でまた飛び出し、殴る。繰り返すこ

と数回。

クロバット、戦闘不能。

すっかりダメージは与えた。そして感じる拳の痛み。これが、きあいパンチの痛みか。……いや、痛くなどない。真珠は呻き声一つ上げなかつたではないか。自分だつてやれるんだ。

真珠がいなくたって、一人で、やれる。

そうでなくて、真珠が、真珠が……安らかに逝けないではないか。

バネブーの脳裏に真珠との日々が甦る。跳ねる自分の頭の上でガタガタグラグラする真珠。きあいパンチの時、勇ましく相手の脳天にぶつかっていく真珠。相手の攻撃から自分を守ってくれた真珠。

……やはり自分は真珠に頼りっぱなしだった。情けない。なんと情けない。

今のクロバットも、真珠とのきあいパンチならば一撃で仕留められた筈なのだ。真珠が居ないだけでこんなにも……。

涙で歪んだ視界の中で何かが動くのを感じた。相手のポケモン？ ……いや、違う。あれは、あの輝きは……真珠！ 逝ってしまった筈の真珠が、その欠片が、再び集まり、元の球体に戻っていく。

先程とは別の涙がバネブーの頬を流れる。また、戦つてくれるのか。まだ、やれると
言うのか。

バネブーは再び真珠を手に取り、頭の上へ……持つていくかに思われたが、持ち上げ
て、後ろの地面へ置いた。

真珠は戸惑つただろうか。だが、これは必要なことなのだ。真珠が復活したのなら、
だからこそ、自分の力で勝たなければならぬ。

真珠への感謝と、別れの気持ちを含めて、バネブーは前を向く。その背中は、覚悟を
決めた背中。雄豚の背中であつた。

相手はバクーダ。思えば真珠と共に放つた初めてのきあいパンチの時もバクーダが
相手だつた。

倒さねばならない。一人で、そして、一撃で。真珠を安心させるのだ。

「……わかつた。良いだろう。バネブー、きあいパンチだ」

バネブーはバネを絞つた状態で、目を瞑つた。

バネブーの心臓は、足代わりのバネで絶えず跳ね続け、その衝撃によつて動く。つま
り、それだけ自力で動く力が弱いのだ。

現在のような、跳ねることを止めた状態にいることが如何に危険なことか。まさしく

命懸け。一世二代、バネブーの覚悟の表れである。

「バクーダ、突進だ！」

勢いよく突撃してくるバクーダ。いつもなら、真珠あいはらが助けてくれる。しかし、耐えねばならない。逆に考えるのだ。この衝撃で心臓が動くと考えなのだ。

そしてバネブーは、地面に長い線を引きながらも……耐えた。

反撃の時。

心臓が動く。血液が踊る。今この瞬間、バネブーの全てが、きあいパンチの為に動く。

真珠あいはらへの思いを込めて放つ、決別の一撃。

さらば、真珠ともよ。

気づけばバクーダは地面に倒れていた。

バネブーが振り向くと、真珠あいはらは「見届けたぞ」とでも言うようにキラリと光り、静かに破片へと還った。もう動く気配はない。

バネブーは静かに涙を流した。

なお、後日大きな真珠を持たせて貰い、狂喜乱舞するのはまた別の話。

「あ、もしもし、レン君？ そつちは……ああ、終わったのね」

無事みたいで何よりだね。

「私？ うん、まあ、なんとかあったんだけど……まだ終わってないって言うかなんて言うか……」

カイナシテイからミナモシテイのアジトへ急いで行って、奥に言ったら何処かで聞いたような笑い声の小太りのおじさんとバトルして、でもそれは時間稼ぎで、リーダーの人達は海底洞窟とか言うところに行ったらしい。

「……お疲れ様って、そりやそうだけどき。それで、どこで合流する？」

「え、しないの？ いやまあそうだけど……じゃあ取り敢えずトクサネシテイに行つてるね」

……まあ、合流しない方が気が楽ではあるよね。

嫌な予感があるのは何故だろう。こう、猛獣の檻の鍵が閉まってないとか、そんな感じの不安がある。

さて、トクサネシテイに着いた。ムロタウンとはまた違った趣がある。生えてる木が違うし、島自体も大きいし、砂浜がボコボコ。……ん？

砂浜がボコボコっておかしくない？

「あ、ハルカちゃんだ」

此方に手を振りながら歩いてくるレン君。砂浜の原因がわかった気がした。

13

「一体、何があつたの？」

あんまり聞きたくないけど、でも、聞かないといけない。一応、そう、一応、私も関係者にあたるかもしれないから。

「トクサネシテイに着いたらさ、爆裂パンチ教えてる人がいたんだよ」

「ここまでは問題ない。」

「……うん、それで？」

「取り敢えず、ぶつけるしかないじゃん？」
んなわけない。

「そつか、そういうことも、あるんだね」

「また一つ俺はきあいパンチを深めることができた気がするよ。爆裂パンチの人も喜んでた」

「……よかつたね」

砂浜に同情を禁じ得ない。私は整地しないけど。

「今からジムに挑むけど、どうする？」

「……うーん、観戦はいいや」

船で来たから疲れたし。見たら余計に疲れちゃう。うん、見ないのが正解ね。
「せっかく凄いのができそうなのに……」

余計見たくなくなった。ジムリーダーさんの無事を祈ります。

ハルカちゃんが来ないというなら仕方ない。きあいパンチがすごい技だつてのを証明できるのがまた一つ見つかったから実演したかったけど。機会はまたあるだろう。

爆裂パンチの人、すなわち爆裂おじさん、とぶつけあつてわかったこと……やはり、きあいパンチは全てのパンチに通じている。

エスパータタイプのジムでやるつてもあれだが、試させてもらおうとしよう。

「へへへ、ジムリーダーが二人もいるんでおどろいた？」

「ふふふ、ジムリーダーが二人もいるんでおどろいた？」

「僕たち双子！」

「私たち双子！」

「何も言葉にしなくても」

「お互いの考えていることが」

「頭の中に浮かぶから」

「通じあうことができるのヨ！」

「そんな僕たちのコミュニケーション」

「君に破ることができる？」

「できればどつちかがまとめて話してくれないか……」

コンビネーションには二種類ある。互いに補完しあうことで安定した力を発揮するタイプと、互いの強みを生かして火力を高めていくタイプ。この二人はおそらく前者。

安定したコンビネーションを破るには、火力、または……思い付かねえや、取り敢えず火力。つまり火力があればいい。

それに、最終的に重要なのは、如何に自分のバトルをするか。結局は自分のバトルをした方が勝つのだ。

きあいパンチという火力ときあいパンチぶっぱという俺のバトルスタイルが合わさって最強に見える。……見えない？

考えてみればハルカちゃんとタッグで挑むって手もあつたのかな……ハルカちゃん

は嫌がるよな。……まあいいや。

目の前のバトルに集中しよう。

きあいパンチは、全てのパンチに繋がる。

これはどういうことか。

冷凍パンチを凍らせるものは何か？

炎のパンチを燃やすものは？

雷パンチの電源は？

爆裂パンチの爆発は？

……これらを結びつけるのが、きあい。

きあいとはエネルギー。

きあいとは意思。

拳に込められたきあいが、ポケモンの意思に従い、氷に、炎に、雷に、爆発に形を変えらる。

では、それらの拳がきあいパンチよりも威力が低いのは何故か。答えは簡単。変換によつて、ロスが生まれるからだ。

光を放つ、熱を放つ、逆に冷やす、いずれも拳から抜けてしまうエネルギーが生じる。

きあいパンチとは根源。

きあいパンチの場合、エネルギーはエネルギーのまま、ただ相手にぶつける為だけに使われる。当然ロスは少ない。

いや、訂正しよう。本来のきあいパンチ、純粹なきあいパンチであれば、そうだ。

一般に普及しているそれは違う。本来拳の威力を上げるためだけに使われる筈のエネルギーが、拳を光らせることにも使われている。無駄だ。果てしなく無駄だ。

バトルの観戦が人気であることが一つの要因だろう。

純粹なきあいパンチは、率直に言つて地味である。いや、行くところまで行つてしまえば面白いほど相手は吹っ飛ぶため地味とまでは言えないのだが、そこまで至るのは至難の技だ。至るまでは地味にならざるを得ない。

それに対して大衆向けのきあいパンチはどうだろう。これ見よがしに集中した挙げ句、なんと、拳が光るのだ。これは強そうだ。観戦していて見応えもあることだろう。

炎、冷凍、雷、爆裂もそうだ。拳から炎が、冷氣やら氷が、電気が、爆発が出てくるのだ。それはもう強そうだ。

だが敢えて言わせてもらおう。

だからそれらは中途半端なのだ。

コブシ・レン著 『我々はまだきあいパンチを知らない』第一章 きあいパンチとはより

「さあ行くぞ！ フーデイン、カイリキー！」

僕たちはエスパータタイプのジムリーダー。そんな僕たちに、フーデインはともかく、カイリキーを繰り出すなんて……初心者かな？

隣のランを見て頷く。

相手がどうあれ、此方はいつも通りやるだけだよね。

「きあいパンチ！」

いくら威力が高いからって、格闘タイプの技じゃネンドールとネイティオは破れない。常識だよね。

常識の筈だった。

フーデインのきあいパンチを受けたネンドールが倒れる。殴られた箇所は少し凍っているように見える。

何だあれ……？ きあいパンチは？ きあいパンチなんだよね？ 何で凍ってるの

?

ネイティオは、大丈夫そうだ。ダメージは受けたみたいだけど、まだ戦えるらしい。……落ち着け。まだ一体やられたただけだ。

「ネイティオ、怪しい光!」

ナイス、ラン。カイリキーは兎も角、フーディンは自由にさせておくと危ないっぽい。なんか、よくわからないけど。

「……」

チャレンジャーも渋い顔してる。ざまあみろ。

「カイリキー、ちゃんと集中しろ」

注意を受けてカイリキーは頭を掻いている。

そっちなの? フーディン混乱させられたけどそっちはいいの?

「まあフーディンはうまくやってくれたし、次に行こう」

え、次!? 今度は何をするつもりなんだ?

「ちよつとフウ、次のポケモンは?」

「あ、ごめん」

慌ててルナトーンを繰り出す。

いけないな。ペースが乱れる。

「ルナトーン、瞑想だ！」

ここはルナトーンの能力を高めて様子見だ。下手に攻めたら危ない気がする。

「ネイティオ、日本晴れよ！」

ランはソルロックに繋ぐ布石か。ネイティオはダメージを受けてるし、妥当だね。

「フリーデイン、カイリキーに……ん？」

フリーデインが指を振って指示を中断させた。で、カイリキーに視線をやつて、来いよとでも言うように自分を指差す。カイリキーはそれを見て、トレーナーの方を見る。指しを待ってるのかな？

「じゃあ、カイリキー、フリーデインにきあいパンチ」

頷いてフリーデインに向かって拳を振りかぶるカイリキー。……は？ いやいやいや、きあいパンチってそういう技じゃないでしょ？

カイリキーは、しっかりと腰をひねりフリーデインの背中を殴る。

フリーデインは、飛んだ。弾丸のような勢いで。フリーデインは素早いポケモンだけど、普通はここまでの速度は出ない。

進行方向にいるのはネイティオ。

「ネイティオ！ よけ……」

ランが指示をする間もなくネイティオは、フーデインの突撃を受け、戦闘不能になった。

あ、でもフーデインもダウンしてる。……ならまあ、いいのか？

「……まあ、そうなるわな。カイリキー、よくやった。フーデインもおつかれ」

「ラン……」

「うん、なんか、ヤバいね」

「……うーん、ここは、ケッキングかな。頼むぞ！」

チャレンジャーの三体目はケッキング。ヤバい。なんか、言葉が出てこないけど、カイリキーとかフーデインとかとは比べ物にならない何かを感じる。

「……どうかしたかな？」

「……いや、別に。そのケッキング、よく、育てられてるみたいだね」

「あー、まあ、こっちに来てから最初にゲットしたポケモンだからね。俺の手持ちの中でもトップクラスさ」

やっぱりだ。通りでヤバそうな感じがするわけだ。隣のランと頷きあう。

「ルナトーン、催眠術！」

「ソルロック、ソーラービーム！」

「先手必勝。まずはそこまで脅威じゃないカイリキーからだ。特殊な念波と耀く光線がカイリキーを襲う。」

「こらえろカイリキー！」

「……どうやら耐えられてしまったみたいだ。」

「咄嗟にこらえるを指示するなんて、やるね」

「ここまでの流れを考えると凄く真つ当な指示だ。ちゃんとできるんじゃないやん。ならちゃんとやれよ。」

「このこらえるはソーラービームや催眠術をどうにかするためのものじゃあないよ」

「え、それは一体どういう……まさか、さっきの!？」

「きあいパンチつてのは、痛いからね。俺のケツキングのきあいパンチなら尚更さ」

「やっぱりか……! やらせるものか！」

「ルナトーン、光の壁だ！」

「ケツキング、きあいパンチ！」

「咄嗟に光の壁を張ったものの、カイリキーは飛んでこなかった。」

「アツ——!!」

代わりに謎の声と、ズシン、と重い何かが落ちたような音がした。

あれは……ベルト？

「決める、カイリキー」

「えっ」

打撃音が二回。それに続いてまた何か落ちる音。これも二回。見ると、ルナトーンとソルロックが目回して地面に落ちていた。

何が起こった？ いや、そんなのわかりきってる。一瞬でルナトーンとソルロックがやられた。相手の指示から考えると、カイリキーに。

どうやって……？ 一つのまに……？ 何をされた……？

いくつも疑問が浮かぶが答えは出てこない。一つはつきりしているのは……こちらにポケモンは残っていないこと。

どうやら僕たちは負けてしまったらしい。

カイリキーの腰のベルト。ゴーリキーの頃から常に装着しているそれは、カイリキーの力を制限するものだ。ポケモン図鑑で使用されている名称を借りるなら、パワーセーブルト。

ゴリキーの時点で力を制限しなければならぬほどのパワーを秘めている。カイリキーにもなれば尚更だ。

しかし、漢女おとめ系きあいパンチャー、カイリキーにとってベルトはそれほど邪魔なものではない。考えるのが得意ではない彼だが、本能的に悟っているのだ。

ベルトを外したところで、自分の力をコントロールできないということ。

そもそもベルトがあっても加減はあまりできていない。

既にその拳でフーディン兄貴がダウンした所だ。恥じるより他無いが汚名返上の機会を訪れた。

配役は変わったが、当初の予定通りきあいパンチを自分が受けるのだ。

きあいパンチをするのはケッキング姉貴。優しくお願いしますネ☆と言っても鼻を鳴らすだけだ。ああ、手加減は期待出来そうにない。ケッキング姉貴は真面目故に徹底的にやるだろう。自分の筋肉を信じるより他無い。

考えている内に相手のポケモンの攻撃が飛んできていた。

「こらえろカイリキー！」

少し早い但我慢開始である。ダメージと共に急激に眠気が襲って来たがこの態勢だけは維持しなくては。

さもなければポケモン大砲と化したフリーデン兄貴の二の舞である。とうとう眠気に耐えかね、意識が遠くなる。

微睡みも束の間、背中を打撃と衝撃が襲った。ケツキング姉貴と相対した敵はこんなダメージを食らっているのか。同情を禁じ得ない。……痛い痛い痛い痛い。

「アツ——！！」

思わず声が漏れる。しかし、感じる。伝わったのは痛みだけではない。ケツキング姉貴のきあい、意志が、伝わってくる。そして思い出す。痛みに悶えている場合ではない。

勝つのだ。

きあいが高まる。溢れる。気が付くと、腰の重みが消えていた。

ベルトが、外れたのだ。

不安は、まだある。しかし、コントロールできそうな気もしている。自分の100%……いや、ケツキング姉貴の分も含めたきあい。そう、今の自分はケツキング姉貴のパワーも受け取っている。

これでやれなきや男じやない。間違えた。漢女おとめじやない。

前に踏み出す。一蹴りでソルロックの目の前へ。ソルロックは反応していない。いや、できていない。周りが遅く……違う。自分が早くなっている。

殴る。そして横へ。今度はルナトーンを殴る。勝った。

元の位置に戻る。少しずつ力が、時間の流れがもとに戻っていくのを感じる。ベルトを元通りに巻く。これで、いつも通り。魔法は解けた。シンデレラはもとの筋肉だるまに戻るのだ。

そしてカイリキーの全身は筋肉痛に包まれた。

格闘タイプのパokemonに、技に、負けた。

こんなんじやエスパータイプのジムリーダー失格だ……。相手のペースに飲まれて何時ものバトルもできなかつた。困惑してる内に負けていた。

畜生……。

ジムリーダーは、確かに負けることもある。でも、やっぱりプライドみたいなものはあるんだよなあ。

「ありがとう」

チャレンジャー、レンはランからバッジを受け取っている。

「お疲れ様、次で8つ目。頑張つてね」

何でランはそういうこと言えるんだよ。悔しくないのかよ。

ランと一言二言話してから、レンは今度は僕に話し掛けてきた。

「悔しそうだね」

「当たり前だろ」

「タイプの相性だけじゃ勝負は決まらないのさ。それに、トレーナーは冷静じゃないと」
わかってる。そんなことはわかってるんだ。だからこそ悔しいんだよ。

「……俺の友人にハルカって人が居る。俺はまあ、見てもらった通りこんなバトルをし
つつ、日々修行してるわけだが……俺はその人に一度も勝つたことがない」

ゴクリと唾を飲み込む。この訳わからない奴でも負けることがあるのか。

「勝てない悔しきはよくわかるよ」

「彼女はきつと、もうすぐこのジムにやってくるだろう……頑張つてくれ」

そう言つてレンはジムを出ていった。

勝てるのか？ レンでも勝てないようなトレーナーに。僕の力は通用するのか……
？

「大丈夫だよ」

「ラン……」

「私達は、双子。そうでしょ？ フウは独りじゃないよ」

そうだ。僕にはランがいる。それに、ポケモン達だって……。大丈夫だ。やれる。僕達のコンビネーションは弱くなんかない。

「……勝とう」

「うん」

ハルカって奴がどんなに強くても、もう驚かない。僕達がもつと強くなればいいんだ。

まずはリフレクター覚えさせよう。

△月×日 曇り

トクサネシティの爆裂おじさんとの対話（物理）を通して、きあいパンチの新たな可能性が見えた。

ジムではその実践を行った。エスパークタイプのジム相手に格闘タイプの技で挑むなんて馬鹿げてる？ 舐めプに見える？ そんなことはない。不利を覆すからこそヒーロー。逆境をもつともしないからこそ最強。どんな相手も倒せるからこそ、必殺技。こちらら大真面目なのだ。

空手大王がナツメに勝てなかったのはきあいが必要なかったから。単純な話だ。

流石は知能指数5000と言うべきか、フリーデインはきあいパンチの扱いが上手かった。カイリキーはまあ仕方ない。筋肉だからね。

毎回標的にされるフリーデインが悪いのか、一体は混乱持ちのポケモンを連れてるジムリーダーが悪いのか。またフリーデインは混乱していた。もともとの計画ではフリーデインがカイリキーにきあいパンチする予定だったんだけどな。フリーデインがカイリキーのきあいパンチを耐えられるわけじゃないじゃないですか……。でも結果的に2体倒してる訳だから相変わらずフリーデインは撃墜王だな。

フリーデインはただ飛んでいっただけのようにも見えたけど、ケツキング↓カイリキーのきあいパンチブーストは上手くいった。パワーセーブベルトが外れるなんて一体誰が想像しただろう。俺も予想外でした。気がついたらバトルが終わっていた。H O いったのまに!! って感じだった。

きあいパンチは補助技にも使えるんだね。きあいパンチって素晴らしい。

あとなんか、フウ君が、放心した後泣き出した。なんか訳わからないまま負けたのがシヨックだったんだと。でもココドラとかコイキングにやられるよりはマシなんじゃないかな。

慰めついでにハルカちゃんの紹介をしておいた。

「俺にはハルカという友人がいる」

「たぶん、もうすぐ来るだろうが、俺はその人に一度も勝ったことがない（そもそも戦ったことがない）」

「（レートとかやってたし）勝てなくて悔しいのはよくわかる」

「（俺よりは常識的な筈だから）……頑張ってくれ」

とまあこんな感じ。

……嘘は言っていない。

「失礼します」

ジムに入ると、何か妙な空気を感じた。警戒というか何と言うか……。

「もしかして、君がハルカ……?」

「え、まあ、そうですけど」

何なの……? 何で名前を知られて……レン君か。

「そっか……よし、やろうか!!」

いきなりジムリーダーさんの空気が変わる。

さっきまでのざわ……ざわ……って感じは何処かへ吹き飛んだ。

「僕たちは、双子」

「私たちは、双子」

え、なに。

「二人で一心同体、そう思っていた」

「でも、それだけじゃだめなの」

「今までは、二人で漸く一人前だった」

「これからは、それぞれが一人前」

「一足す一は二なんかじゃない」

「私たちは、二では終わらない」

「超えられるものなら」

「超えて見せない！」

「ア、アハハ……」

ギラギラと好戦的な輝きを放つ二対の瞳に、私は困惑を隠せない。でもわかる。原因は一つだ。

レン君……何したのよ。

14

後に少年はこう語った。

「いや、悪気は無かったんですよ」

「おや、ダイゴさんじゃないですか」

「ん？ 君は……確かレン君だったね」

「はい、お久し振りです。騒がしいみたいですけど何かあったんですか？」

「マグマ団からトクサネ宇宙センターに予告状が届いたんだ」

デボンコーポレーションの御曹司であり、ホウエン地方ポケモンリーグチャンピオン、しかもイケメン。もはや設定盛りすぎと言ってもいい超絶勝ち組の石マニア、ツワブキ・ダイゴ。

彼の不運はここから始まった。

本来の流れならば、ここに来るのはハルカの筈だった。しかし残念。彼女は現在ジム

に挑んでいる。

「予告状ですか……それはまた……」

「ああ、これだよ」

ダイゴはレンに予告状を渡した。ざつと目を通すレン。顔を上げた彼の表情は困惑だった。

「……これ、どうなんですかね。俺なら予告なんてしませんけど」

レンの言い分は尤もである。ロケットの燃料を盗むのであれば黙って突撃して強奪する方が合理的だ。

「確かにそうだね……」

繰り返すがダイゴはイケメン御曹司チャンピオンである。そう、つまり、当然頭もいい。マグマ団の目的、そして今回の予告状、様々な情報が頭の中を駆け巡っていた。

「もしかして、この予告状は囷なのか……?」

ダイゴの灰色の脳細胞による名推理。当然、レンも食い付く。

「……そうなんですか!?! でも、そうなると本当の目的って何なんでしょう?」

さらに回転するダイゴの脳味噌。

大地を増やすことを目的とするマグマ団。彼らが狙うべきものは……? ロケット

の燃料が囷だとするなら……このトクサネには特に狙うようなものはない筈。

「ロケットの燃料どころかロケット丸ごと持ってつたりして」

「いや、流星にそこまでは……」

「ない、と言いつけてダイゴは再び考える。ロケットを盗んだ場合、彼らは何ができる……？」

「まさか、隕石を……？」

「ここで石マニアダイゴの悪い癖が出る。石がありそうな所に意識を向けると、つい思考が石に移ってしまうのだ。」

「隕石なんてどうするんですか？」

「いや、隕石を馬鹿にしちゃいけないよ。隕石にはまだまだ未知の部分が残っているんだ。マグマ団はそこに目をつけたのかもしれない」

「そう、隕石とは素晴らしいものだ。あの独特の形状、表面の凹凸、曲線、一つ一つの隕石によって異なる色合い、そして何より隕石からは不思議なパワーを感じる。石マニアとして譲るわけには……いやいや、マグマ団に悪用させるわけにはいかない。」

「そうなんですか……」

「しかし、こうして此方が疑いを持ち、色んな可能性を考えて各方面に人員を割いた結果手薄になったところを狙いロケットの燃料を盗むつもり、ということも考えられる。」

「……駄目だ、判断材料が少なすぎる」

やはり予告状を信じるしかないのだろうか？

「そう言えばダイゴさんって石好きですよね」

「ん？ ああ、そうだよ」

「宇宙センターの前になんか白い石あるじゃないですか。あれって何なんですか？」

「ああ、あの石か。あれが置かれたのは数年前、まだロケットの打ち上げが始まっていなかった頃だよ。当時の宇宙センターの職員の人達がロケット打ち上げの成功を願って置いたそうだ。石の出所はよくわかってないけど、もしかしたらこの石も隕石なのかもしれないね」

「へえ。もし宇宙からの石ならこの石もポケモンと関係あったりするかもしれないですね」

「……と言うと？」

「パイとかつて確か流れ星がどうのこうのって話じゃありませんでした？」

「ああ、成る程。確かに流れ星に乗ってやってくるとか言われていたりするね。この石とも関係あるポケモンがいるかもしれない、か。もし居るなら見てみたい」「マグマ団だ！ マグマ団が来たぞ!!」何っ!？」

誤算だった。まさか襲撃に備える間もなくやって来るなんて。確かに襲撃のタイミ

ングは予告されていなかったが……。なんて失態だ。

とは言え、自分の実力を以てすれば事態の沈静化は難しいことではない。マグマ団は数は多くとも一人一人の実力は大したものではないのだ。

「レン君、君も協力してくれないか？」

「はい！ 任せてください！」

彼もそれなりに実力はあるようだし、余計楽になるだろう。

中に入って物陰から様子を伺う。職員達は一カ所にまとめられているようだ。

「やはり、かなりの人数だな……。レ「ダイゴさん！ 息を止めておいてください！」っ!?」

唐突に声が掛けられ、反射的に口をハンカチで覆う。咄嗟にハンカチを出せたのは、御曹司たるものハンカチは常に持ち歩かなければならないという父の教育の賜物だ。

後ろを見ると、レンが2体のポケモン、オオスバメとキノガッサを出していた。一体何を……？

「キノガッサ、全力でキノコの胞子！ オオスバメは胞子を風で拡散しろ！」

キノガッサの頭のかさから爆発するように胞子が放たれる。風で広げる必要など無さそうな勢いだ。しかし、オオスバメは忠実に指示に従う。

センター内部はしつかり空調が効いているが、ポケモンの起こす風に勝てるほどでは

ない。胞子の乗った風がセンターの一階で暴れまわった。

「これで、一階は制圧完了ですかね」

まさに死屍累々といった有り様だった。勿論死んでいるわけではなく眠ってしまっただけだが。

「やりすぎじゃないかい？」

「そんなことないですよ。眠らせたただけなんですから」

……まあいい。気にせず行こう。事態を収めることが先決だ。

一方その頃、トクサネシティジムに挑んでいたハルカとハルカのポケモン達は苦戦を強いられていた。

理由はよくわからない（恐らくレンが関与しているのだろう）が、ジムリーダーの意欲が凄い。そして、そもそもタイプ相性が悪い。プラスルもキノガッサもバシャーモも不利だ。ペリッパと、浅瀬の洞窟で捕まえたタマザラシは、比較的有利だが……。

「ネイティオ、日本晴れ！」

これである。弱点を突ける筈だった水タイプの技が半減されてしまう。先程ネンドールの地震によってプラスルが落とされた。こちらの場にはペリッパ。残るポケモンはバシャーモ、キノガッサ、タマザラシ。

タマザラシが捕まえたばかりであることを考えれば、実質2体で状況を打開しなければならぬ。しかも2体とも格闘タイプである。キノガツサは草タイプの技もあるがせいぜいメガドレイン位だ。焼け石に水でしかない。

負けたくない。

どうすべきかごちやごちやと考えながらも、そこだけははつきりしていた。

こういう時つてよく「こんな時あの人だったら……」みたいなこと考えるよね……。

アニメなどでよくある劣勢に立たされたキャラクターの思考。勝つか負けるかは別問題として、流れを変えることはできる。

しかしハルカはシヨックだった。自分の思考に、である。こんな時……と考えて真っ先に思い付いたのは、某きあいパンチ野郎だったからだ。

レン君は一旦置いてこう。あれは駄目よ。テレビなら良い子は真似しないでねってテロップが出るやつ。私は良い子だから危ないことは考えないわ。

しかし、こんな時……の思考の宛が少ないのも事実。レンを無しにするならユウキ、

となるが彼は大して強くない。各ジムリーダーは強かったがそんなに交流があったわけではない。

ここでハルカに天恵が下りる。そう、自身の父親である。しつかり実力者だし、ある程度想像できる。テレビでありがちなパターンだ。これなら勝てるかもしれない。

パパなら、こんな時……タイプの的に不利で明らかに勝ち目が薄い時……ん？

しかし、ハルカは思い出した。父は真面目で実直である。劣勢に立たされているということは自分の努力不足であると反省し、降参して暫く修行した末に再度挑む、ということ普通に行かれない。

……打つ手無し、なの？

無いのでは無い。選ぼうとしていないのだ。レンなら、あの少年なら、どうするか。考えようとしていない。それをすれば勝てる、そんな気はしているが……やはりまだ、常識は捨てられないのだ。

「降参するの？」

「だとしたら思っていたより……いや、何でもない」

フウとランから声が掛けられた。

勝ちたい思いと常識的思考がせめぎあう。

そもそもなぜこんな葛藤をしなければならぬ？ 私はもともと普通の常識的な人

間だった筈だ。どうしてこうなった？

答えは簡単、きあいパンチ野郎のせいだ。私が今こんなに悩んでいるのも、やたらジムリーダーが勝ちに来てるのも、みんなきあいパンチ野郎のせいだ。

……もう、いいのではないか。

……そうよ、そもそもこんな状況になったのはみんなレン君のせいなんだから。なら、もう、レン君の発想に頼っても、いいよね？ レン君の行動の結果を片付けるのはレン君的思考。別に間違ってるじゃないよね？

そうと決まれば話は早い。こんな時、レンならばどうするか。

”そもそもきあいパンチ使ったらこんな状況にならないんだよね”

言いそうだ。でも役に立たない。

”逆に考えるんだ。負けちゃってもいいさって考えるんだ”

却下。

”きあいパンチつて指示したら案外行けるんじゃない?”

却下……もしかしたら、勝てるかもしれないが……しかし、譲れない。

”いつそバシャーモとキノガッサに入れ換えちやおう”

……これか？ きあいパンチ以外なら、レンらしいと言えばらしい気はする。

正直不安だけど……やるしかない……!

「降参なんてしないわ! 戻つて、ペリッパ! お願い! バシャーモ! キノガッサ!」

二階に上がると、再びレン君はキノコの胞子を使った。速やかな事態の沈静化を図るならば別に間違つた行動ではないのだけど、釈然としないのは何故だろう。

「これで解決ですかね?’

「……いや、まだみたいだよ」

奥を指差す。そこには二人のマグマ団が立っていた。一人は服装が違う。この男がリーダーだろうか。近づこうとすると、リーダーらしき男が目を見開いた。

「また……またお前か!’

!? 何のことだ?

「どうも、お久しぶりですか?」

「ああもう最悪だ! グラードンはどこかに行つてしまふし、燃料を奪いに来たらお前が来た! 何で来たんだ! 私に何か恨みでもあるのか!」

「どうやら、レン君と何かあつたらしい。一組織のリーダーをここまで取り乱させるなんて、一体何をしたんだらう。いや、今はそれは置いておこう。」

「何故ロケットの燃料を盗もうとしたんです?」

「嫌味か貴様! 誰のせいだと」

「ウヒョヒョ、リーダー、そこからは俺が話しますぜ。一旦落ち着いてください」

「……ふむ、任せる」

「端的に言うぞ。グラードンがどっか行つちまつて俺達は最早目的を達成する手段を失つた。もう仕方ねえから煙突山にロケットの燃料をぶちまけて、ドカンツとな。やつちまおうと考えたわけよ」

「そんなこと、させる筈がないだらう?」

「そうだそうだ!」

「ええいつ! 五月蠅い! こうなつたらまとめて蹴散らしてくれるつ!」

リーダーの男が叫ぶ。……全然落ち着いてないじゃないか。いや、それほどまでにレ

ン君に対して怒っているのか？

「そんなことはできませんよ！　だって今の俺は逆立ちしていない！　そして俺だけじゃなく、ダイゴさんもいる。結局ダイゴさんが一番強くて凄いんだからな！　あなた方じゃあ逆立ちしたって勝てないことを教えてあげますよ！」

……何故レン君も相手を煽るようなことを。……まあいい。僕が一番強くて凄いは事実だ。それに、ようやくそれらしくなってきた。敵の首魁をポケモンバトルで倒す。まさしく王道。これぞ強者の行く道。

相手がモンスターボールに手を掛けるのに合わせて僕もモンスターボールを手に取り、投げた。

僕が一番の相棒、メタ……あつ。

出てきたのはメタング。そうだ、失念していた。今は二体目の育成をしているところだった……。

いや、大丈夫だ。肩書きは伊達じゃない。やってやるとも。

レン君が繰り出したのはフーデイン。きあいパンチという指示には驚いたけれど、一撃で相手のバクーダを沈め、僕のメタングもメタルクローでグラエナを倒した。

このまま何も起きなければ余裕だろう。

メタグロスの頭脳はスーパーコンピューター並の能力がある、というのは有名な話だ。実際、難しい計算をスーパーコンピューターよりも早く解いたとか解かなかったとか……。

何にせよ、メタグロスは非常に頭が良い。

ではメタングはどうか。

図鑑の説明によれば、メタグロスは二体のメタングが合体したものだ。ということ
は、メタングの頭脳はメタグロスの半分、つまりスーパーコンピューターの半分くらい
の頭脳があると考えられそうだ。

しかし、そうではない。現実是非情である。そもそもメタングはどのようにしてでき
あがるか。図鑑の説明によれば、二体のダンバルが合体してメタングに……。勿論、一
体のダンバルを育てれば、メタングに進化するがそれは置いておく。

そう、つまり、メタングの頭脳はダンバル二体分程度でしかないのだ。
ダンバル二体分の頭脳がどの程度かは察していただきたい。

頭脳がダンバル二体分、加えてこのメタングはやんちゃな性格であった。

きあいパンチでバクーダを倒すフリーデインを見て沸き上がる疑問をそのまま投げ掛けてしまう程度にはやんちゃであった。

メタングにはわからなかったのだ。エスパークタイプの癖にサイコパワーを駆使した攻撃をしない理由が。

そしてその理由を押し量れるほど賢くなかった。ダンバル二体分は伊達ではないのだ。

内容を要約すると次のようになる。

”えっ何で格闘タイプの技使ってんすか？ エスパークタイプじゃないんすか？ あ、もしかしてエスパーク技難しくて覚えられなかったんすか？”

これでキレないフリーデインではない。知能指数5000の脳味噌、キレッキレの脳味噌を持つフリーデインは即座にぶちギレた。

が、キレたからといって殴りかかるのは阿呆のすること。思慮深く懐の深い知能指数5000たる自分のすることではない。

フリーデインは待った。その瞬間を。

「よし、きあいパンチだ！」

今がその時。

知能指数5000たるフリーデインはわざわざ対象を指定しなくとも察することができる。これぞ信頼。それ故の先程の指示。しかし、フリーデインはこの指示を逆手に取る。

誰を殴れとは言われていない。

つまり、この糞生意気な鉄塊を殴つても、致し方無いことなのだ。レンには悪いとは思うが、今回だけだ。一回までなら誤射である。フリーデインは自分の判断を正当化した。

いざ決行。しかし、素手では痛からう。たとえ怒りをぶつけるためとは言え、手を痛めるのは些か拙い。かといって、いつものエスパー的きあいパンチでは怒りは伝わるまい。

よつてフリーデインは己が叡智の金属器を使うことにした。

ケーシィからウンゲラーに進化する際に何故か手に持っている金属器。ウンゲラーからフリーデインに進化する際には二本に増えている金属器。その正体は、フリーデイン自身によって生み出されたサイコパワーの集合体である。フリーデイン自身最近気付いたことであるが、この金属器は案外自在に変形できる。

そこで、フリーデインは二本をまとめて巨大な一本の金属器にした。そして、きあいを込めて、奴の脳天へ、ダンバル二体分の脳味噌があるであろう場所へ、叩き付けた。

意識を失ったことで念力が消え、地面に落ちるメタング。

機械は叩けば治る。

いつか聞いた言葉。フリーデインは落下するメタングを見ながらその言葉が嘘であったことに気づき、落胆していた。

メタングが落ちていく。

ダイゴさんを見ると、何とも間の抜けた感じの顔をしていた。イケメンは何をしてもイケメンと言うけど、流石にアホ面まではイケメン足り得ないようだった。

このあと滅茶苦茶謝罪した。

15

△月@日 晴れ

トクサネ宇宙センターに予告状、マグマ団がこんにちは。ダイゴさんと協力して撃退した。メタングとフリーデンが事故ったことを除けば問題は無かった。

フリーデンは(頭) 大丈夫かな？

まあそれはそれ。

今後のことを考えよう。

ゲームの展開でいけば、この後はダイゴさんからダイビング貰って海底洞窟へGO。めでたくカイオーガ復活でグラードンとカイオーガの同窓会がルネシティで開催。ドンチャン騒ぎでホウエン大ピンチと。

まあいいんだよ。展開はわかっている。多分ハルカちゃんがどうにかしてくれるさ。流れに任せてれば大丈夫でしょう。

でも流れも糞もないことが一つありましてね。

ダイビング貰うのはいいんですよ。ハルカちゃんがダイビング使えそうなポケモン持ってなさそうってところは取り敢えず置いておくとしても、置いとけない問題がね、あ

るんですね。

ダイビング

ポケモンはどうともなる。

じゃあトレーナーはどうすんの？ とね。

人間は水中じゃ呼吸できない。

なんかあの、ポケモンレンジャーのジャ……ジャツ……ジャツク？ ……山寺さんが海の神殿だかに乗り込む時に口にくわえてたあれが手に入れば話は別だけでも。そんな伝はありません。ダイビング用の装備が必要だ。

ちなみに俺だけなら話は簡単。

適当に海上を移動しながらきあいパンチしてればそのうち入り口とかも見付かるでしょう。でもねえ、それやるとハルカちゃんやんが五月蠅そうだし。ダイゴさんに道具とかおねだりするのもなんか、ねえ？ かと行って今からミナモに戻って自腹で買うのもあれでしょう？

ということでは俺はマツブサ氏と交渉（）して御協力頂くことにした。

考えてみて欲しい。あの人達煙突山掘ったりとかしてグラードン見付けた訳でしょ？ 海に潜るくらい余裕でできそうじゃない？ 実際何とかしてくれるらしいし。

これだけ真つ当に手配すれば、ハルカちゃんも文句は無いだらう。

そしてダイゴさんはルネシティに行った。

「……………ふー」

ジムを出て、大きく伸びをする。空を見上げれば、雲一つ無い青空。日は傾いていない。それはそうだ。普通に朝からジムに挑んだのだから。

しかし、ハルカの体感的には、既に夕方になっていてもおかしくない気がしていた。それだけ熱い戦い、濃密な時間だったのだろう。

勝負を決めたのはバシャーモだった。

ハルカの目では捉えきれなかったが、にどげりだったと推測している。あれをにどげりと呼んで良いなら、という話だが。レン的に考えれば何ということはない。一瞬にして二度の蹴りを放ったとか、そんなオチだろう。何故あんな威力になったのかとかそんなことは知らないわからない知りたくもない。ハルカからすれば、私に聞くな”である。

自分のパートナーのバシャーモが理解不能な次元に足を踏み入れつつあることを感じる。いたたまれなくて空を仰いだ。

”私の悩みってちっぽけだな”とはならない。パートナーの異常はトレーナーとして死活問題だ。しかし、彼女はそれを解決するには自身ではあまりに無力であることを

悟っていた。

”まあ、取り敢えず勝った。今はそれで十分。私はまだ常識の側にいる。願わくば、バシャーモもこちら側に戻ってきますように”

今のハルカにできるのはこの程度である。

「あ、来た来た。ハルカちゃん」

ハルカが真つ昼間から黄昏ていると、前から元凶の声がした。呑気な声音だ。それも当然か。彼にとつてあの思考は当たり前のこと。それをトレースしてみた自分がどれだけ葛藤していても知る由は無いだろう。

「ジム戦はどうだった？」

「うん、まあ、勝ったよ……」

「おお、それはおめでどう」

「聞いたって反応薄くない？」

「ハルカちゃんが負けるとは思ってたからね」

「……」

別に悪いことではないのだ。非常識サイドに居るとは言え、レンは悪い人間ではない。嫌味を言うようなタイプでもない。純粹にそう思っただと判断でき

しかし、である。そこまで実力を買われるというのはどうなのだろうか。勿論、実力を買われること自体は悪い気はしない。寧ろ嬉しいのだが、問題は買っている人物だ。父親をはじめとする諸実力者からなら良い。でも、現実いきあいパンチ野郎である。

わからない。ハルカには理解できなかった。

いきあいパンチ野郎はいきあいパンチばかり使う（ポケモンに使わせる）トレーナーだ。気が狂っている、は言い過ぎかもしれないが、その思考の根幹はいきあいパンチに侵食されているであろうことは想像に難くない。そんないきあいパンチ野郎が、いきあいパンチを使わない自分（のポケモン達）の実力を買っているというのが、ハルカには不思議でない。気持ち悪い。例えてみるならそう、テストで○が一つもついていないのに、0点ではなかった時のような。

「さて、じゃあ、海底洞窟へ行こうか」

海底洞窟。そもそもトクサネシティには海底洞窟へ行くための手掛かりを求めて来た。ハルカは現状、浅瀬の洞窟へ行ってタマザラシを捕まえ、ジム戦で苦戦を強いられて疲れたただけだ。

「ごめん、私の方では特に手段は見つかっていないの」

「潜ることを考えたらさ、ミナモデパートにダイビング用品売ってるんじゃないかって思ったんだけど、どう思う？」

「あ……確かにそうかも。でも戻って買ってくる時間は……」

ない。何ならジムに挑んでいる時間すら勿体なかった位だ。こうしている間にもア
クア団は海底洞窟で何かしらやっているに違いない。

”……何でジム挑んだんだろ”

疲労のあまりポケモンリーグ挑戦という目標も吹っ飛んでいるようだ。

「でもまあ、素潜りでも……」

「私は無理」

できるなら自分だけやれば？ と、本来であればこう返したい所だが、相手はきあい
パンチ野郎。実際できそうである。そんな人間に言っても意味はない。

「……なら、どうする？ こうしてる間にもアクア団は……」

「……」

どうしたものか。ハルカ自身の見立てでは、行った所で止められない。これまでがそ
うだったのだから今回もそうなりかねない。だとしても行ってみなければならぬ、の
だろうか。

流石のきあいパンチ野郎でもこればかりはどうにも出来なさそうである。ならば誰
かに頼るか？ 宛があるならもう頼っている。

「まあ、冗談はこれくらいにして、俺の方で宛があるから今日はのんびりしてなよ」

「え、何言ってるの?」

全くもって、わからない。

いつものことと言えばそうなのだが。

「じゃあまた明日」

困惑したままのハルカを放置して、レンは何処かへ行ってしまった。訳がわからなすぎてむしゃくしゃしたハルカはその日延々と浅瀬の貝殻を集めていた。塩は集めていない。

「さて、行こうか」

翌日、レンについていくと、見覚えのある火山のマークの団が船着き場に屯して……いや、集まっていた。一応ハルカは寝起きである。そうそう遅れは取らないだろうが、バトルは勘弁願いたい所だ。

「ちよつと……レン君?」

「何?」

「あれは……」

「ん? 初対面だっけ? マグマ団の人達だよ」

「いや、それは見ればわかるんだけど」

何故彼らが此処に居るのか、という話である。

「ふむ、揃ったようだな？」

「お待たせしてすみません」

「構わないとも。君らが来てくれるなら心強い」

話が読めない。正確には、現状は察したけど何故こうなったのかわからない。言うなれば、どうしてこうなった？ である。

「では行くでしょうか、海底洞窟へ」

レンは「これなら文句ないでしょ？」と言わんばかりにドヤ顔をしていた。成る程、きあいパンチでどうのこうのとかが、生身で潜ろうとかそんなことを抜かさない辺り真つ当と言えるのかもしれない。しかしそういう問題ではない。

海底洞窟と言うだけあって、結構な深海にあるようだ。潜水艦という選択は至極真つ当だった。生身で行けるのはポケモンかきあいパンチ野郎くらいなものだろう。

まだ海底洞窟へは時間がかかりそうである。どうにも我慢できなかったハルカは、レンではなくマツブサにどうしてこうなったのか聞いてみた。連れてつてくれるのは助かるが、それでもわからないものはわからないのだ。

「……もう、20年近く前になるな。私とアオギリは元は友人、いや、親友とも言える間

柄だった」

何の話だろうか。

「あの頃は、そう、人類のために役に立ちたいと考え、お互い切磋琢磨していた。私は地質学、アオギリは海洋学で分野こそ違ったが同じ志を持っていたんだ」

意外、ハルカの感想はその一言に尽きた。

ところでハルカとしてはここ最近のことについて聞いたつもりだった。何故昔話が始まるのか。

「あれは学生時代最後の夏休みのことだったな……。アオギリの強い提案で私達は海へ行っただ。所謂、海水浴というやつだ。そのときに、私は……溺れかけ、水着を無くし、メノクラゲに刺され、サメハダーに追い掛けられ、足がつり、まあ色々散々な目にあっただのだ。それから私は海が嫌いになった」

「……」

「そして、最後の春休み。夏休みのことがあつて海なんて糞食らえだと思っていた私は山を提案したんだ。夏休みに海に行ったこともあつて山に行くことになったのは良かったんだが……今度はアオギリが、遭難しかけたり、崖から落ちかけたり、野生のポケモンに襲われかたり……散々な目にあつてな。それで喧嘩して、対立して、お互いにエスカレートしていった結果、今に至る」

「……………あー、そんなことがあったんですね」

結果、聞いたかったことは何もわからなかった。

ひんやりとした空気が漂う。感じる臭いは潮と土。まさに海底洞窟といった雰囲気だ。

海底洞窟という名前から、中も随分水浸しだろうと考えていた。が、案外そうでもなくて安心している。

「急ごう。アクア団を、アオギリを止めなければ……！」

道中はアクア団が設置したと思われる照明器具のお陰で明るかった。ところでこの照明器具、ボディが青く塗られ、アクア団のマークがついている。

マグマ団もそうだが、いくら団の備品だからと言って何にでも団のマーク+団のカラーをつけるのはどうなのか。しかしハルカは空気が読める。思いはしても口には出さなかった。

「アクア団だからって何でもかんでも青くしてマーク着けてるってどうなんですかね」
そう、ハルカは。

ハルカ達が来るのを予測してか、各所にアクア団のしたっぱが配置されていた。が、

マツブサが連れてきたマグマ団の構成員(したっぱ)がそれらを押しさえた。正確には、次から次に「ここは俺(私)に任せて先に行け!」が発生しただけである。

とはいえハルカやレンだけで来ていれば一々バトルするはめになり時間がかかっていたかもしれないので感謝している。ハルカは。レンが何を考えているかは不明である。

広い空洞に出た。ハルカとしては大分深くまで来た気がする。レンはぼーっとしている。

「そろそろですね」

ぼーっとしていた筈のレンがおもむろに口を開いた。表情が普段のそれに戻っている。

「……そのようだ」

レンの言葉にマツブサが答える。神妙な面持ちだ。

” 何でこの人たちはそんなことわかるの? ”

ハルカにはわからなかった。いや、多少、空気が重たいだろうか。

「トレーナーだからさ」

「いや、私もトレーナーだし」

反射的に応えたハルカだったが、違和感を感じた。何かおかしかった気がする。
「気のせいだよ」

「いやおかしいでしょ!？」

「しっ、静かに」

レンがハルカを手で制する。空気が読めるハルカはすぐに黙ったが、これでは自分が悪いようではないか。非常に遺憾である。

が、ハルカはここで考え直す。そう、レンに怒っても仕方ないのだ。どうせ通じない。岩影に隠れて奥の様子を窺う。……居た。アクア団のリーダー、アオギリだ。

「どうやら間に合ったらしいな。よし、行くとしよう」

マツブサを先頭にハルカとレンが続く。

近づいていくと、足音で気づいたのか、アオギリがこちらを振り向いた。

「来たかハルカ……と、マツブサまでいるのか」

「間に合ったようで何よりだよ、アオギリ」

レンが当たり前のようにスルーされていることに気づいたハルカだったが、前述したように彼女は空気が読める。故にそのことには触れない。

「間に合っただと? とんでもない。待ってたんだ」

「待っていた? 我々をか」

「その通りさ。まあ、マツブサまで来るとは思っていなかったが……散々私の計画を邪魔してくれたんだ、計画の最終段階を、どうあがいても私の計画は止められないということ、思い知らせてやろうと思つてね」

「やめろ！ 取り返しのつかないことになるぞ！」

「ふふふ、知つているぞマツブサ。お前、グラードンを目覚めさせたはいいが、制御できずに何処かへ逃げられたそうじゃないか。私はお前とは違ふのだよ！」

「私にできないことがお前にできる筈なからうがド阿呆！ やめろ！」

「いいや！ やるね！」

そう言つて、アオギリはドヤ顔で紅色の玉を掲げた。

「この紅色の玉で、私は貴様を超えてやる！ カイオーガを従え、海を広げ、よりよい世界を作るのだ！ さあ、輝け、紅色の玉よ！ カイオーガを目覚めさせるのだ！」

……。

何も起こらない。勝ち誇つた表情のアオギリだったが、表情筋が震えてきている。

「どういうことだ!? なぜ何も起こらない!？」

慌てた様子で紅色の玉を見るアオギリ。見たからつて何も……と思つても口には出さない。ハルカは空気が読める。ところでさつきからレンが口を開いていない。何事だろうか。

「……!!」 ただの色のついたガラス玉じゃないか!! さっきまで本物だっただろう!!」
紅色の玉を見たり叩いたり噛んでみたり嘗めてみたり、色々と試したアオギリ。そして気付く、玉が偽物であるということ。彼は思わず声を上げた。
「すり替えておいたのさ!!」

ハルカの後ろからそれに答えるように声がした。声がした方を見る。さっきまで影が薄かったレンが、これまたドヤ顔で、紅色の玉を持って立っていた。

「貴様一体何をした!?!」

顔を真っ赤にしてアオギリが怒鳴る。

「トリックですよ」

レンの声に合わせて暗がりからフリーデインが現れた。トリック、そして現れたフリーデイン、……つまり、フリーデインがトリックを使った、と。

タネを理解したハルカは憤慨した。なぜきあいパンチを使わないのか。きあいパンチで何でもできるのではないのかと。だが、口には出さない。彼女は空気が読めるから。

「さて、これでカイオーガは目覚め……えっ」

紅色の玉が勝手に輝きだした。ハルカは驚いた。マツブサも驚いた。アオギリは激おこだ。レンは驚きつつも納得した。そういや勝手に勝手に輝きだすんだっけ、と。

「ゴゴゴゴ……と洞窟が揺れる。何かヤバい気配が近づいてきている気がする。アブソルとか、そんなチャチなもんじゃ断じてない、もつと恐ろしい何かだ。

「！ あそこだ！」

マツブサが指差したのは、アオギリが立っていた目の前の水溜まり。ハルカは何の変哲もない水溜まりだと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。水面が、自然なほど波打っていた。

やがて、水面に巨大な影が近づいてきた。

ハルカの脳内は語彙力を失う。

”もうヤバい。ヤバいって言葉しか出てこないくらいヤバい。さつきから鳥肌が止まらない。どうしよう逃げようそうしよう……ここ海底じゃん”

一方レンはぼんやり考え事をしている。

”グラードンはマグマに沈んでった。とすればカイオーガも沈んでいくのか……？ いやでも沈んでいくならわざわざ浮かんでこなくても……まさか、とうとうあの謎の跳躍が見られるのか……？ 天井は普通に岩なんだが……。”

水面が静まる。

次の瞬間、影が浮き上がる。初めて見るポケモンだったが、一目見てわかった。この

ポケモンがヤバイ雰囲気の元凶だ。話の流れからしてこれがカイオーガだろう。

未だハルカの脳内は語彙力を失ったままだ。

”ヤバイ。もう何て言うかも、ヤバイ。こんなの従えようとしてたとか正気の沙汰じゃない。あのおっさんバカなんじゃないか。”

アオギリはと言えば、計画の要たるカイオーガの登場に感動しつつも、予定外の展開に困惑すると共に、カイオーガから放たれる圧倒的なプレッシャーに恐れおののいていた。

やがてカイオーガは、ハルカ達を威嚇するように睨んだ後、静かに沈んでいった。他の面々が何事も無かったことに安堵する中、レンだけは鳴き声すら上げなかったことに不満を感じていた。

「は、ははは……アクシデントはあったが、計画通りだ！ カイオーガが目覚めた！ これで私の計画が……」

気を取り直したアオギリが強がる。しかし声が震えている。更に途中で電子音が鳴り、セリフが中断された。締まらない。

「私だ。うん？ 激しい雨が降りだした？ ああ、そうだろう。カイオーガが目覚めたのだから。……何？ 想定を超える雨量でヤバイ？ 海も荒れてヤバイ？ 報告は正確にしろ！ ……雨だけでなく日差しも強いだと？ 意味がわからん！ どういう

「ことだ!？」

「……状況を確かめる必要がありそうだな。出るぞ、アオギリ。団員にも撤退を伝えろ。ここも危険だろう。ハルカ君達も、戻る準備をしなさい」

一行が外に出ると。

海は大荒れ、分厚い雲に覆われた空から痛いくらいの大粒の雨が降ってきている。かと思えば雲が切れてかなり強い日差しが差し込んでくる。

ハルカはカイオーガシヨックもあつて何がなんだかよく分かっていない。

何だこれ。

「何だこれは……」

「これが我々の望んだ光景か？　これがより良い世界に繋がると？　認めるんだアオギリ。我々ほとんどでもない過ちを犯してしまったのだ」

「こんな……こんなことが……」

「ハルカちゃん！　レン君！」

マジで絶望にうちひしがれたダンディなおじさん、略してマダおを観察していると、空からイケメンが舞い降りてきた。

「無事でよかった……けど、どうやら止められなかったみたいだね」
「すみません。なんかいきなり目覚めちゃって」

「いや、グランドンは既に目覚めていたんだ。遅かれ早かれ異常気象は起こっていただろうさ。そして何より、本来なら君たちがやる必要は無かったんだ。本当に済まない」
考えてみたら、いや、考えるまでもなくその通りであつた。何故自分達が色々止めるために頑張つてたんだ。子供にやらせることじゃないでしょう。ハルカはそう思った。だが口には出さない。そう、彼女は（ry

「君達も早く安全なところへ行つた方がいい……まあ、異常気象は範囲を広げているらしいから何処に行つてもずっと安全とは言えないけど……」

「ダイゴさんはどうするんです?」

「僕は、この異常気象の中心になっているルネシティに向かうよ。そこの二人も、同行願えますか?」

「ああ、勿論だ。ほら、立てアオギリ」

ダイゴが声を掛けると、マツブサさんがマダおことアオギリを立たせた。まだシヨックから立ち直れていない様子だ。

「じゃあ僕らは行くよ」

「気を付けて下さいね」

「君達もね」

「さて、じゃあ俺達も行くか」

「どこに？」

「わかってるでしょ？」

「……私は行かないからね」

「どうして？」

怖いからだ。あんな感覚は初めてだった。ポケモンと人間は仲良くできる、と思うのは今も変わらないが、あれは駄目だヤバい無理だ。先程の恐怖を思い出し、また語彙力が危機を迎え掛ける。

「あんなの相手に何かできる筈ないでしょ」

「そうかな？」

普段のハルカであれば、ここで空気の変化に気づいていた筈である。しかし、今のハルカは結構一杯一杯であった。故に気付かない。

独壇場が始まる。

「確かに、カイオーガは、生で見たあいつは凄かった。明らかにヤバそうだったよね。それは俺にもわかるよ」

ここで、ハルカは気づいた。だがもう遅い。

「でも、あいつもポケモンなんだ。俺の連れてるフリーデンやケツキング達、ハルカちゃんのパシヤーモ達と同じね」

「うん、でも」

「俺達はバトルをする。体をぶつけ、魂をぶつけ、競い合う。ポケモンと共にね。カイオーガやグラードンの力は確かに圧倒的かもしれない。でもあいつらには無いものが俺達にはあるんだ」

「きあいパンチとか言うんじゃない……」

「……? なに言ってるの。俺達にあつて、あいつらに無いもの。ありふれた言い方になつてしまうけど、それは仲間だ」

ハルカは赤面した。先入観に囚われすぎた。

「ポケモンは、トレーナーの指示でより効率的に技を使うことができる。ただ力を振るうだけのあいつらとは違うんだ。それに、なにもこの脅威に挑むのは俺達だけじゃない。ダイゴさんがいる。リーダーの二人がいる。ルネシテイの人達だつて黙って見てるだけの筈がない。ハルカちゃんは一人で戦うわけじゃないんだよ」

確かにそうかもしれない。そうかもしれないが。

「ハルカちゃんとしてはかえつて不満かもしれないけど、付け加えておくよ」

「…………？」

「大丈夫だ。きあいパンチでぶっ飛ばせる」

この期に及んでこれである。何だか笑えてきた。

「よし、笑えるなら余裕だね。じゃあ行こうか」

「え、私行くなんて一言も「さあ、飛ぶんだコイキング！俺達をルネシティまで連れてつてくれ！」は!？」

耳を疑う台詞が聞こえた気がする。いや、間違いなく言った。絶対本気だ。飛べる筈がない。飛べたとして無事では済むまい。逃げないと…………！

「きあいパンチ!!」

時既に遅く、ハルカはレンに担ぎ上げられ、次の瞬間には空へ飛び出していた。

これが、人類史上初のコイキングによる有人飛行の瞬間であった。

16

バタフリーエフェクトという寓話をご存知だろうか。

小さなバタフリーの羽ばたきによつて、後に竜巻が生じるとか生じないとか、要は小さなきつかけで大きな変化が生じるかもしれないという話だ。

さて、この考え方を抜きにしても、バタフリーは竜巻を起こすことが可能である。ではコイキングならどうか。

コイキングの跳躍は何かを起こすだろうか。

たとえ最弱としても、たとえばねるしか能がないとしても、コイキングだってキングである。

キングドラやキングラーやヤドキングやニドキングやケツキングと同じ、キングなのだ。

キングドラのようにハイドロポンプが使えないとしても、ヤドキングのようにエスパーク技が使えないとしても、ニドキングのように多彩な技を使えないとしても、キングラーやケツキングのようなパワーがないとしても、キングなのである。

すなわち、コイキングのはねるは、王の跳躍。なんと高貴な響きだろうか。

序盤の虫でも竜巻を起こせるのだ。虫の羽ばたきでさえ竜巻が起こりうるのだ。ならば王の跳躍でどれほどのが起ころうと不思議ではない。

コイキングがはねることで地震が起こったっておかしくない。何処かの火山が噴火したっておかしくない。地割れが起きるかもしれない。氷山が溶けるかもしれない。火山の置き石が動いてポケモンが目覚めるかもしれない。

あり得ないなんてことはあり得ないのだ。

だから、コイキングがきあいパンチで有人飛行をしたって、何らおかしいことはない。

「な、何てことをしてくれたの!! 死ぬかと思ったじゃない!! 何なの本当に!! 何考えてるのよ!!」

「ああ、反省してるよ。本当に済まない。じゃあ行こうか」

コイキング飛行は思いの外高く飛んだ。あくまでも生身である。シートベルトなどない。恐怖のあまりハルカは意識を失った。

気が付いたら地上にいた。そして先程のやり取りである。

辺りは晴れたり大雨が降ったり、率直に言って滅茶苦茶である。

「……どこなの(こ)!!」

「あれ見て」

「あれつてどれ……っ!!」

レンが指差したものを見て息を飲む。グラードンとカイオーガが激闘を繰り広げていた。どうやら自分たちはルネシティの外縁部にいるらしい。

「……いやあ、壮観だね」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!? どうするの!?!」

「そう言えばハルカちゃんの自転車つてどっち? マツハ?」

「えっ……マツハだけど」

「おお、それは良いね」

「何のこと?」

「……ハルカちゃんなら大丈夫だよ」

「何が!?!」

「カイオーガ! どうした!?! これを見ろ! 紅色の玉だぞ?! 大人しくなるんだ!

おいー!」

アオギリが赤い玉を掲げながら叫ぶ。

「……グラードン……やはり、我々ではコントロールは出来ないか……!」

マツブサもまた、藍色の玉を使ってグラードンをコントロールしようとするが、藍色の玉はピクリとも反応しない。とすれば、当然、グラードンが見向きもする筈もない。

そんな中、マツブサがアオギリに話し掛けた。

「アオギリ」

「ああ、カイオーガ……! どうして言うことを聞いてくれないんだ……!!」

「おいアオギリ!」

「何だ!? 取り込み中だと言うのがわからないか!? 空気が読めないのは相変わらずだなマツブサ!!」

「っ!? ……まあ、いい。今はそれどころじゃないからな。飲み込んでおいてやろう」

「とつとと要件を話せ! 俺は暇じゃないんだよ!」

「……黙って聞いてればこの阿保が!! 何がああ、カイオーガ……だ、ちゃんちゃらおかしい。お前の手に持つてるものは何だ!?!」

「見てわからんか紅色の玉だ!!」

「海底洞窟での件を忘れるほど呆けたか!? お前が持つてるのは赤いガラス玉だ!!」

はつとした顔をするアオギリ。マグマ団の制服よりも顔が赤くなっていく。

ガラスの割れる音がした。

「ああ、君達も来てしまったんだね」

「やっぱり放っておけなくて」

”それはレン君だけでしょ!?”

ハルカは心の中で叫ぶだけに止めた。やはり空気が読める。

「本来であれば僕達が解決しなければならぬ所だが……正直、君達が来てくれて心強
いと感じてしまっている。本当に申し訳ないけれど、僕達に力を貸してくれるかい？」
「勿論、そのつもりでここに来ました」

「ありがとう……!」

もはや帰るに帰れない。その事実を悟ったハルカは心の中でも反論するのを止めた。

「グラードンとカイオーガが何を考えているのか、なぜこのルネシティでぶつかりあつ
ているのか、どうすれば止まるのか……来たばかりだから僕もわからないことばかりで
ね。知っているとすれば……そうだ! 是非君達に会ってもらいたい人がいる。おそ
らく彼が一番この事態に通じている筈だ」

その人物はルネシティの奥にいるらしい。ダイゴの先導で歩いて向かう。

「……あ、そうだ。町の奥に向かってはいるんだけど、その人は別にこの騒ぎに怖じ気づ

いて逃げている訳じゃないんだよ？」

その人物の印象が悪くなったりしないように補足をするダイゴ。勝ち組は気遣いもできるのだ。

「……」

ハルカは答えない。そもそもそんなことを考える余裕はないし、彼女は自分が口を開けば今置かれている状況に対する不平不満が溢れ出すことを知っている。反論は止めても不満なものには不満なのだ。

「そんなこと思ってませんよ。こんなに大暴れしてるんですから、どこにいても時間の問題です」

「それもそうだね」

気遣いなど不要であった。二人して笑っていた。ハルカは今にも口を開きそうになるのを必死に抑えていた。

「こんな時に聞くのもなんだけど」

「はい？」

「グラードンとカイオーガを見て、ポケモンは怖いものだと思ったかい？」

「いえ、凄いなあ、と」

「ふふ、そうだね。凄いものだ。うん、君達には余計な心配だったかもしれないな」

ここで一くりにされてしまったが、ハルカがカイオーガにビビりまくっていたのは記憶に新しい。現在進行形で帰りがついているのだから未だその感情は覆ってはいない。口に出すのを我慢しているだけである。

「さあ着いた。この奥にミクリさんという人がいるんだ。君達なら彼の力になってあげられると思うよ」

案内されたのは洞窟のような場所。形容しがたい雰囲気を感じる。不思議な力が満ちているようだ。

奥に進むと、一人の男性が物思いに耽っているのが見えた。およそ洞窟に居るには似つかわしくない、ステージにでも立って踊っている方が様になる格好をしている。

「……ん？ 君達は……そうか、君達がハルカ……と、レンだね。活躍は聞いているよ」

「はじめまして、レンです」

「ハルカです」

「はじめまして、私はミクリ。ルネのジムリーダーをしていたんだが色々あつて今は師匠のアダンさんにジムはお任せしている。……さて、話をしよう。今この街で暴れている二体のポケモンは超古代ポケモンと呼ばれている奴らなんだけど、どうしてこの街で暴れているのか、わかるかい？」

「元は火口で、しかも海だからじゃないですか？ どっちにとつても割と移動しやすいとか」

「ふむ、それもあるかもね。でもそれが一番ではない。今、あの二体は長い眠りから覚めた訳だけど、あれが完全な状態ではないんだ」

「そうなんですか」

「ああ、大昔、彼らが眠りにつく前にもつと凄まじい力で暴れまわっていたらしい。そして、その力の鍵になるのが二つの玉とこの場所なんだ。ここは目覚めの祠と呼ばれていてね、彼らが真の力を発揮する為には一度ここで力を蓄える必要があるらしい」

もつと凄まじい力、と聞いてハルカの表情が歪む。想像しただけで卒倒しそうだ。もしそうだったら是が非でも逃げようと心に誓った。

一方レンの脳内ではゲンシカイキというワードが浮かんでいた。ゲンシカイキした二体がぶつかり合ったら割と洒落にならないということも。洒落にならないからどうということでもないが。どうせハルカとレックウザが何とかするんだらうと軽く考えている。

「じゃあ今あの二体がぶつかってるのは場所取り合戦ってことですか？」

「はは、成る程ね。確かに、そうとも言えそうだ。……それで、ここからが本題なんだけど、実は超古代ポケモンはあの二体だけじゃなかったらしいんだ。このハウエンのどこ

かに……レックウザ、というポケモンがいる。遠い昔に起こった二体の激突を鎮めたのもこのポケモンだと言われている」

「もう一体ですか……」

「まあ、私もどこにいいのかわからないんだけどね。でも、あの戦いを止めるにはレックウザを見つける以外どうしようもなさそうなんだ……。ダメ元で聞くんだけれど、心当たりとか、ないかな？」

「そのレックウザはどんなポケモンなんですか？」

「グラードンが陸、カイオーガが海、そして、レックウザは空を司っているとされているね」

「なら、レックウザは人の寄り付かないような高い所にいるんじゃないですか？」

「高い所、ねえ……空、高い……塔？ ……そうか！ 空の柱だ！」

「そこにレックウザが？」

「可能性は高い、と思う。……うん、こうしちゃいられないな。私は早速空の柱に向かうよ」

言うが早いか、直ぐに駆け出すミクリ。ハルカとレンが取り残される。

「じゃ、外に出ようか」

「……ねえ、レン君」

「何?」

「もしかして、空の柱に向かおうとか言うの?」

場所がわかったのだ。ルネシティに居てできることなどない以上、レンが向かわないなどと言う筈がない。

「いや、俺は行かないよ」

「え、ならどうするの?」

「……誰か空の柱に向かつてくれないかなー。俺こつちでやることあるからなー。誰か行ってくれる人いないかなー」

チラチラと、ハルカに視線を遣りながらレンが独り言、と言うにはあまりに白々しい台詞を言う。

しかしハルカとしては今すぐ帰りたい。レンの意図を理解した上でスルーを決め込んだ。

「ハルカちゃんとか行ってくれると助かるんだけどなー」

「……」

直球で攻めるレン。しかしハルカは動じない。超古代バケモンに比べれば恐るるに足らず。無視くらいしたって何も恐くはない。

「行ってくれないとなると俺と一緒に超古代ポケモンに喧嘩売ることになるけど大丈夫

「？」

「空の柱ってどこにあるの？」

翻ること電光石火の如し。ハルカの反応は非常に早かった。考えるより先に体（口）が動いていた。

ちなみに、きあいパンチの技術が上がると考えるより先にパンチが撃てる。つまりそういうことだ。

行くとは言ったものの、冷静になつてみるとそれはそれで嫌だ。ハルカは咄嗟に言い訳を考えた。

「あ、でも、移動手段がないなあ。ペリッパージャちよつときついだろうし、タマザラシも難しいだろうなあ」

そう、海は荒れているし空もそこそこ風が吹いていて危ないのだ。ハルカのポケモンではその中を安全に移動するのは難しい。

ハルカは、そう思っていた。

ボールの開く音がした。

「ハルカちゃんの話は聞いてただろ？　じゃあ、何とかしてやらないとな？」

何かに後ろから抱き上げられる。

バシャーモだった。

瞬間、甦る記憶。乾かしても結局雨で濡れたヒマワキシティへの道中。正確には雨に濡れるその前。

ハル力はこのあとどうなるか悟った。せめて、沈みませんように。ただただ一心にそれを願っていた。

バシャーモ、疾走。バシャーモは脚力に定評のあるポケモンだ。走るのが早いのも頷ける。問題は走っている場所。

海上。

一歩踏み外せば、と言うよりずっと踏み外し続けているようなものだが、要は少しでもミスればドボン。波に吞まれてゲームオーバー。およそ炎タイプのポケモンが居るべき場所ではない。

そもそも走るような場所でもない。

しかし、バシャーモに恐れはない。何故ならば、既に海上走行はマスターしていたからだ。海に落ちたあの日から、夜な夜な練習してきた。それが遂に先日実を結んだ。

トクサネジムでの勝利もこれを成し遂げていたからこそである。

そんなバシャーモの陰の努力など露知らず、ハルカはただただドキドキしていた。吊り橋？ お化け屋敷？ 否、そんな生易しいものではない。荒れた海だ。平然としている方がどうかしているというものだろう。

幸いなのは横抱きであったこと。海の上を走っているという非現実的な状況を直視しないで済んでいる。勿論、見えないことによる恐怖もあるし、上を向いていることで雨粒がダイレクトに顔を襲ってくるが。

やがて、視界の端に高い塔が映る。あれが空の柱だろうか。ようやく落ち着ける。そう思ったハルカだったが、目的地がみえてしまったことでかえって辿り着くまでが長く感じてしまい、空の柱に着いた頃には顔から疲れが滲み出ていた。

「……ありがとう、バシャーモ」

恐怖の伴う時間だったとは言え、無事に目的地に連れてきてくれた。感謝の気持ちは忘れない。

同時に、いよいよバシャーモは遠くに行ってしまったと感じたがこちらは口には出さなかった。

幸いこの辺りは天気は安定している。ミクリはもう先へ行っているだろう。先へ進む。

地面が揺れた。二体の戦闘の余波？　だろうか。できればあの場には戻りたくないものだ。そんなことは無理だろうが。

塔の扉の前にミクリが立っていた。

「ん？　ああ、すまないね。あんまり急いでいたものだから置いてきてしまった。今、この塔の扉を開けた所さ」

「なら、早く行きましょう。解決は早いに越したことはないですよね？」

「その通りだね。では……」

二人が塔に入ろうとしたその時、とうとうこの場所にも大雨が降りだした。

「天候の乱れがここまで……。不味いな。ルネが心配だ」

嫌な予感がするハルカ。

「ハルカ、本当にすまないんだが、私は街に戻ろうと思う。この上にレックウザがいる筈だ。ここは君に任せたから、しっかり頼んだよ!!」

的中した。

ハルカの返事を待つことなく、ミクリは飛び去った。

衝撃の事態である。しかしハルカは賢い。ミクリの言うことが理解できない訳ではない。それでもハルカは思った。

”街が心配なものもわかるけど私のことも心配しろよ!!”

ハルカは思わず天を仰いだ。雨雲が広がっている。大粒の雫が顔を打つ。が、それすらも気にならないほどハルカのテンションは下がっていた。

そんなハルカに一筋の光が射す。

唐突に雲が割れ、日光が射し込む。滅茶苦茶な天気のもう半分だ。上を向いていたせいでまともに太陽を見てしまい目が眩んだ。

しかしそれだけではない。出発前にレンに御守りとやらを受け取っていたことを思い出した。「ピンチの時にでも開けてね」と言っていた。

今ハルカは困っている。ピンチと言っている。

迷わず開けた。

金の玉。

中身は金の玉であった。と、一枚紙が入っている。メッセージのようだ。

”ハルカちゃんへ。この紙を見ているということは御守りを開けたんだね。つまり、ハルカちゃんはピンチってことだ。見ればわかると思うけど、金の玉を入れています。シヨップで売ってお金にして、ピンチを打開できる道具を買ってください。満タンの薬とかおすすすめです。

P. S. 拾ったものなので俺の金の玉ではありません。たぶん金の玉おじさん
りの金の玉だと思います”

ハルカは無言で紙を見つめる。

ハルカの脳内では色んなツツコミが渦巻いている。しかし本人不在で突っ込んで
空しいだけだ。でもやはり腹立たしい。ので、紙を破り、金の玉を投げた。

気を取り直してハルカは塔へ向き直る。自分が行くしかないのだ。諦めてハルカは
塔へ足を踏み入れた。

勿体無いので金の玉は拾っておいた。

外に居る時から感じていたが、ヤバイ心配が漂っている。上からだ。間違いなく
る。そんな中にいる野生のポケモンも馬鹿に出来ない強さだろう。

あまり時間を掛けていられない。極力消耗も控えたい。考えた末にハルカは自転車
に乗った。

「こういうものには使い時があるんだぞ」

父の言葉を思い出した。が、無視する。形振り構っていられるならそうしている。大
丈夫、建造物の内部とは言ってもおおよそ人間の住む場所ではないのだ。土足上等、汚し
てなんぼだ。大体、急いでいる今が使い時でないなら何時が使い時なのか。

マツハ自転車走り抜ける。

やがて、上の階への階段が見えた。自転車に乗ったままでは登れないが、降りるのも億劫だ。

「ペリッパー、お願い」

肩をつかんでもらい、自転車に乗ったまま階段をクリア。着地、走行。浮遊、着地、走行。繰り返すこと数回。

ようやく、頂上だ。

瓦礫と埃が散らばっているが、何処と無く荘厳な雰囲気漂っている。

きつと、いや、考えるまでもなく、中央で佇んでいる存在のせいだろう。巨大な緑色の蛇、いや、龍のようなポケモンがとぐろを巻いている。おそらく、このポケモンがレックウザ。眠っているのだろうか。

不思議と、グラードンやカイオーガを見たときに感じた恐怖は感じない。圧倒的な力を感じるが。慣れた、あるいは感覚が麻痺してきたとも考えられる。

伝説を前にして、ハルカは考える。眠っているのなら、起こすべきだろう。しかし、起こしてしまって良いものか。眠りを妨げられたことに怒って暴れだしはしないか。さらにそのままグラードン、カイオーガと合流して三つ巴になってホウエン大惨事なんて

ことに……ならないことを祈る他ないが。

あるいは、アクア団のアジトで見つけたボールを使うべきか……。

意を決してレックウザを起こすべく声を掛けようとする。が、その前にレックウザが目を開けた。

……何から伝えれば良いのだろう。

「……」

言葉が出てこない。だがレックウザはハルカの言葉を待つようにじつと見つめている。

此処に来て、ハルカの目に涙が溜まる。しかしそれは恐怖によるものではない。嬉しかったのだ。最近、周囲が自分の意向を無視して話を進めてくる。有無を言わず流されてしまうのだ。それが続いていたため、レックウザの傾聴する姿勢に心を打たれた。ポケモンにできることをどうして同族ができないのか。特にきあいパンチ野郎。そうかあれは人間ではないのか。

感動もそこそこに、本題に入らねば。

「今、グラードンとカイオーガが暴れているの。このままじゃホウエンが滅茶苦茶になっちゃう。止められるのはきつとあなただけ。お願い、力を貸して……！」

レックウザは静かにハルカを見つめている。もしかして通じていない？ いや、通じ

ているはずだ。

やがてレックウザは何も言わず頷いた。ほっと胸を撫で下ろす。これで自分のすることは終わった。

と、思っていたのだが。

レックウザが身を低くしている。何かを待っているようだ。視線はハルカをとらえている。つまり、これは。

「乗れってこと……？」

レックウザは頷いた。

「……」

選択肢なんて無いけれど、迷う時間くらい許してほしい。まあそんな気はしていた。ここで退場なんてあるわけなかった。でも、せめて、もう少しだけ、平穩を……今尚雨は降っているが……戻る前に、覚悟を決めさせてほしい。

頬を流れる雫は雨粒か、あるいは……。

レックウザの乗り心地はお世辞にも良いものとは言えない。勿論、乗れる人間など片手で足りる、むしろハルカが初かもしれない。貴重な体験ではある。だからなんだとハルカは言うだろうが。

しかし、乗り心地についてはハルカはそれ以下を知っている。およそ乗ることに適さないポケモンに乗った経験は多分人より多い。あれはあれで貴重な体験ではあるが。それに比べれば何と真つ当な乗り心地であろうか。しつかり捕まっていれば何とかなると、というのがどれだけ嬉しいことか。

どれもこれもきあいパンチ野郎のせいだ。

乗り心地はともかく、雲の上を飛んでいるので雨に濡れることはない、という点は素晴らしい。雲が厚くかかっているせいで下が見えないのが不便であるが。しかし、レックウザのことだ。場所くらいハルカの指示が無くともわかるだろう。伝説様々である。

レックウザが下降を始める。どうやら、ルネシティの上に差し掛かったようだ。

雲を抜けようとする直前、猛スピードで何かが横を通り過ぎていった。場所を考えれば飛んでいったと言ってもいい。

青い何かであった。

しかしハルカは振り返らない。いい加減学習している。世の中には目をそらすことのできないことは沢山あるが、目をそらすことで見なくて済むことも沢山あるのだ。

たとえば飛んでいったのが見覚えのあるポケモンであっても、はつきり認識していない以上、頭に浮かんだポケモンではなく、いきのいいギャラドスが勢い余って空を飛ん

でいた、なんてこともありうるのだ。

雲が晴れた。

奇妙に思いつつルネシティに近づく。

様子がおかしい。……いや、おかしいのはきつと……。

紅蓮に燃える体、煌々と輝く瞳。最後に見たときより明らかに危険度の増した超古代ポケモンの片割れが、拳を掲げ佇んでいる。

その背には、見慣れた少年の姿が。

そう、おかしいのは……あの少年きあいパンチ野郎の頭なのだ。

遠くで何かが落ちた音がした気がする。

そして、ハルカは……。

「レックウザ……破壊光線!!」

例えば昔ゲームで見た光景が、今、自分の目の前に広がっていると、貴方なら何を思うだろうか。ゲームの通りだ、素晴らしい！　と思うだろうか。違う、ここはもつとこうだろ！　と思うだろうか。

ゲームで見たまんま。ルネシティの海の部分にグラードンとカイオーガがいるわけだが、グラードンが、その足場が、あまりにも心許ない。対してカイオーガのフィールドはその足場を囲んで、面積的に見ても数倍あるわけだ。なんかもうその足場はどうやって作ったんだと聞きたい。

そんなもの見せられてみる。複雑だ。

何が超古代ポケモンだ。何が大陸ポケモンだ。ドダイトスと被ってるじゃねえか。

何が日照りだ。ほとんどの人は大雨と云うだろう。太陽は時々顔を出すだけだ。

今乗っているその足場は、多分能力で作りに出したものなのだろう。さて、それを大陸と呼んでよいものか。

んなわきやないよね。

……殴らないと。

殴れば何かは変えられる。

だって、きあいパンチだからね。

「ダイゴさん」

「どうしたのかな？」

「これから俺がやること、止めないでいてもらえませんか？」

「……内容次第では、それはできない相談だね」

「ちよつと、ほんのちよつとちよつかい出すだけです。ホントにちよつとだけですから」

「ちよつとだけ、きあいパンチだろう？」

「……まあ、そういう表現もできますね」

ちよつとだけ、とレンは言っているが、その影響はちよつとでは済まないだろうとダイゴは推測している。そしてその推測は外れていない。大誤算とは言っても、常日頃から大誤算を重ねている訳ではないのだ。もしそうならとつくの昔に負け組である。

「……どつちにきあい……いや、ちよつかいを出すつもりだい？」

「グラードンに」

「ふむ……」

二体の超古代ポケモンの戦いとその余波、そして能力のせめぎあいによつて現在の状況、未曾有の大災害が起こっている。どちらか片方が倒れば少なくとも戦いによつて街が危険に晒されるということは無くなる。

そして現状では辛うじて均衡を保っているが、劣勢なのはグラードンだ。此方を攻めればより早く撃破できるというのも理解できる。

加えて彼のきあいパンチは常人には理解できない域にある。可能、と言えば可能か。

このような思考がダイゴの脳内でなされた。レンは一言も言っていない。しかし、イケメン御曹司石マニアであればこの程度、造作もないことだった。

「……わかったよ。グラードンはレン君、君に任せる」

「ありがとうございます！」

ただし、とダイゴは付け加える。

「安全には十分注意するんだよ？ 危険だと思つたらすぐに逃げるんだ。いいね？」

「勿論です」

「それと、カイオーガは僕達に任せてくれ。倒すことはできないだろうが、君がグラードンの相手をしている間、注意を引き付けておくことくらいはできる」

この事態が起こった時にも思ったことだ。子供達に任せては何のために自分達がいるのかわからない。

珍しい石のためならば滝登りも辞さない。そんな男だからこそ、チャンピオンにまで登り詰めることができた。

イケメン御曹司石マニアであり、良い年であるダイゴは自分が傍観者になることを許さない。

「助かります。では、カイオーガをお願いします」

「気を付けるんだよ？」

「目にももの見せてやりますよ」

レンは誰に、とは言っていない。ダイゴは、グラードンに対して、と脳内で補完していたが。

「ハハハ!! 見ろマツブサ! カイオーガが俺を見てるぞ!! そして追いかけて来ている! つまり、俺は今、カイオーガを操っている!」

「……ああ、そうだな」

「ほらほら、こつちだぞカイオーガ! 捕まえてみる! ハハハハハ!」

「……」

現在、アオギリが囷となつてカイオーガの注意を引き付けている。押し付けた訳ではない。アオギリ自身が志願したのだ。

もともと、レンから頼まれた、いや、引き付けることを言い出したのはダイゴ。しかし、ダイゴのポケモンは重量級であり素早くなく、注意を引き付けたらそのままやられてしまう恐れがあつた。ダイゴ、早速の誤算である。

しかしそこにレンとダイゴの話に勝手に耳を傾けていたアオギリが声を掛けた。

アオギリの手持ちに水ポケモンがいることから適役と思われた。

そして注意を引くことに成功し追い掛けられ始めたアオギリの発言が先程のものだ。

アオギリはサメハダーに乗っている。サメハダーは比較的、少なくともカイオーガよりはスピードに優れたポケモンである。もしこれがトドゼルガやラグラージであつたならどうなつていたかは想像に難くない。

ちなみにマツブサはクロバットに掴まり空中でアオギリと並走している。的が多いと攪乱しやすい。という合理的な考えもあるが、アオギリが逃げる様を文字通り高みの見物していたかつたのだ。

なお、ダイゴとボスゴドラは何時でも破壊光線が撃てるようにカイオーガの動きが一望できる位置で待機している。言つてたこととやつてることが違う？

これは適材適所と言うものだ。

「楽しいなあ！ カイオーガ！ ほら、こっちだ！」
アオギリの明るい声が響く。

サメハダーの特性によつて服やら掴まっている手やは中々の大惨事になっており、事が終わった後に泣き叫ぶことになるのだが、それはまた別の話。

「おいグラードン」

声が出た。人間の声だ。たぶん、自分と呼んだ。

「お前がどんなつもりでそんなちっぽけな足場を作ったのかは知らない」

見れば、どうやら子供のようである。良い度胸をしている。具体的にそう言語化して考えた訳ではないが、大体そんなことを考えた。

「きつと、どつちかつて言うとお前らの方が被害者なんだろう」

子供は自分を真つ直ぐに見つめながら続ける。

「人間の身勝手に起こされて、気分の良い目覚めでもない時にライバルも復活したとなつたらそりゃあ戦いたくもなるだろうさ」

グラードンもじつと子供を見つめる。その力を見定めるように。その心を見抜こうとするかのように。

「折角だ。せめて、ライバルくらい倒しとこうぜ」

グラードンにはわからなかった。

この子供は何を言っているのか。

グラードンとこの子供、レンとの間には埋めようのない溝があった。

まず、種族の壁。ポケモンは人語を解する。とはいえ、違うものは違う。

そして、圧倒的ジエネレーションギャップ。時代が、世代が、違いすぎた。世代が変われば人が変わる。人が変われば言葉が変わる。同じ人間同士ですら、世代間でコミュニケーションが成り立たないこともあるのだ。まして、異種族、さらに三桁は余裕で超える程のジエネレーションギャップ。

無理だ。

グラードンにはまだわからないことがある。

何故目の前にいた筈の子供が消えたのか。

何故目の前が空なのか。

何故今自分の足は地面についていないのか。

何故、顎が痛いのか。

そうか、殴られたのか。

落下しながら確認すると、子供の横に四本腕のポケモンが立っていた。こいつに殴ら

れたのだろう。

敵ながら見事。原始とは、力こそパワーな時代。強ければどうともなる時代であった。長く眠りについていたグラードンはその辺りの感覚も当時のままだ。殴られたら腹は立つと言えど認めるものは認めなければ。

自らの足が地面に着いた暁には全力で殴り返すことを誓うグラードン。しかし、その目論見は叶わない。

カイリキーのきあいパンチ（アップパー）を食らったグラードンがそのまま真上に打ち上げられていたなら、あるいは、それも可能だっただろう。しかし、残念ながら、斜め上。つまりグラードンは放物線を描いて落下していた。

足場の狭さがここで災いする。

グラードンが落下する先には陸地などない。ただ、深い青に染まった海があるのみだ。

全ポケモン中、最も重いグラードンが沈まないはずがなかった。

「……カイリキー」

「リキ……」

いや、まあ、俺も悪かった。打ち上げたら、落ちるわ。いやでも、俺打ち上げろなん

て言っていないし……。

……まあ、しゃあないか。

「まあ仕方ないね。次とか、頑張ろうな」

「リキ……！」

さて、問題は落ちたグラードンだ。上がってこれるのかね……。

グラードンが落ちた時にできた波紋も徐々に薄くなってきた。上がってくる様子はない。

……無理か。

「きあいパンチにもできないことはあるってことかな……」

考えてみれば、ここ最近の俺は調子に乗っていた気がする。これを機に反省しようかな……。転ばぬ先の杖も大事だけど、実際転んでみる経験も大事だよな。

「リキー！」

「え、何？ どうしたの」

どうやら俺を呼んでいたようなのでカイリキーの方を見る。俺の背中を指差している。いや、背中って言うよりリュック？

何か妙なものを入れて……あつ。

なんか紅色の玉が光ってる。

……。

これ、掲げたらグラードンが味方になって復活するやつ？ まっさかー。
でもそうなら胸熱だね。

……。

「カイリキー、いや、待った……皆出てこい」

手持ちを皆外に出し、よく見えるように紅色の玉を前に出す。

「さあ、来い！」

各々が拳（又はそれに準ずるもの）を振るう。正直紅色の玉が壊れやしないかと不安だったけどそれも杞憂だったようだ。

きあいパンチを受けて、紅色の玉は更に輝きを増した。ピカピカって言うより、ギラギラ。もうなんか、ヤバいーって感じ。目も当てられない。

しかし、だからこそこう言わなければならない。

「グラードン、きあいパンチだ！」

カイオーガと戯れるアオギリ。

アオギリを追うカイオーガ。

そんなアオギリ達を上から眺めるマツブサ。

それらを見守るダイゴ。

レンがきあいパンチで遊んでいる中（本人は真面目）、そんなことが繰り広げられていた。

だが、突如として異変が起こる。

ルネシテイの海が赤く、紅色の玉が放つ光のような赤、否、紅に染まったのだ。

この事態に対しての反応は、これまた人それぞれであった。一人はそんなこと知るか
とサメハダーを駆り、一匹は己のフィールドの異変に驚愕、そして原因を探るべく潜行
し、また一人はただサメハダーの上の一人を鼻で笑い、事態を俯瞰していた一人は、静
かに頭を抱えるのだった。

そして、事態は加速する。

光が収まった直後、海面から何かが飛び出した。

それは、元の姿の原型を留めてはいるものの、明らかに先程までとは違う、グラード
ンであった。

これにはマツブサも大喜び。

着地するグラードンに近づくと影が二つ。

一つは例の少年。グラードンに対して恐れを抱いた様子もなく、その背に飛び乗っ
た。グラードンは特にアクションを起こさない辺り、特に問題はないのだろう。

もう一つは海中から。そう、カイオーガである。海の主は敵対者を許さない。あるいはそれが水ポケモンであったなら、水ポケモンでないにしても水棲のポケモンであったなら許すこともあつたかもしれない。しかし、グラードンは、グラードンだけは許さない。遺伝子レベルで刻まれている意志が、カイオーガを駆り立てた。

カイオーガが海中から飛び出す。カイオーガは敢えて物理的なアプローチを仕掛けた。愚策と言つてはいけない。カイオーガとして自分の長所短所、向き不向き程度把握している。周囲の環境、自分の状態を把握した上での行動だ。

先程まで戦局はカイオーガに傾いていた。だからこそ、人間との鬼ごっこにも付き合つてやつていたし、今こうして物理的な「のしかかり」を敢行している。

すなわち、舐めプ。

何やら海が赤く光つたが、だからどうということもない。現に海は元に戻った。

そう、負ける要素などなかった。

天候はほとんど雨。相手のフィールドは狭く、此方はいくらでも動ける。余程のミスや思いがけない介入がなければ負けはない。

今、海から飛び出しても、自らの能力によつて降っている雨が、有利を教えて……。

雨が、降っていない。

グラードンはあんなにも大きかつただろうか。あんなにも熱と光を放つていただろ

うか。あれではまるで、眠りにつく前の、全盛期のそれではないか。

ここに来て、カイオーガは自らの判断ミスを悟る。

このままでは不味い。一旦退こうと試みるが、既に空中。最早慣性に従う他ない。

かに思われたが、超古代ポケモンは伊達ではない。カイオーガ渾身のハイドロポンプ。口から放つその反作用によって後ろに下がることを思いつき、即、実行。

だがそうは問屋が卸さない。

既に天気は雨どころか雲一つない。日差しがとても強い。加えてグラードンが放つ熱。

カイオーガの放つハイドロポンプと言えど、弱体化は免れない。結果、カイオーガの飛ぶ勢いを殺すには至らなかった。

いよいよ慣性に従う他ない。せめて、当たりを強く。少しでも与えるダメージを増やす方向へシフトした。

ここでグラードンが動きを見せる。右の足を引き、更に腰を捻りつつ右腕を引いた。何をしているのか、など明白である。力を溜めているのだ。

カイオーガが間近に迫ったその時、グラードンの背に乗った少年が声を上げる。

「……きあいパンチ!!」

声に合わせてグラードンが動く。拳だけでなく、上半身ごと。

その拳は、カイオーガの体を真下から打ち上げるように、遠心力を伴い地面を削りつつカイオーガに突き刺さった。

グラードンもカイオーガも知らないことであるが、その動きは、リングマが川を泳ぐ獲物を仕留める時のそれとよく似ていた。

リングマを超えるパワーを持つグラードンによるアツパーである。

当然、飛ぶ。

まして、そもそもが、きあいパンチである。

飛ぶだけで済んでよかったと言えよう。いや、むしろ、きあいパンチを受けても飛ぶだけで済むカイオーガがすごいと考えるべきか。

いずれにせよ、今回の復活に伴う戦いは、グラードンの勝利であろう。

その時点でその場に居たものは皆、そう、思っていた。

「レックウザ……破壊光線!!」

その声が聞こえるまでは。

レックウザの口にエネルギーが集まり、光線となってグラードン、らしいポケモンに

向かって飛んでいく。

言うこと聞いてくれてよかった。

破壊光線が直撃して、爆風で相手の姿が見えない。もろに入ってはいた……けど、これで終わるわけではない。

「きあいパンチ!!」

やっぱり……。また、いつの間にか殴られてるパターンのやつかな……？

煙が晴れた。

!! 飛んできてる!?

気を付けのような姿勢で体を真っ直ぐに伸ばしたグラードンが凄い勢いで飛んできていた。

まさか、飛んでくるなんて……なんてインチキ! ……コイキングも飛んでたか

……。

ってこんなこと考えてる場合じゃない!

「避けて! レックウザ!」

言っただけから気付く。

そうだ……破壊光線には反動があるんだ……。避けられないじゃない!!

でも、でも、何か……!

「迎え撃って!!」

レックウザが動けるかはわからない。だからせめて、振り落とされないようにしつかりしがみつく。

「くううっ!!」

衝撃で振り落とされそうになったけど何とか耐えられた。レックウザもまだ大丈夫そうだ。

グラードンは……?」

下の方で重たいものが水に落ちる音が聞こえた。

え、今のって……そうなのかな。終わったの……?」

……天気は、もう元通り。分厚い雲も、強い日差しも……無くなってる。海も静か。本当に、終わったみたい。

「……い」

ん?

「おーい! ハルカちゃん!」

見ると、レン君が私に向かって手を振っていた。

満面の笑みだ。

……

私はポケモンではないけれど、今、私の心に燃えてるこれをエネルギーにできるの
ら。

……この感情のままに殴ったなら。

きっとそれは、きあいパンチなんだろう。

そう、思った。

18

△月〓日 晴れ

あれから数日経過した。落ち着いたので書いている。

あの時は色々（グラードンとか諸々）どうしようかと思つてたけど、ハルカちゃん
とレックウザのお陰でなんやかんや丸く収まって良かったと思う。

大誤算で顔色の悪いダイゴさんとか、鮫肌でボロボロのアニとか、貴重なものが見
れた。

だからどうつてもんでもないな。

ゲンシグラードンの背中に乗るとかいう暴挙については反省している。なんか無事
だったから良かったけど普通は熱で御陀仏だろう。俺、別にマサラ人じゃなかったと思
うんだが……。

貴重な経験だったし後悔はしていない。

天変地異の影響はそこまで大きくなかったらしい。ので、割かし復興も早い方なんだ
ろう。知らんけど。

色々済んでからハルカちゃんにボロクソに怒られたのは記憶に新しいけど俺は自分

を曲げないよ！ あのきあいパンチは正当防衛だ。先に破壊光線撃たれたんだから仕方ない。

それに、ハルカちゃんも気付いていなかったみたいだけど、レックウザは最後、飛んでくるグラードンに対して、拳を、パンチと呼べるほどではなかったかも知れないけど、間違いない拳をぶつけていた。

ハルカちゃんもこちら側に来る日も近いんじゃないかと勝手に予想してる。

それはそれとして今日ジムに挑んだ。

某天馬を思い起こさせる口調だったので感動した。……いや、そこまででもない。

無事勝利。水タイプと言いつつ氷技も使ってくる辺りガチ勢の匂いを感じた。

でも考えてみるとナギさんのチルタリスとか地震持ってた気がするし案外普通のことなのかもしれない。でももつと草タイプに優しいジムになっていいとも思う。

まあ歴代御三家の中ではジュカインはましな方だろうし、こんなもんなのかな。

水の波動のことを考えればフーディンを使うべきではなかったかもしれない。一応、今回のフーディンを纏めておく。

・コイキング出そうとした所を割り込み登場（いつもの）

・水の波動で混乱を引く（いつもの）

・スプーンを投げて戦う（きあいパンチ）

・スプーンを投げ捨てて肉弾戦へ（きあいパンチ）
・オーロラビームの撃ち合い（きあいパンチ）

書いといてなんだけど、何だこれ。

いい加減休ませてやるべきか。いや、勝手に出てくるんだから仕方ない。

取り敢えず明日は観光でもしようと思う。

△月≡日 曇り

過ごしやすい1日だった。

昨日観光するなんて書いてしまったけど、そんなに見て回る所ってないなって気づいた。ルネシティの魅力は、伝統的で尚且つ芸術的な町並みと、真ん中に広がる海。要は景観がいい。

伝統的っていうのは、火山の火口だったっていう地形を基本的に変えることなく適応したルネシティ創設から変わらない町並みを指している。あと目覚めの祠ね。昔からあるって言うし。天然記念物だか文化遺産だったりするのかな。

芸術的っていうのは、町全体の統一感的な話。白い岩壁にマッチした乳白色の建物達洒落てるね。京都のコンビニが茶色いようなものだ。

と言いつつポケモンセンターとフレンドリーショップは変わらない色合いなんだか

らポケモン協会の権力の大きさを感じるところだ。

まあ、話はそれたけれども、とにかく観光する意義を感じなかったわけだ。目覚めの祠も一回行っちゃったしね。

だから取り敢えず、午前中はカフェで景色を眺めつつエネココアをがぶ飲みし、取りすぎた糖分を消費するべく午後はサメハダーライドした。探してみたらマニアックな店はあるもんで、サメハダーに乗る用の水着とか手袋とか売ってる店があった。

あれ？ 結構観光してんな。

俺がカフェでだらだらしてる間にハルカちゃんはジムに挑んだそう。勝ったそうですよかったですね。

別にハルカちゃんに聞いたわけじゃない。聞いたのはアダンさんだ。あの人もサメハダーを嗜むそうで、ちよつとご一緒した。その時に聞いた。

※サメハダーは各自持参。

ジム戦後にサメハダーに乗るって……って思ったんだけど、「ジムリーダーという立場にいる以上、当然と言えば当然ですが、ポケモンバトルに負けるのは堪えるのですよ。ユー達のように将来有望な若者と戦うと、余計にね」

「この年になると、ええ、ユー達の若さが、フューチャー、すなわち未来が、羨ましくてしょうがなくなります。勿論、私とて、まだまだ現役です。ですがユー達に比べれば、伸

びしろも、成長速度も大きく劣るでしょう。それが、バトルの後、しみじみと感じられて、サメハダーに乗らずにはいられなくなるのです」

「サメハダーに乗ると、頭に浮かぶ細かいことや、沈んだ気持ちが一度に吹き飛びます……まあ、最近はやの健康も吹き飛びそうになるんですがね」

とのこと。顔は風圧で歪んでいた。だいぶ面白かったけど、あまりにも遠い目をしていたもんだから苦笑もできなかった。

やっぱ気分転換って大事なんだなって。

で、夜、エニシダさんから連絡があつた。是非来てもらいたい所があるんだと。フロンティアかな？

迎えに来るそうなので、明日もルネシティで待機。ハルカちゃんも明日出発するそうなので、今後は別行動になりそうだ。

それを伝えたら微妙な顔をされた。嫌なのか嬉しいのか俺からは判断できなかった。どっちでもいいけどさ。

気分がいい。

とても気分がいい。天変地異が終わったから？ ジム戦に勝ったから？ そんなことじゃない。

ついに、単独行動だ。

ようやく、常識的な旅に戻るんだ。

気分が良すぎて、サイユウシティまでバシャーモに運んでもらってるとそれすらも全然気にならない。

レン君と同行していかないだけで、きあいパンチが脳裏にちらつかないだけで、こんなに気分が変わるなんて。

……いや、べつに、物足りないとか、無いから。

ルネシティを出発して……どのくらいかな？

取り敢えず、島が見えてきた。バシャーモが方向をミスっていなければ、あれがサイユウシティ、の前半、というか入り口だ。これから挑むことになるチャンピオンロード、そして過酷な道のりの前に準備を整えるためのポケモンセンターが見える。

けど、あそこはけっこうな高さがある。周りは崖、そして巨大な滝。これを越えられなければ挑むことすら許されないのだろう。

「バシャーモ、どうするの？」

レン君のポケモンならともかく、さすがのバシャーモでも滝は無理だろう。かといって私を担いだままでは崖を登るのも一苦勞。そういうことを考えての質問だった。

「シャモー！」

バシャーモは任せるとでも言うように、一声鳴いた。まあ、任せるしかないのよね。

そして、ついに滝の前にたどり着いた。バシャーモは足を止めない（止めたら沈む）けど。とても涼しい。多分マイナスイオンがどうか。さて、バシャーモはどうする気だろう。

「バ……っ！」

バシャーモ、と言いかけて、口を閉じる。急にバシャーモが動いたから。さっきまで居た海面はずいぶん下に見える。

……まあ、こんな気はしてたよ。うん。

スゴいジャンプ力だなー。

せめて岩から跳んでよと思わないでもない。

一度ポケモンセンターに立ち寄り、準備を整える。ここから長丁場になるだろう。リーグに挑む前の最後の難関だ。

強いトレーナーがひしめき合っているとかいなとか。やたら強い緑髪の少年が誰かを待つてるとか都市伝説みたいな話も聞いた。

まあいけばわかるね。

中に入ると、埃と黴と、何となく熱気のようなものが漂っている気がした。

予想はしてたけど、入り組んだ構造をしている。面倒……いや、試練にふさわしいと思う。

過酷な環境だけあって野生のポケモンも馬鹿にできない。そんな中で修行してるんだからトレーナーも然り。考えてみればここにいる人は私も含めて皆バツジ八つ集めた実力者。そりゃ、進むのも容易じゃない。

そんな実力者達の衝突なんて「目と目があつたらポケモンバトル」なポケモントレーナーにとつては当然だ。洞窟のどこにいても誰かがバトルしている音が聞こえる程だ。洞窟内でこんなに暴れて崩れたりしないものか非常に不安だ。舗装してあるところは舗装してあるんだけど、やっぱり心許ない。

私の道のりは、こうして物思いにふけることができる程度には順調なんだろう。わかんないけど。

今のところ、バトルには勝ち続けている。道も戻ろうと思えば戻れる程度には記憶し

てる。

悔しいけど、寂しさというか、誰かと話したい。一人旅のきつさつてこういうときに感じるんだね。周りがライバルばかりだとそんなに話も弾まないし。こんなところに来てまさかレン君のありがたみを感じるようになるなんて……しつかりしなきや。血迷ったらだめよハルカ。

やっと一階に戻ってきた。おそらく、この先が出口だろう。疲れた。ポケモン達も消耗してる。バシャーモは元気だけど……。いや、頼もしいことは頼もしいからいいんだけど。それに、この期に及んでバトルなんてないよね。

「待って下さい!!」

しまった。これがフラグつてやつなのね。

後ろから声をかけられ、振り返ると、見知った顔が。

というか、ミツル君だった。何でこんなところに？

心なしか、背も高くなったような……。それに、雰囲気……。

「ミツル君? どうしたの?」

「やっと見つけた……」

「どういう……」

そこでハルカはポケモンセンターで聞いた話を思い出す。

「緑髪のトレーナー……」

思わず言葉が漏れた。

「どういふも何も、文字通りです。僕は、あなたを待つてたんです。ハルカさん」

予想外だった。都市伝説のようなものだと思つていた。だが、そのトレーナーは間違
いなく自分の知人であり、しかも自分を待つていたと言う。

そんなハルカの驚愕を余所に、ミツルは話を続ける。

「ハルカさんに会つたのは、トウカシティが最初でしたね。センリさんにジグザグマを
借りて、僕がポケモンを捕まえるのをハルカさんが付き添つてくれた」

確かにそうだ。ハルカもよく覚えてる。

「そして、次に会つたのはキンセツシティ。無謀にも僕はジムに挑もうとしていて、叔父
さんを説得するためにあなたにバトルを挑んだんでしたね」

そうだ。あの時はスルーしようとした。ダメだったが。

「実はあの時がトレーナーの人とのバトルは初めてだったんですよ。……考えてみれば、ハルカさんにバトルを挑むのもなかなか無謀でしたね」

それはそうだろう。指示の出し方はとてもじゃないが慣れたトレーナーのものではなかった。

「でも、あの負けが、あの悔しさがあつたからこそ、僕は今ここにいます。ハルカさん、あなたは間違いなく僕の恩人です。本当にありがとうございます」

「そんなこと……」

言われても困ると言うのが本音だった。別にミツルに対して悪感情があるわけではない。単に、付き添ったのは父親に言われたからだし、バトルしたのは成り行き上断りづらかったからだ。ミツルのことを思つてのことではない。だからこそ恩に着られるも困るのである。

「……さて、じゃあバトル、しましょうか」

「えっ」

今の流れでどうして。

言葉にしなくても、声音に、表情に、ハルカの気持ちが見れていた。

「ハルカさんは僕の恩人、これは紛れもない事実です。でも、それとこれとは別の話です。何より、ここはチャンピオンロード。頂点を目指すトレーナーが鎬を削る場所

す。バトルをしない方がおかしいと思いませんか？」

「それはそうかもしれないけど……」

「何より、僕はハルカさんに勝ちたい。だから、ここでハルカさんが来るのを待つてたんです……これまで一緒に頑張ってきたポケモン達のためにも、そして、自分を一人前のトレーナーと認めるためにも……」

「僕は、あなたに勝ちます」

この感じ、どこかで……いや、それはどうでもいい。ミツルはバトルするまで動かないだろう。正直気は進まないが、ハルカもまたポケモントレーナーの端くれ。ここで退くのはどうなのか。

「わかった。やりましょう」

そしてお互いポケモンを繰り出し、ポケモンの技が、二人の指示が飛び交う。まさに一進一退の攻防……というには、些か、ミツルの方が押されぎみであった。

トドゼルガがチルタリスを倒し、ロゼリアを倒し、レアコイルに倒され、たった今、キノガッサがレアコイルを倒した。

まだハルカにはキノガツサを入れて五体、一方ミツルにはあと二体しか残っていない。
い。

これは妙だ。

ミツルは先ほど間違はなく「待っていた」と言った。それはつまり、ハルカよりも先にチャンピオンロードまでたどり着いていたということ。であれば、バツジ集めもハルカより先に終えていたことになる。ハルカがキンセツシティに来た時点でバツジ0だったことを考えれば驚異的な速度だ。しかし、そうであるならば、相性の問題があるとは言っても、もつと戦局は拮抗していいはずである。

そしてもうひとつ。優勢なのはハルカである。にもかかわらず、ミツルには焦りが見えない。

「キノガツサ、スカイアツパー！」

「エネコロロ、猫の手！」

猫の手によって呼び出された技はサイコキネシス。エネコロロの懐に踏み込むキノガツサだったが、サイコキネシスによって動きを阻まれる。加えてサイコキネシスはキノガツサには効果抜群だ。このままでは負ける。

しかし、キノガツサはハルカの手持ちの中では古参だ。意地がある。全身に掛かる念力をどうにかするのは難しい。だが、せめて腕が動けば。力付くでサイコキネシスを振

りほどき、腕を伸ばし、エネコロロを殴った。

エネコロロにスカイアッパーは効果抜群。互いに効果抜群の技を与えたことになる。エネコロロは耐久力不足、キノガッサはレアコイル戦からのダメージの蓄積によつてダウン。相討ちというかたちになった。

「ありがとうキノガッサ」

キノガッサをボールに戻しつつ考える。

恐らく、今のサイコキネシスは最後の一体によるもの。ミツルの手持ちから考えると間違いないサーナイトだ。

「流石ですハルカさん」

「ミツル君こそ」

「いえ、僕のポケモンたちはまだまだ育てきれっていない部分がありますから。バランスよく育てるのつて難しいですね」

「それは、もちろん」

「でも、だからこそ、この子は、この子だけは簡単にはいきませんよ！ 行け！ サーナイト！」

成る程、ミツルの自信も頷ける。よく育てられていることが一目でわかる。

そして先ほどの疑問も解けた。サーナイトが突出して育っているのだろう。だから

こそ早く進むことができたし、追い込まれていても焦らなかつたのだ。
「プラスル！」

どんな技を繰り出してくるのか。やはり、サイコキネシスか……？　いつでも動けるようにプラスルは身構えている。

「サーナイト……きあいパンチ！」

一瞬、頭が真っ白になった。

ハツとして見ると、既にプラスルが殴り飛ばされていた。驚きの攻撃速度だ。

プラスルであれば、十分に行動できるだけの隙があると思つていた。

プラスルは目を回している。もう戦えないだろう。

「……お疲れ様。プラスル」

きつかつたけど、楽しかった。チャンピオンロードを進むなかで味わつたバトルは間違ひなくそうだった。ミツルとのバトルも楽しかったのだ。ついさつきまでは。

プラスルが倒れ、ペリッパもカクレオンもなす術なく倒れた。

きあいパンチ。

まさか、レンと旅路を共にしていない時にまで目にする事になるとは。これがただ

のきあいパンチなら良かった。だが、違う。確実に、違う。

サーナイトは、指示を受けると一瞬でこちらのポケモンの前に移動し、そのまま反応する間もなく殴られて終わる。

こんなものをどうしてただのきあいパンチと言えようか。

「そのきあいパンチって……」

「ある人に教えてもらいました」

「そう……」

ビンゴだ。

もう聞くまでもない。レンだ。

何でこんなところでまで……。ネガティブな思考に囚われかけるが、首を振って気を取り直す。

レンのことはどうでもいい。今はバトルの最中だ。まだハルカは負けてはいないのだ。

「行つて！ バシャーモ!!」

「サーナイト、きあいパンチ！」

バシャーモの目の前に現れるサーナイト。その拳が振るわれるかと思われたその時、サーナイトの動きが止まる。

バシャーモが拳を止めたのだ。

最古参は伊達ではない。きあいパンチへの耐性もまた然り。

「反撃よバシャーモ！ ブレイズキック！」

炎を纏った蹴りがサーナイトへ迫る。しかし、サーナイトは空いた方の手で防いだ。まず間違いなく、あれもきあいパンチだろう。

「もう一度、今度はラツシユだ！」

きあいパンチのラツシユ。今のところ何とかバシャーモはいなすことができているがいつまでもつか。

今ならあのエネコロロに猫の手を使わせた意図がわかる。きあいパンチをぶつけるつもりだったのだ。

まだレンのポケモンのそれには及ばないようだが、油断はできない。レンのポケモンが猫の手の類いを使えば間違いなくきあいパンチを引くだろう。いや、そもそもきあいパンチを覚えさせるか。

「にどげりよー！」

ラツシユの間の一瞬の隙を突き、にどげりを放つ。エスパークタイプでも沈めたバシャーモの十八番だ。

しかし、まともに食らって尚サーナイトは倒れない。

「大丈夫かい？ サーナイト？」

サーナイトはミツルに向かって頷いた。

「よし、今度こそ決めるぞ！ きあいパンチ！」

バシャーモに、本日何度目かわからないきあいパンチが迫る。

バシャーモは動かない。バシャーモは悟っていたのだ。ここがひとつの転換点である。この戦いをいかに制するかが、自分の成長の大きな鍵となることを。

思えばきあいパンチに立ち向かうのはこれが初のことだ。今まではきあいパンチはどちらかと言うと味方側にあつた。であれば、まともに受けるのも一興。

そして、鳩尾に拳が入る。そして、拳に乘せられていたエネルギーが炸裂。全身に駆け巡る。

耐えられない程ではない。だが大きなダメージだ。

思わず膝をつく。

ハルカは悔やんでいた。考え事をしていたうちにバシャーモがきあいパンチをまともに食らってしまった。もうバシャーモしか戦えるポケモンはいないと言うのに。だがそれほどまでにきあいパンチとの戦いはハルカを追い詰める。

思えばあの時、トウカの森での少年に出会わなければ、その後もなにかと同行したりすることがなければ、もつと平和な旅ができていたのかもしれない。こうしてきあいパンチに対して悪印象を抱くこともなかったかもしれない。

それもこれも、あの少年のせいだ。今頃どこかでへらへら笑っているのだろう。許せない。

私はこんな思いをすることになってるのに、自分ばかり気楽な旅をしているなんて、認められるか。

それに、だ。

今ここで、ミツルに負けるのは何を意味するか。

ミツルはきあいパンチを使う。それも、レンから習ったであろうそれを。きあいパンチと言えぱレンである。

であれば、ここでミツルに負けるのは、きあいパンチ使いに負けるのは、レンに、あのきあいパンチ野郎に負けたことになるのではないか。

そんなこと受け入れられない。ミツルに負けるのは、悔しいが構わない。追い詰めたのに逆転されるのも構わない。

だがきあいパンチは許さない。

ハルカの闘志が一気に燃え上がる。

ここから勝つにはどうすればいい？

にどげりは駄目だ。多分バシャーモが一番得意としてる技だがサーナイトには耐えられてしまった。

ではブレイズキック……きあいパンチで止められるのはいただけない。恐らく今猛火が発動しているがそれでもどうか……。

電光石火は火力が足りない。切り裂くも然り。

……どうするか。

「きあいは誰にだってあるんだよ。勿論、ハルカちゃんや、バシャーモにだってね」

……こんな時にまでちらつくレンに腹が立つ。

「ドラゴンタイプのパケモンは強力だが、同じドラゴンタイプの技に弱いんだ。ドラゴンを以てドラゴンを制す、というやつだ。ハルカも覚えておいて損はないぞ」

昔父親が言っていた。

「きあいがあればどんなポケモンだってきあいパンチはできるんだぜ」

舌打ちしそうになる。

「だからきあいパンチ親父なんて名乗ってるけど、教えることなんて何もなし、ハルカちゃんもきあいパンチを使ったならそれはハルカちゃんのものなんだ。俺が教えたとかそういうのは実は関係ないんだよ」

……オーケー。わかった。もういい。理解した。

こうすればいいんだ。最初からこうしておけば良かったんだ。

覚悟は決まった。

「バシャーモ……」

”……。パパ、ママ、ごめんなさい”

”私は今から、常識を捨てます”

「きあいパンチ!!!」

——今度会ったら、絶対ぶん殴る。

とうとうたどり着いた。

ホウエンリーグ。ここが私の旅の終着点。

ここで挑戦者を迎える四天王は、とんでもない強さだつて聞いている。

ミツル君との戦いで道を踏み外してしまったが、それはそれ。私はまでもでいたい。ここからはきあいパンチは使わないで行こう。

「やれやれ、デタラメな嬢ちゃんだぜ。こりや次のチャンピオンは決まりかもな」

そんな決意をしたものの

「あーあ……負けちゃった。ところで、きあいパンチつて……何タイプだっけ……？」

気がつけば

「あなたの熱……いえ、きあい、私の技が通じるものではなかったようですね」

使ってしまったいて

「見せてもらったぞ！ ワタルの小僧を思い出させるいい目だ！ そのきあいがあれば道を踏み外すことはないだろう！ さあ、進むがいい！」

最早後戻りできないことを悟った。

助かっている。確かに、きあいパンチのお陰で乗りきれている部分はある。でも、こんな、こんなのって……。

でも、次で最後。次を勝てば私は、解放される。

ルネシティで別れる時、レン君は言っていた。

「ここからは別行動だね。多分、次会うときはバトルする時の筈さ。……先に行つて待つてるよ」

これは恐らく、チャンピオンになつて待つてると言う意味だ。……レン君のくせに、中々粹なことを考えるじゃない。

ミツル君は、確かに強かった。

でも、ミツル君のポケモンの中で、例のきあいパンチを使ったのはサーナイトだけだった。

対して、レン君はどうか。

きあいパンチを使わないポケモンの方が少ない。いや、使わないポケモンなんて居ない。

いくら今の私がきあいパンチを受け入れ……いや、容認し始めたとしても、あちらは本家本元。付け焼き刃のきあいパンチが通じるかどうか。

まあ、すぐに殴る機会が来たのは喜ばしいことかな。うん、もう、取り敢えずぶん殴れたらいいや。

覚悟を決めて扉をくぐる。

「ようこそ、ハルカ」

「は？」

「えっ」

「あ、なんでもないです」

「そうか……では気を取り直して……」

「どういう……ことなの……？」

「なんで、ミクリさんが？ ていうか、レン君は？」

「駄目だ。ミクリさんが何か言ってるけど全然耳に入ってる来ない。」

「さあ！ ホウエンで一番華麗にポケモンと踊れるのは誰なのか！ 今ここで見せても

らおう！」

「あの」

「なにかな？」

「レン君来てないですか？」

「レン……？ いや、来てないよ」

「……やりやがったあのきあいパンチ狂。」

「騙された……！ ……いいえ、落ち着くのはハルカ。あのきあいパンチ狂はポケモンリーグで待つてるとは一言も言つてない。勝手に勘違いしてしまったのは私。だからここで怒るのは筋違い……。そう、私のミス。吸つて、吐いて、吸つて、吐いて……。」

「……駄目だ。許せない。やっぱレン君が悪い。」

「……大丈夫かい？」

「はい、お待たせしてすみません」

「……レンも、罪な男だね」

「……これは、そう言うのじゃないので。単に、今度会ったらボコボコにしてやろうつて

……泣いたって許さないって、思っただけです」
「……ハハツ……よし！ バトルを始めよう！」

「バトルドオオオオム!!!」

司会の宣言と共に観客達の歓声が上がります。

「さあ、やって参りましたバトルドオオオオム決勝戦！ まず入場しますのは、パーティ編成がバランスの良いことに定評のある、Aブロック代表……バランスのいいカワモトオ！」

「キヤー！ ステキー！」

「見ろよカワモトのやつ、今日もバランスがいいぜ！」

観客の声援に手を振って応えるカワモト。そして。

「対戦相手の入場だ！ Bブロック代表はこの男！ きあいパンチしか使わないことで

一気に話題になりました！ きあいのコブシイ！」

「きあいパンチ！ きあいパンチ！ きあいのコブシイ！」

「キヤー！ コブシ様ー！ ぶん殴って〜!!」

観客の声援を綺麗にスルーしつつ入場する少年、きあいのコブシことレン。それもそのはず、ほとんどの声が男性である。「ぶん殴って〜!!」に至ってはガチムチである。

「実況はご存知、ツクダと、解説には我らがドオオオオムスウパアスタア、ヒース様がいらっしゃっています!」

「アツハツハ☆ 皆、今日はよろしく!」

「キエエエエアアアアアシャアベッタアアアアアア!!!」

「キヤー!!! ヒース様ア!!!」

「こつち向いてー!」

ヒースはスーパースター。このドームのナンバーワンである。当然、ファンサービスも忘れない。ウイנקでもしてやればその方向にいる観客は胸を押さえて意識を失うなど日常茶飯事である。

「さて、改めまして選手の紹介です。カワモト選手はバランスのとれたパーティ編成の上で、相手のポケモンに合わせたバランスのいい選出を行い、バランスのとれたバトルで危なげ無く勝ち進んで来ています。今回の編成はユレイドル、ヤドラン、オコリザルです。どのポケモンも重心が低いですから、安定感のあるバトルが期待できそうですね!」

「え、バランスってそういうことなの?」

「一方、コブシ選手ですが、先程も申しましたように、きあいパンチしか使っていません。更に、ポケモンもフーディン一体しか使っておらず、所謂2タテで勝ち進んで来ています。今回の編成は、フーディン、ギャラドス、レアコイルです。今回もフーディンが先発なのか、或いは別のポケモンによる別の技が見られるのか、興味が尽きませんね！」

「うん、編成だけ聞くとこっちもバランスは悪くなさそうだよね」

「ヒース様はどちらが勝つと予想されますか？」

「うーん、お互いに弱点を突けるポケモンはいるんだからどのポケモンを選出するかだよね。まあそれはいつものドームと変わらないと思う。ただ、ここまでフーディンだけで勝ってきてるコブシ選手の方が余力はありそうだし……ま、輝いてる方が勝つでしょう」

「成る程！ 確かにいつもと変わりませんね！ では、試合開始イイイ!!」

「さあ、カワモトの一匹目は……オコリザルだあ!! そしてコブシは……ギャラドスウ！ ここに来てフーディンから変えて来ました！」

「カワモト選手は初手フーディン読み読み読みかな？ まあ読みが当たったかはわからないけど。コブシ選手はこの時のためにフーディン以外のポケモンを温存していたのかもしいね」

「オコリザルには少々不利に見えるがどうするカワモトオ!?」

「オコリザル、雷パンチだ!」

「雷パンチだああ!! ギャラドスには効果抜群です!」

「流石カワモト! バランスがいいぜ!」

「ステキー! バランスがいいわー!」

「……きあいパンチ!」

「まさかまさかだ! コブシはギャラドスにきあいパンチの指示を出したア!! ぶれない! ぶれないぞコブシ! 雷パンチを撃とうと迫り来るオコリザルをもともせず、ギャラドスの巨体を活かしたきあいパンチをシューーーッ!! 超☆エキサイティン!!」

「ギャラドスってきあいパンチできるんだね。知らなかったよ」

「キヤー!!! 知らなかったヒース様もステキー!」

「カワイー!」

「さあ、今のきあいパンチでオコリザルは倒れてしまったア! カワモトの二体目は

……ヤドランだあ!!」

「これは……ヤドランの技次第……かな」

「ヤドラン、サイコキネシス」

「成る程、触れられないように、遠距離だね。タイプのにも通りは悪くない」

「解説するヒース様もステキー!」

「カワイー!」

「どうやらサイコキネシスで動きを封じるようだ! 超☆エキサイティンな戦略だ!

これにはギヤラドスも……?」

「きあいパンチ!」

「ものともしなあい!! きあいパンチは伊達ではなかったあ!!」

「うーん、やるなあ!」

「ヤドランはどうだ? 立ち上が……る……いや、立ち上が……立ち上がれないっ!

あつという間に勝負がついてしまったあ!! 今回のバトルドオオオオオム、優勝者は、

コブシだああ!!」

沸き上がるコブシファン、そしてぎわつくカワモトファン。

「うおおおおお! きあいパンチ! うおおおおお!」

「カワイー!」

「あのバランスのいいカワモト選手がツツ……」

「きあいパンチって……?」

「あのきあいパンチ……なんてバランスがいいんだ」

「負けてもバランスは良かったぞー!」

「超☆エキサイティン! なバトルを見せてくれた二人に盛大な拍手を! そして、五回目の優勝を果たしたコブシ選手にはヒース様への挑戦権が与えられるぞ!!」

「私のファンサービスを、お楽しみに☆」

☆月☆日 快晴

バランスって何だっけ? と、そんなことを思わざるを得ないバトルドームだった。……きあいパンチの方がわからない?

そんなはずはない。

「きあいパンチとは？」と聞かれて「きあいパンチだ」と答えるのは、思考を放棄しているとか、ゴリ押ししているとかそういうことではなく、単にそれ以外にきあいパンチを言い表せる言葉が無いからだ。どれだけ言葉を尽くそうとも、あらゆる言葉は所詮きあいパンチの外縁をなぞるに過ぎず、真に本質を捉えた表現をするのであれば、きあいパンチと言う以外にはない。

まあ、それはそれとして、今日はバトルドオオオオムに挑んで、銀シンボルを頂いたわけだ。明日はどうしようか……金シンボルを狙うか、あるいは取り敢えず一通り銀を揃えるか。

きあいパンチ占いの結果、銀を揃えることになった。

では、次はどこに行くか、だ。

きあいパンチルーレットの結果、アリーナに決まった。

ということ、明日からアリーナに挑む。

アリーナと言えば、道場みたいな外観に、武道の試合みたいな感じのルールの施設だった。そういえば、セコイ戦法で勝ててしまう仕様だったっけ。こう、おっさんが並んでて判定してるのか？ ネコだましからの二連守るでエースがやられて当時の俺はGBAを投げたのをよく覚えている。結局ブレーンに挑むこともないままダイパ始め

たんだった。

まあ、きあいパンチがある以上、そう簡単にはいかないだろうけど。
なんであれ楽しいバトルにしたい。

翌日、レンはバトルアリーナの前にいた。闘志を試す場所、バトルアリーナである。気力は十分。太陽サンサン。絶好の道場破り日和である。勿論、あくまで挑戦するだけであり、道場破りのつもりは微塵もないのだが。

中に入ると、空手王風のいかつい中年が受付をしていた。この世界に空手王は何人居るのだろうか。ぼんやり考えていると、相手から声をかけてきた。

「お客人、バトルアリーナに挑戦されますか？」

「はい」

「では、参加するポケモンをお選びください」

ポケモンを選ぶ手に迷いはない。既に決めていた、ということではなく、単に、きあいパンチをする以上、そんなに違いは無いと判断した結果だ。

「ルールはご存知ですか？」

「はい、一応」

「ふむ、それではご案内いたしましょう」

受付の中年の案内を受け、広間に入る。ますますもって武道場だ。丁度対戦相手も入場したようだ。

「トレーナー コブシ、前へ！」

一歩踏み出す。

「トレーナー ハンゾウ、前へ！」

相手も此方へ一歩踏み出した。

「勝ち抜きチームバトル、始め！」

アリーナへの挑戦が始まった。

きあいパンチが猛威を振るう。搦め手も、直球の攻撃も皆、決まったかどうかともわからないうちに倒れ伏す。相手のトレーナーからしてみれば不幸という他ないだろう。指示を出したら自分のポケモンが倒れていた、なんてことはざらである。選出が悪いのか、指示が悪いのか、それとも相性が悪いのか、どれも違う。彼らは運が悪かった。

それは、レンが四周目の七人抜きを達成した時のことだった。

「お客人！ あなたの實力は実に素晴らしいでございますな！ そこで、ここらで一つ、我らが大将アリーナキャプテンとお手合わせ頂きましょう！」

いよいよ、プレイしていた当時は出会うことのなかったフロンティアブレーンと相見える。期待か不安か、十中八九期待だろうが、レンの心臓は高鳴っていた。

「アリーナキャプテンとの勝負、覚悟はよろしいですか？」

「はい！」

ドタドタと此方に向かつて走ってくる音がきこえ、バアーンと派手な音を立てながら向かいの襖が開く。そこに立っていたのは一人の少女。

「ウィーッス！ よろし……く」

どこぞの土竜とは違う可憐な声。だがそのまま紡がれる筈だった言葉は勢いを失い、随分と静かなものになってしまった。

レンは声が出ない。いきなりの登場に驚いたとか、啞然としたとか、そんなちやちなことでは断じてない。彼は見とれていた。その人物に。アリーナキャプテンであろうその少女に。

スラリと伸びた足。それを包む水色のタイツ。シヨッキングピンクの襟の黒い胴着。全体的にバトルガールを思わせる装いであり、彼女が醸し出す雰囲気もバトルガールに近いそれであった。

だが、違う。アリーナキャプテンが元気系の美少女だった。それは驚くだろう。しかしレンが見とれたのはそこではない。

レンはきあいパンチに侵されている。それは脳に限らず神経や感覚も同様だ。つまり、きあいパンチのごとき第六感も働く。その第六感が告げていた。

目の前の少女はバトルガールではない。そんな直球なバトルはしてこない（きあいパ
ンチ並感）。

つまり、むさいおっさんのフロンティアブレンが出てくると思えば美少女で、しか
も、バトルガールのような格好をしているにも関わらず、別にバトルガールらしいバト
ルはしてこない（であろうことが予想される）という二重の落差。すなわち、ギャップ
を感じたのだ。

このギャップ。平静でいることは不可能である。

レンはギャップにハートをぶち抜かれてしまったのだ。
所謂ギャップ萌えであった。

一方のアリーナキャプテンは何故言葉が尻すぼみになってしまったのか。

彼女もまた、察したのだ。目の前の少年がただのポケモントレーナーではないこと
を。

彼女とて年若いとは言えフロンティアブレン。トレーナーとしての経験値は並み
ではない。ポケモンを、そして人を見る目は確かである。

そんな彼女から見て、目の前の少年は、ただの短パン小僧ではなかった。それはそう
だ。彼は短パンではなく普通の長ズボンである。だが間違いなく短パン小僧だ。彼女

の勘がそう言っていた。

何故短パンではないのか。それは一重に、機能性。普通に考えれば短パンの方が動きが阻害されないもので機能的と考えられる。だがそうではない。トレーナーの旅は舗装された道を行くだけではない。無論、そのような旅路もありうるが、そこで出会うポケモンは限られる。トレーナーとして、まだ見ぬポケモンと出会い、そして互いを高め、他のポケモンやトレーナーとバトルをする。それがあるべきトレーナーの旅。少なくとも彼女はそう考えていた。

それが短パンでないこととどう関係するか。

彼女の考えるトレーナーの旅、それはケガと隣り合わせなのだ。舗装された道、すなわち、人の手が入った場所に現れるポケモンなどだが知れている。それで満足してはならない。まだ見ぬポケモンと出会うには、人の手が入っていない、すなわちより厳しい自然に踏み込まねばならない。険しい山に登るだろう。生い茂った森に入るだろう。何なら海に潜ることもあるだろう。そんなことをするのであれば、短パンでは足を守れない。

短パン小僧でありながら短パンではない。これは合理的な選択の結果なのである。しかしそうでありながら少年は短パン小僧としての気持ち忘れていない。それを彼女は見抜いたのだ。

そしてそれだけではない。少年が纏う覇気（きあい）が、彼がただ者ではないということを示していた。

バトルスタイル的に、彼女は賢い人間が好きだ。そして、1トレーナーとして、強い（強そう）トレーナーの方が好ましい。

それに該当しそうな情報が一瞬にして彼女に伝わり、トウungkしかけたのである。つまり、ほぼトウungkである。

「あ……えっと、レンです。よろしくお願いします」

「あ……ご丁寧にも、コゴミです。アリーナキャプテンやってます……」

「……」

「……」

「えー、始めてもよろしいですか？」

「あ、はい」

「勝ち抜きチームバトル、始め!!」

「いつけえ！ ヘラクロス！」

「ケツキング！ 頼むぞ！」

コゴミの一体目、ヘラクロスを見て、レンは目を輝かせる。ヘラクロスは虫、格闘タイプ。さぞかしいいきあいパンチが撃てることだろう。コゴミに対する好感度が上がった。

とはいえ、レンの一体目はケツキング。遊び心の欠片もない、純然たるゴリ押しモードであることがわかる。

「きあいパンチ！」

結果は言わずもがな。ヘラクロスは倒れる。ヘラクロスの持ち物はカムラの実。食べる暇などなかった。ヒースのラグラージのように、もしもきあいのハチマキを巻いていたならば、或いは起死回生による逆転も狙えただろうが。

「まだまだ！ ブラツキー、あやしいひかり！」

一体倒された。悔しくないわけではないが、まだ一体。逆転は可能だ。ここからが、ブラツキーからコゴミの真骨頂とも言えるバトルになる。

まずはあやしいひかりによる行動の制限だ。

「惑わされるなケツキング。きあいパンチだ！」

だが、我らがケツキング姉貴はぶれない。特性による耐えようもない怠けがあれば、いや寧ろそれがあつたからこそ、ケツキングはレンの言葉に応える。考えて行動するからこそ動きが狂うのだ。

ケツキングは考えるのをやめた。

そして本能に、練習により染み付いた反射的動きに、沸き上がるきあい身を任せ、普段通りに、いつものように、ただ拳を振るうのだ。

驕つてはならない。侮つてはならない。混乱していようときあいパンチはきあいパンチ。気づけばブラッキーは宙を舞っている。当然既に意識はない。

ヘラクロスに続いてブラッキーまでも倒れた。だがコゴミの内心は静かなものだ。確かにこの少年は強い。素晴らしい技を持ったポケモンたちだ。だが、きあいパンチでは越えられない壁がある。格闘タイプにはできないことがある。それがコゴミの三休目。

勿論、勝つことは嬉しい。だが、最初のほぼトウンクで期待が高まっていただけであつて、この見通しは少し残念でもあつた。

「行つて！ ヌケニン！」

コゴミの三休目、それはヌケニン。ヌケニンは虫、ゴーストタイプのポケモン。きあいパンチはヌケニンには届かない。更にヌケニンの特性、ふしぎなまもりは、効果抜群以外の技ではダメージを受けないというものだ。どう考えても、きあいパンチでは破りようがない。

というのがコゴミの考えである。

「つばめ返し!」

不可避の一撃を見舞うべく、ヌケニンが迫る。ケツキングは動くことができない。「もう一発!」

再度のつばめ返し。だが、その攻撃は届かない。ケツキングの手により、阻まれていた。

でも、大丈夫。ヌケニンはゴーストタイプ。ふしぎなまもりもある。きあいパンチは効かない。コゴミの安心は揺るがない。

が、ここで気づく。ケツキングの覚える技はきあいパンチだけではない。だましようちやシャドーボールも覚えさせることはできる。そしてそれらはふしぎなまもりを貫く。

コゴミの心臓が早鐘を打つ。とんだ失態であった。きあいパンチに気をとられ、他の技の可能性を忘れ、正に絶対絶命の状態まで追い込まれてしまった。

「きあいパンチ!」

思わず宙堵のため息が出た。とともに、レンへの失望が胸中に広がる。タイプ相性もわからない奴だったなんて……。

と、不意に何かが頭の横を通りすぎた。疑問に思い振り向くと、壁にヌケニンが張り付いていた。戦闘不能なのは確かめるまでもない。ヌケニンは強い相手にはめっぽう強いがダメージを食らったら直ぐにダウンしてしまうのだ。

戦闘が終わった。だが心臓の鼓動は収まらない。もはやほぼトウungkどころではなかった。いとトウungkであった。

審判から試合終了の宣言がなされる。

無言でレンに近づくコゴミ。互いに緊張した面持ちである。

「……」

「……」

「あの……フ、フロンティアパスを……」

「あ……はい」

懐からフロンティアパスを取りだし、手渡す。

「はい、どうぞ」

コゴミから返されたフロンティアパスには、新たなシンボル、銀のガッツシンボルが輝いていた。

「それで、アタシ、その……あなたのこと、気に入ったっていうか……えつと……また、バトル、しに来てね？」

ズキユウウウン。レンの心中で起こったことを音で表すならこのようになるだろう。理由はコブシにはよくわからないが、元氣系の美少女が、何やらしおらしい雰囲気だま

た会いに來い（意識）と言ってきたのだ。

「……喜んで！」

火が点いた。そう、燃え上がっていた。ギャップ萌え、否、ギャップ燃えであった。

こうして、レンは、他の銀シンボルそちのわけで、アリーナの金シンボル獲得に乗り出すのである。

恋はいつでもハリケーンという言葉がある。だが、彼らの物語においてはそれは適切ではないだろう。

そう、きっと、このように言うべきだ。

恋も結局きあいパンチ。

その頃、ハウエンリーグでは新たなチャンピオンが誕生していた。

20

あるビルの屋上で一組の男女が向かい合っていた。

「……とうとう来たのね」

「元氣そうだね」

「ここに来た目的はわかっているわ」

「いや、たまたまなんだけど」

「毒を以て毒を制す……きあいパンチを撲滅するためにきあいパンチを使う私を止めに来たんでしょう？」

「いやだから……」「でも」……」

「もう、遅いわ。計画は既に最終段階。最早止められはしない」

「会話ができてないんだけど」

「私は、きあいパンチを撲滅するっ！ あなたはそこで、指をくわえて見てなさい！ A

KF、起動！」

女は背後に鎮座していた装置を起動させた。装置につけられたアンテナから、謎の電波が発信されているようだ。

男は呆気にとられた様子で女を見つめる。

「お別れの前に教えてあげるわ。今、起動させた装置、アンチきあいフオース^Aは、その効果範囲内のあらゆるきあいパンチを無効化するのよ」

「ええ……」

「これで、世界からきあいパンチを消し去ることができるツツ!!」

勝ち誇った女の高笑いが響く。

だが。

「きあいパンチってのは、これのことかな？」

女が気付いた時には、すでに装置には巨大な風穴が空いていた。直後、爆発する。

「どういうこと!?! AKFは確かに発動していたツツ! 何故きあいパンチが使えるの!?!」

爆風に包まれながら叫ぶ女に、男は事も無げに答えた。

「そんなの、君だつてわかつてるだろう?」

「つ!! まさか!」

女の脳裏に浮かんだのは、男もまた、AKFを防ぐ手だてを持っている可能性。

あり得ない話ではない。研究施設が幾つかこの男によって潰されている。そこでの研究から手掛かりを得ていてもおかしくはない。

と、そんなことを思う程度には、女は男のことを買っていた。

「だって、それがきあいパンチじゃないか」

「は？」

予測は容易く裏切られる。

何だそれは。声にはでなかつたが、女の目が、表情が、雄弁に語っていた。

「そんな、そんなことで……私の計画は……」

「気にすることないさ。今回は俺のきあいパンチが上回っただけのこと」

「もとはと言えば……あなたさえ、真つ当なトレーナーだったら……私は……」

「立てるかい？」

男は女に手を伸ばす。が、女はその手を払い、もう片方の手で男のから空きのボディに拳を叩き込んだ。

「ツツ!!」

拳をもろに受け、飛ばされた。

しかし、男は笑いながら立ち上がる。

「いいパンチじゃないか。それだけやれるなら大丈夫だね」

「あなたのせいで私はこうなったんだ……」

計画が潰えた悲しみからか、女の頬には涙が伝っていた。

「返してよ……償ってよ……! 私から奪った常識をこの手に戻しなさいよ! 責任取

れこのきあいパンチ野郎!」

涙ながらの言葉を受けた男は、真顔で数秒考えた末、左手を見せながら言った。

「ごめん、俺、新婚なんだ」

薬指の指輪が光る。

「そういうんじゃないんだよおおおおお!!」

絶叫と共に、拳が振るわれる。放たれたパンチは勿論きあいパンチ。あの旅から十数年、彼女自身が放つパンチもまたきあいパンチとなっていた。

だが、男も黙って殴られはしない。迎え撃つのは勿論きあいパンチ。何故なら、彼もまたその境地に至っていたから。

真のきあいパンチの使い手同士の戦いは、決着がつけばどちらかが死ぬ。それほどの激突。それほどのエネルギー。

激突が繰り返され、その度、世界が悲鳴を上げる。

そして、紆余曲折を経て……

二人は幸せなきあいパンチをして終了。

……。

「なんて悪夢……!」

無事、ハウエンリーグを制覇し、新たなチャンピオンとして君臨することになったハルカ。

だが、それは新たな戦いの始まりでもあった。

「おはようハルカ。手紙が来てるわよ」

「おはよう……手紙?」

母から封筒を受け取り、中身を確認する。

手紙はハギ老人からで、船のチケットが同封されていた。チケットに書かれた船の名前はタイドリップ号。サント・アンヌ号は有名なため知っていたが、こちらは始めて聞く名前だった。

「船のチケットが入ってた」

「へえ、いいじゃない。乗ってきたら？」

確かに、折角貰ったのだから使わないと勿体無い。

「うん、そうする」

「例の男の子……レン君？ も誘ってみたら？」

「何でレン君が出てくるのよ……」

悪夢のせいかな、凄く、嫌だ。

「え、他に誘う相手いるの？」

「そもそもこれペアチケットでもないよ……」

「あらそう。なら気にしなくていいわね」

「……じゃあ、行ってくるね」

「いつてらっしゃーい」

何故朝からこのように微妙な気持ちにならないのか。釈然としない思いを感じながらハルカは家を出た。

ペリッパーの「そらをとぶ」によって降り立ったのはカイナシティ。今日も今日とて市場は賑わいを見せている。一人で来たハルカには関係ない話だが。

用など一つしかないので船着き場に向かう。丁度、タイドリツプ号と思しき船が出航準備している所だった。チケットを見せ、乗り込む。

椅子に座りぼんやりしていると、ポケナビのエントリーコールが着信を知らせた。

「もしもし」

「あ、もしもしハルカちゃんかい？ エニシダだよ」

「あ、どうも。お久しぶりです」

「久しぶりだね。って用件はそれじゃないんだ。まずはそう、チャンピオンになったんだってね。おめでどう！」

「ありがとうございます」

「いやあ、私の目に間違いはなかった。まあ私の眼力はともかく、そんなチャンピオンになったハルカちゃんに是非来て欲しい場所があるんだ！」

「場所、ですか」

「そうさ！ バトルフロンティアって知ってる？」

「いいえ」

「強いトレーナーって、どこにいますか？」

「ポケモンリーグ……ですかねえ……」

「だよね！ でも、ポケモンリーグの外にだつて四天王並み、或いはチャンピオン並みのトレーナーがいたつておかしくないよね？」

「まあ、そうでしょうね」

「そう！ バトルフロンティアはそんなトレーナー達が思う存分バトルをするための場所なんだ！ ポケモンリーグが強さと名誉を得る場所だとすれば、バトルフロンティアはただひたすらバトルがある場所さ。地位も名誉も関係なく、ただ戦い続ける。そこで磨かれたトレーナー達はチャンピオンになった君でもそう簡単にはいかないと思う。どう？ 興味わいたでしょう？」

「まあ、そうですね」

本音を言えば、そんな気違いの巣窟のような所は若干遠慮しなかったが、今のハルカには特に何かする予定はなかったのである。つまり、断る理由もなかった。

「そうそう、レン君も来てるよ。かなり楽しんでくれているみたいさ」

「あ、そうなんですな」

訂正しよう。行く理由ができた。

「楽しみにしてます」

ぶん殴ることを。エニシダはハルカの言葉にそんな意味が込められていることを知

らない。

「きつと楽しめるよ！　なんとたつてチャンピオンなんだからね！　つと、誰か来たようだ。じゃ、またね！」

「はい。また」

ふつつつと、ハルカの胸に込み上げてくる熱い何か。これは奴への怒りだろうか。それとも漸く殴れることへの喜びだろうか。

ふと冷静になる。

違う。これは、怒りでも、喜びでもない。

ハルカはトイレへ駆け込んだ。

「まもなく、バトルフロンティアへ到着致します。本日はタイドリツプ号にご乗船頂きありがとうございます。お降りの際には忘れ物がございませんよう……」

ベンチに横たわって過ごしていると、アナウンスが到着を知らせる。ノロノロと起き上がり、出口へ向かった。幸先のいい、とは言いがたいスタートだ。こんな調子で奴を殴れるのか。

首を振り、きあいを入れ直す。

そう、それとこれとは話が別。過程がどうあれ殴ればそれでいい。

港に降り立ち、ゲートをくぐる。

受け取ったパンフレットによれば、七つの施設でそれぞれに趣の異なるバトルが楽しめるようだ。

この七つのどこかでバトルをしている。それは確かだろう。だが、どこなのか。それがわからない。

ああ、あいつが好きそうなのはこの施設だな。

そういうのがわかれば良い。だが残念、奴が好きなのはきあいパンチだ。間違いない。そして言うだろう。

「俺はきあいパンチするだけだから、どんなルールでも関係ないさー！」

これほど思考を読みにくい奴もいない。少なくともハルカの交友関係にはこいつしか思い当たらない。そもそも交友関係がそんなに無いという事実には目を向けてはならない。

宛もなく歩きながらバトルドームの付近に差し掛かった時、立ち話しているグループの話が耳に入ってきた。

「え、お前あのバトル見逃したのかよ？」

「まじっペーよ。ほんとおつペーわ。見てないとかマジっペーな」

「そんなに凄かったのか？」

「おう、凄かったなんてもんじゃねえよ。見てないとかお前バトルフロンティア半分も楽しんでねえわ。恥を知れ」

「え、ごめん……で、どんな感じだったんだ?」

「あのきあいのコブシがな、なんと、決勝で、フーディン以外のポケモンを使いやがったんだよー!」

「な、なんだってー!!」

「対戦相手はバランスのいいカワモトでな」

「バランスのいいカワモトだって!? 流石のコブシも勝つことはできなかったんじゃないか?」

「できらあ! きあいのコブシに、きあいパンチに不可能はねえんだ!」

「え、ごめん」

「厳しいかと思われた対戦カードだったが……コブシのやつ、なんと、カワモト相手でも、きあいパンチで2タテを決めやがったんだ!」

「え!! きあいパンチでカワモトを!?!」

……どうやら、きあいパンチ野郎は見つかっただらしい。

バトルドームできあいパンチをしているようだ。しかも、それなりに支持されているらしい。

どうやらここにも私の味方はいないようだ。

まあ、いい。

とつと勝ち進んでぶん殴るだけだ。

そうしてハルカは超エキサイティンの殿堂に足を踏み入れた。

既にバトルドームにレンはいないことをハルカは知らない。

一方その頃、バトルアリーナ

走る。走る。走る。走る。

心拍数が増える。呼吸が早くなる。だからどうした。

呼吸が何だ。心拍数が何だ。ロマンティックですら止まらないと言うのにどうして足を止められようか。

襖が見えた。ラストスパートだ。歩幅を広げ、たどり着く。カ一杯襖を開ける。

「あ……えつと、お待たせ……」

「あ、いえ、俺も今来た所です」

先程までの勢いは何処へやら、一気にしおらしくなる。それは迎える側も同様で、ついでに先刻きあいパンチしていたばかりにも関わらず、この初々しさである。

「その……来てくれて、嬉しい、です」

「あ、その……俺も、コゴミさんと会えて、あ、いや、バトルできて、嬉しいですよ」

ルール上、フロンティアブレーションは規定の回数勝利を重ねたトレーナーとしか戦わない。というか、トレーナー側に挑戦権が与えられない。

そして、この少年とコゴミがバトルをするのは、最初のそれを除いても、かれこれ七回目。真つ当な神経を持つ者の所業でないことは言うまでもない。受付のおっさんもちよつと呆れた顔をするくらいなのだから間違いない。

「今度は……負けないよ?」

「今回も、勝ちます」

「それで、ね」

「?」

「今回、アタシが勝つたら、一つ、お願い、聞いてほしいな」

少年に走る圧倒的予感。ラブコメの香りが迸る。彼には頷く以外の道はない。

実の所、コゴミもまた、きあいパンチの使い手であった。と言っても、所謂一般に普及している方のきあいパンチの、だが。

二度目のバトル、すなわち、金のシンボルを掛けてのバトルでその事実がわかった時、レンは歓喜に震えた。そして思った。もつときあいパンチを知ってほしい。使っ

しい。ついでにお近づきになりたい。その一心で通い詰める日々であった。

そんな折にこの発言だ。気になる。どんなお願いをされるのだろう。別に嫌われてはいない気がする。「もう来ないで」ということはないだろう。ああ、気になる。わざと負けてしまうことがちよつと脳裏にちらつく程度には気になる。

「勿論、アタシが負けたら、その、一個、言うこと聞いてあげるから……」
この発言が幻聴でないと確認した時、彼の心から迷いはなくなつた。

「……負けちゃつたかあ……」

落ち込んだ様子で呟くコゴミ。

今回彼女は、自身が勝つたら、レンにきあいパンチを教えて貰うつもりでいた。教えて貰うというのは、勿論ここ、アリーナではない場所で。つまり、二人でどこか別の場所で会う約束を取り付けるつもりだった。

つまり、きあいパンチデートのお誘いをしたかつたのだ。

だが、彼女は負けてしまった。きあいパンチデートは遠退いたのである。

まあ、それはそれ。コゴミはバトルの前に言った。「自分が負けたら一つ言うことを

聞く」と。一体どんなことを言われるのだろうか。きあいパンチ（意味深）だろうか。きあいパンチ（自主規制）だろうか。きあいパンチ（絶望）だろうか。コゴミも一応思春期である。様々な想像が頭に浮かぶ。どんなことであれ満更でもないような気がしないでもないが、やっぱり少し怖い気もする。

「じゃあ……」

ついに、その時が来た。

「今度は……コゴミさんが俺に会いに来て下さい」

勝った。コゴミは自分の運命力に感謝した。が、やはり気恥ずかしさから赤面した。

「あ……やっぱり今のなしで」

コゴミは運命力なんて信じないと決めた。

「お忙しいでしょうし、かわりに、その、俺のこと、レンって、呼んで貰いたいなあ、と」
振り返ってみると、コゴミは少年のことを一度も名前で呼んだことはなかった。成る程、これはこれで悪くない。

だが、物足りなかった。

こちらは勇気を出したのだ。であれば、もつと踏み込んで来るべきだ。しかし、それを言ってしまうのも無粋であろう。そも、別にそれほど忙しくはない。気持ちは嬉しいが、無用な気遣いであった。

どうするか。考えろ。ここで退くのはなんかあれだ。踏み出した一步を無駄にしてはならない。

コゴミは決意で満たされた。あるいは、これもまた、きあいであろうか。

「会いに、行くから……」

「え……？」

「決めた。アタシ、会いに行くから」

「ええ!!」

「だから、待っててね……レン」

この時、レンの胸に圧倒的トウUNKが去来したのは言うまでもない。きあいパンチが無ければ即死だった。

「はい……」

「じゃあ……その……またね」

我に返ったコゴミは、顔を赤くしながら逃げるように走っていった。

その場に残されたのはレンと、審判及び判定員のおっさん数名のみ。

「おっさんどうしよう! コゴミさん来るって!!」

「落ち着かれよレン殿! まずは深呼吸をするのです!」

「すーはーはーはー」

「そしてとつとと帰って寝るのです」

「オツケー！」

レンはそのまま走り去る。

遠ざかる足音と道場には中年男性の溜め息が響いていた。

翌日、期待ときあいので胸がいつぱいで眠れなかったレンは再びアリーナにやって来た。コゴミは会いに来るとは言っていたがいつ来るとかどこに来るとかは言っていなかった。つまり、やはり自分が会いに行くしかない。そう判断してのことだった。

ところが、どうしたことだろう。アリーナは閉まっていた。

貼り紙がしてある。そこには「フロンティアブレーン不在につき、臨時休業」とあった。

フロンティアブレーン不在、すなわちコゴミはここにはいないのだ。

「いったい……どこに……？」

まさか本当に会いに来ようとしているのか？ 自分はどこにいても伝えていないのに？ コゴミさんはどうやって会いに来るつもりだったんだ？

普通であれば、その計画性のなさにショックを受けるところであろうが、生憎、この少年はきあいパンチに染まっている。彼がその時思っていたのは、「流石コゴミさん！

「やっぱりきあいが増えている！」であり、微塵もマイナスな感情はなかった。しかし、どうやってコゴミに会うか。その点は何も解決していない。

その問題に対してレンが答えを出すのに要したのは僅か二秒。そう、答えとはつまり、きあいパンチであった。ちなみに、二秒と言う時間は、フリーデンで換算すると、その場に適した5000通りのきあいパンチを算出するのに掛かる時間である。知能指数5000は伊達ではなかった。

まあ、それはそれとして、レンはギャラドスを繰り出した。そう、初の有人飛行を成し遂げたコイキングの進化したポケモンである。

「ギャラドス、きあいパンチ！」

翼が無くとも飛べる。彼らは何度でもそれを示すのである。

一方のコゴミは、会いに行くと言ってから飛び出した勢いそのままに、ベッドに飛び込んで足をバタバタさせていた。頭に浮かんでは消えるきあいパンチ（意味深）。そして気付く。空が明るい。足をバタバタさせて一夜を過ごすなど、初めてのことであった。

眠い。だが、時計を見るともう午前10時。今から寝るのは些か遅い。出掛けなけれ

ば。

さて、何だかんだ準備をしていたら既に時間は昼近く。愕然とするコゴミ。未だ自分は部屋から出てすらいらないではないか。

家を飛び出し、駆け出して、ふと我に帰る。

そう言えば、肝心のレンは何処にいるのか。何も確認していなかった。

なんとという無謀、なんとという無能。知性の欠片もない猪突猛進加減か。これならバトルアリーナでレンが勝ち進むのを待つ方がマシである。コゴミの落胆は計り知れない。そんな時だ。

「——あああん！」

声が聞こえた。

辺りを見回す。心当たりのある人物はいない。

「コゴミさあああああああん!!」

間違いない、コゴミを呼んでいた。

辺りがざわつく。皆、空を指差していた。

「あれを見るろ！」

「え、なんだって？」

「親方！ 空からギャラドスが！」

「何!? ギャラドス!？」

「ギャラドスう……ですかねえ……」

「たまげたなあ」

空からギャラドス? そんな馬鹿げた話があるものか。訝しがりながらコゴミも空を見上げた。思っていたよりギャラドスだった。

どうやらマジモンのギャラドスらしい。そんな馬鹿な。目の前で見せられても尚、信じがたい光景というものもある。

「コゴミさああああああん!!」

あろうことか、コゴミを呼ぶ声はギャラドスから聞こえるではないか。聞き覚えのある声だ。まさか、いや、考えてみれば当然のことだった。この声は……。

「レエエエエン!!」

ギャラドスが迫る。デカイ。まともに当たれば無事では済まないだろう。

だが、コゴミは前に踏み出す。

そして、衝突しようとしたその時、ギャラドスが赤い光に包まれて姿を消した。光が消えた後、そこに残っていたのは、抱き締めあう一組の少年少女であった。

「な、ナイスキャッチですコゴミさん」

「と、当然よ……うん」

正直、偶然の賜物であった。彼女は口が裂けても言わないが。いや、そもそも言えるような状態ではなかった。

どさくさに紛れて、と言うか、気付いたら密着していたのである。心臓がドツタンバツタン大騒ぎだ。フロンティアブレーションでなければキュン死しかねない。

レンもレンとて気が動転していた。が、きあいパンチに關しては一家言持っているだけあって、立ち直りも早かった。故、口を開く。

「お迎えに上がりました」

「迎え……？ あつ！ ご、ごめんね。アタシ、会いに行くつて言ったのに」

「いいんですよ。今、こうして会えたんですから」

「でも……」

「そりよりも！ これからどうします？」

「えっ……そうね……」

ここまでノープランである。勿論、ここからもノープランだ。

ではどうするか。考えようとするがまとまらない。当然だ。二人の体勢は先程のままである。しかし折角の機会。このまま離れるのも勿体無い。時間だけが過ぎていく。それはそれで悪くないと思わなくもないのが困りどころであった。

そして唐突に閃く最適解。

「とっておきのきあいパンチが見たいな！」

ゴゴミは違和感を抱いていたのだ。バトルの際使われるそれが、レンの、レンのポケモン達の全力のきあいパンチではないのではないかと。そして同時に思うのだ。抑えてあれだとしたら全力ならどれだけ凄いのだろうか。

レンの側からすると、別に舐めプとかそういうことではない。レンなりに全力で楽しもうとしていたのだ。単純にローブシンに負けはないというだけの話。結果が見えていては意味がなかったのだ。だからこそ全力は出さなかった。

というわけでゴゴミはレンの全力を見ることができ、レンはレンで久方の全力である。気持ちいいに決まっている。乗らない筈がなかった。

「任せて下さい！……ローブシン！」

レンが呼び出したのは、それまでゴゴミが見たことのないポケモンであった。これ之余計に確信が持てた。このポケモンにきあいパンチを使われたら、それはもう、勝てないだろう。

レンを抱き締める腕に力が籠る。レンもまた、より強く抱き締め返した。

カントー地方に居るピクシーが耳を塞ぎなくなる程二人の心臓は高鳴っていた。

ギヤラドスの下りから周囲の人が二人のやり取りを見守っていたとしても、バトルドームでハルカが金シンボルを獲得していたとしても、二人には関係がなかった。若氣

の至りとはかくも恐ろしいものか。あるいはこれもまたきあいの為せる業か。それはともかく、遂に指示が下される。

「ローブシン……きあいパンチ！」

誰もが、そのポケモンに注目していた。誰もが、一挙一動を見逃すまいとしていた。だが、それでも尚、捉えることは叶わない。既に拳は振り抜かれていた。

遅れて音がやって来る。拳圧で周囲の人々はひっくり返り転がっていった。

だが、それだけでは終わらなかつた。拳が振るわれた先の空間が揺らいでいた。確かに気温は高い。だが、陽炎などではない。

その揺らめきは徐々に大きくなり、遂に、空に穴が開いた。

——
誰も悩みはあるものだ。

きあいパンチができないだとか、きあいパンチがきあいパンチじゃないだとか、いつの間にかきあいパンチだと錯覚していたとか、きあいパンチが更新できないとか……。そう、誰だつて悩む。

知能指数5000のフリーデンであつてもそれは変わらない。寧ろ、知能指数5000であるからこそ、有象無象の悩みよりも重く、深刻な悩みであつた。

フリーデンの悩み、それは……

自身のきあいパンチに向上が見られないこと。

フロンティアに来て何度もスタメンで戦った。何度もきあいパンチしてきた。そして勝ってきた。

だが、戦えば戦う程に、勝てば勝つ程に、自分の中に不満が溜まっていく。自分のきあいパンチはこんなものなのか？　ここで満足していいのかな？

疑問型で思い浮かべはするものの、答えは決まっていた。良い筈がないのだ。

そして、遂に時が来た。

いつものようにフリーデインはモンスターボールの中から主の奇行を眺めていた。

ギヤラドスに乗り、最近通いつめている女の元に向かっていた。そして女を発見、ギヤラドスの落下の勢いもそのままに女に抱き着いた。そこはきあいパンチだろうと思わなくてもないフリーデインであったが、静観を続ける。そこはきあいパンチだろうと女がねだったのは「とっておきのきあいパンチ」

普段ならフリーデインが飛び出すのが最近伸び悩んでいるし、何より一番きあいパンチが凄いのはローブシンである。故に、更に静観を続ける。

拳が振るわれる。常人や常ポケなら目で追うことすら不可能であろうが、知能指数5000のこの目をもってすれば造作もないことであった。

が、フリーデインは驚愕する。

空に穴が開いたのだ。凡そ強力なきあいパンチと言えど、空間にまで影響を及ぼすとは思っていなかった。

フリーデインは確信する。自分はまだ先へ行くことができる。

そして、サイコキネシスを使った。モンスターボールの中からは言え、人二人くらいなら造作もない。

更なるきあいパンチの為、新たな環境に身を置こう。

空に開いた穴を見て、そんなことを思い付く。知能指数5000とはなんと凄まじいのか。

この穴が何処に繋がっているのか。そんなことは誰にもわからない。確実に言えるのは一つ。

フリーデインの戦いはこれからだ。

え、あの時ここで何があったのかですって？

ええと、確か、まずギャラドスが降ってきて……

はい、間違いありません。ギャラドスでした。思わず三度見したのでよく覚えています。

で、下に女の子が居て、ギャラドスがぶつかると！って思った瞬間にギャラドスが消えて、その女の子に男の子が抱き着いてくるくる回ってましたね。ええ、結構な勢いでしたから、まあ、回るでしょう。映画のワンシーンみたいで凄かったです。

ええと、それで……そう、暫く抱き合ってたまま何か喋ってて、男の子の方が、見たことのないポケモン……うーん、下半身の貧弱なゴリキーみたいな……。で、そのポケモンがいつの間にか拳を振るってて、ギャラリーみんな拳圧で吹っ飛ばされて……ええ、飛ばされました。凄かったですよ。空に穴が開く位って言ったら伝わりますかね？
まあ、ホントに開いちやっただんですけど。

はい。空に穴が。

で、その時不思議なことが起こりまして。

何かその、男の子と女の子が宙に浮いて、穴の中に入って行っただんですよ。

で、そのあと穴が閉じました。

うーん、まあ、心配っちゃ心配ですけど……まあ、大丈夫じゃないですかね？

なんか、きあい入ってる顔してたんで

彼女はこの事実をまだ知らない。

アローラ編

2 1

会場一杯に歓声が響く。

私は今、夢にまで見たバトルを目の当たりにしようとしている。

チケットを取ってくれたパパに感謝だ。仕事が抜けられないとかで悔しがっていた。その分私がしっかり見てバトルの様子を伝えないと！

「さあ！ 今年も始まりました、ポケモンリーグカントー大会エキシビジョンマッチ!!
最初のバトルは……」

バーンと派手な効果音と共にディスプレイにバトル参加者が表示される。表示された名前がまた観客を沸き立たせた。

「現カントーチャンピオン、ドラゴン使いワタル！ 対するは、仕事よりもきあいパンチで有名、お騒がせ博士コブシだあ！」

司会の紹介と共に両選手が入場する。

「キヤー、ワタル様ー!!」

「ウオオオオオ！」

「本物だあ！」

「きあいパンチの人だ！」

「すげー！」

どちらに対しても声援が飛ぶ。それはそうだ。どちらも有名で、どちらも一定の人気があるのだ。

チャンピオンワタルは言わずもがな。十年くらい前に起こったチャンピオン交代事件、グリーン三日天下事件が落ち着いて以後、何だかんだずっとチャンピオンとして君臨している。ファンクラブもある。私は会員ではないけど。

一方、コブシ博士も割と有名で、一ヶ所に留まっただけではないらしいが各地で色々な活動をしてニュースで取り上げられたり、たまに普通に本人がテレビに出たりする。何の研究をしている人なのか知ってる人は少ないと思う。よくテレビに出るきあいパンチの人くらいの認識ではないだろうか。

ちなみに私は彼のファンである。

カントー大会が行われる度にこの二人は激突している。そして、なんだかんだ決着がつかない。

「俺達の戦いも今回で十回目だ」

スタッフからマイクを手渡され、ワタルさんが話始めた。

「いい加減、一回くらい決着をつけたいと思う」

「……」

「何しろ俺達の因縁はもう10年になる。小競り合いを含めても決着がつかないなんてのはおかしい話だよな？」

「……」

「どうしたんだ？ 珍しいじゃないか。ここまで無言とは」

「……ワタルさん」

「なんだ？」

「多分、ここのギャラリーの多くが俺の本業を忘れてるだろうし、俺自身忘れることがあるんだが、俺もポケモン博士なんだよ」

そう、コブシ博士はポケモン博士なのである。きあいパンチ博士ではないのだ。混同されがちだけど。

「……それで？」

「ちよつと気づいたことがあるんだよね」

「へえ」

「話しても？」

「構わないさ。この時間も含めてのエキシビジョンマッチだからね」

「オーケイ」

そう許可を得てから前に踏み出すコブシ博士。そして、ワタルさんの方に向き直り話し始めた。

「俺は、ずっと疑問に思っていたことがある。ワタルさんには聞いたことはなかったけどね……」

「……」

「ワタルさん……何故あなたはガブリアスやフライゴンを使わないんだ？」

答えを待つことなくコブシ博士は詰め寄る。

「何故、ギャラドスやプテラのような、厳密にはドラゴンと言えないポケモン達を頑なに使い続けているんだ？」

「愛着、友情、絆……ああ、あなたとポケモン達には確かな繋がりがあろう。俺だってそうだ。チャンピオンであるあなたがそうでない筈はない」

「あなたはドラゴン使いを名乗っている。生半可な覚悟と実力じゃ、そんなのは名乗れないし、誰も信じない。」

「だからきつと、あなたのドラゴンポケモンへの愛に嘘はないんだろう」

「だが、あなたが今のポケモン達を使い続けている理由はそれだけじゃないだろうか？」

「……何が言いたい？」

「……あなたは、ドラゴン使いの皮を被った、飛行タイプ使いだ！」

会場が静まり返る。誰もがコブシ博士の発言に啞然としているのだ。

私自身驚いている。ワタルさんと言えばドラゴン使いと言えば名前が上がらないなんてことはまずあり得ないくらいに名の知れたドラゴン使いだ。それが、実は、飛行タイプ好き……？ 俄には信じがたいことだ。

会場がざわつきだす。

言われてみれば確かにそうなのかもしれない。現在のワタルさんの手持ちとして知られているポケモンは、ギャラドス、プテラ、リザードン、カイリユウ、カイリユウ、カイリユウ。どのポケモンにも飛行タイプが入っているのに対して、ドラゴンタイプは、三体いるとは言え、カイリユウだけだ。コブシ博士の指摘も一理あるのかもしれない。

「……た、大した推理だ。ポケモン博士なんて辞めて小説家になってもなったらどうだ？」

「で、答えは？」

「そ、そんなこと決まっているだろう。俺は、ドラゴン使いのワタル。看板に偽りはない！」

「なら「さあ、レン！ バトルを始めようじゃないか！」いやだから、「始めようじゃないか！ お客さんも待つてるぜ！」……まあいいか」

「えー、よろしいんですかね？」

司会の人も困惑気味だ。私たちもそうだけど。

「ああ!!」

「どうぞ」

「では……試合開始!!」

「行け、カイリユー!」

「ローブシン!」

「破壊光線!」「きあいパンチ!」

ワタルさんとコブシ博士は、いきなり自身のエースとも言えるポケモンを繰り出し、十八番とも代名詞とも言える技を指示した。

カイリユーの口から放たれる巨大な光線。ワタルさんの破壊光線と言えばカントージョウト辺りで知らない人はいない。一時期は何処かの町で煙が上がれば火事より先にワタルさんの破壊光線が疑われる程だった。

コブシ博士のロープシンも負けていない。目にも止まらぬ拳の一閃と、そこから生じる超常現象は、動画サイトなどでまとめが作られたりする程凄い。きつと今日の夜には新しい動画が上がっているのだろう。

閑話休題。

ぼんやりしている間にもバトルは進んでいる。

既に十回目の激突……常人には真似できないバトルがここにある。

反動のある大技である破壊光線をこうも連発できる人が他に居るだろうか。馬鹿げた威力のきあいパンチを目にも止まらぬ速度で放てる人が他に居るだろうか。少なくとも私はこの人たち以外には知らない。

「撃ち続けてれば反動なんて関係ない！」

「この程度じゃあ破壊されんよ!!」

うん、真似できない。

「なっ……!! きあいパンチを踏み台に!」

「破壊光線の軌道を、変えた……?」

「また軌道が……いや、これは自ら曲げたのか!」

「きあいパンチを壁で反射させるなんて……」

「出た! ローリング破壊光線だ!」

「どういうことだ……！ きあいパンチが……3発？」
ギャラーリーもついていけない。

だが、楽しい。いつも画面の向こうで見ていた。画面越しにも伝わっていた熱気、パワー、あと戦闘の余波……！ 来てよかったと心から言える。

けど、このバトルもそろそろ終わりそうだ。

「きあいパンチ！」「破壊光線！」

激突。余波が広がる。と、同時に司会からアナウンスが入った。

「会場が限界です！ 今回はここまででお願いします！」

「なんだまたか」

「これは真剣に場所変えることを検討すべきなのでは？」

「そうだなあ……ま、来年考えよう」

毎回こうなのだ。決着がつくより先に会場に限界が来る。勿論、あの人たちは会場がどうなろうとバトルを続けられるんだろうけど、安全上の配慮で止めてくれている。私も自分で自分の身を守るようになれば全力のバトルを見れるのだろうか。

過去の記録映像を見る限り、どちらもまだまだ本気ではない。お互いが本気になったら一体どれだけ凄いんだろう。今回生で見ると当たって、きつと映像の時より満足できると思っていたが、逆だった。もつと見ていたい。もつと知りたい。そんな気持ちが強

まるばかりだった。

パパへのお土産（コブシ博士が時々被っている不思議な帽子をデフォルメしたもの。てっぺんを押すと「じえるるつぶ」と音がする。コブシ博士監修）を買ってから会場を後にした。

「凄かったね。もうほんと、他に言葉が出てこないよ」

「ずっと見たがってたもの……来たかいがあったわね」

「うん！」

「カントー最後の思い出としては最高なんじゃない？」

「バッチリだよ」

私は明日、カントーを出ていく。左遷とかではないらしいけど、パパの仕事の都合だ。元々の予定ではカントーでトレーナーデビューするところだったが、アローラでやることになるだろう。

こつちに友達もいるし、残念と言えば残念だけど、悔いはない。むしろ前向きな気持ちで一杯だ。それもこれもきあいパンチのおかげだね。

でも日記には寂しくて泣いちゃったとか書いてこう。その方が可愛いよねたぶん。

諸君、俺だ。そう、俺だ。所謂、俺だ。

誰だお前はって？ 俺だよ。

まあ茶番はこれくらいにして、どうもコブシです。本日ワタルさんとのバトルを行い、飯に行つて、その足で仕事に向かいます。多忙すぎてクサイハナ。

ところで、皆さんにとって、柱とは何だろうか？

建築物の一部？

ただの棒？

或いは仕事道具？

まあ皆さんにとつてどうなのかつてのは割とどうでもいい。ここからが本題。

ローブシンにとつて柱つてなんだろうか。

考えたことない人が多いだろう。何、恥じることはない。皆の当たり前を疑うことが今の俺の仕事なのだから。

とはいえ、俺の著作を読んだことある人なら大体予想はつくのではないだろうか。

そう、柱とは、拳である。

ああ、驚く顔が目には浮かぶね。「きあいじゃねーのか！」とツッコむ声が聞こえそう
だ。

まあ、聞いてほしい。

ローブシンをお持ちのトレーナー諸君。ローブシンにきあいパンチじゃないにしても何かしら、例えば冷凍パンチなんかを使わせたことがあるだろう。その時、ローブシンはどういう動きをしていた？

そう、柱を振るっていた筈だ。

トレーナーはパンチを指示したにも関わらず、振られるのは柱。これはどういうことか。

ローブシンが言うことを聞いていない。なんてことはあり得ない。私含め、ごく一般的なトレーナーであればポケモンとの関係は良好だろう。つまり、ローブシンたちは何も悪気はなく、寧ろ、それを当然として、柱を振るっているのである。

つまりこれは、ローブシンにとって柱こそが拳であることの証明に他ならない。

道具とは人の器官の延長である。例えば箒は、掃き掃除に特化させた手の延長であるし、車や自転車は足の延長だ。基本的にあらゆる物事は道具が無くとも何とかかなりはす

る。だがあると便利。それが道具だ。そしてその道のプロともなれば手足同然に道具を扱うだろう。

ローブシンと言えば拳のプロと言って良い。

そしてローブシンは柱を使って殴る。柱とは拳の延長である。

つまり、柱とは拳である。

であるならば当然、きあいパンチに柱を使ったとて何らおかしくはない。

そう、柱とは拳であり、同様の理由から、柱とはきあいパンチでもあるのだ。

さて、本題に戻ろう。なぜ俺がローブシンの柱の話を開始したのか。

それは、今からローブシンの柱を使うから。

なぜ柱とはきあいパンチであることを証明したのか。

柱を使ってきあいパンチをするから。

コイキングでさえ空を飛ぶ。

きあいパンチを使って空を飛ぶ。

であるならば、同じきあいパンチなのだ。

柱で飛んだって良いじゃないか。きあいパンチだもの。

「ローブシン、きあいパンチ！」

「……レンから？」

郵便受けに届いた封筒。見知った人物からのそれに首を傾げる。別にメールでも良
いだろうに。

開けてみると、飛行機の子チケットと手紙が入っていた。素早く目を通す。

「……アローラ、か」

最近観光地として人気のアローラ地方。そこへ仕事で行くから一緒にどうかという
旨が書かれていた。

「また急な……ま、行くしかないよね。一応助手だし」

緩む頬を隠すこともなく、キャリアバッグを引つ張り出す。今にも鼻歌を歌いだしそ
うな様子だ。何しろ久しぶりの遠出だ。旅をしていた頃を思い出しつつ荷物をつめて
いく。

空港に着いた。忘れ物はない。だが敢えて言うなら連れがいない。彼女は同じ飛行機でアローラへ行くものだと思うている。だから機内で色々相談すれば良からうと予定も何も決めてはいない。そも、彼女からすれば急に突いたアローラ行きであるので仕方ないことではあるが。

しかし待てど暮らせど連れは来ない。仕方なく、自分だけで飛行機に乗り込んだ。中に入ると席には既に連れがいた、なんてことはなく、そのまま離陸と相成った。

「何やってんのよ……」

窓の外を眺めながら一人呟く。もつとこう、仕事とは言え、観光地に行くのだから、予定をちゃんと立てたかったし、同じ場所に行くというのに連れがいないというのはどういうことか。

と、窓の外を何かが横切った。

鳥ポケモン……？ いや、この高さを飛行するポケモンはほとんどいない。しかし、だとしたら……？

何が通ったのかと目を凝らして見ていると、まだ何かが通っていった。

だが、今回は見逃していない。

あれは、筋肉だった。もつと言うと筋肉と柱だった。

普通の人が見たら目を疑うし、言っても信じてはもらえまい。新種のポケモンを見た

とかの方がよっぽど信じられるだろう。だが、彼女は知っている。こういうことをしてもおかしくない輩をよく知っている。

とすれば、自ずと一つ目の飛行物体の正体も想像できよう。

彼女は呆れて笑うしかなかった。

「いいぞイワンコ、もつとだ！ もつと思いつきりくるんだ！」

男の声に応え、子犬のような姿をしたポケモン、イワンコが全力でぶつかっていく。イワンコはまだ進化を残した言ってみるなら未熟なポケモンだ。しかし、ポケモンという種族の力を侮ってはならない。イワンコの体当たりを受け、男は吹っ飛ばされた。

「ナイスだイワンコ！ 君の全力、伝わったぜ！」

彼はククイ。ポケモン博士である。

主にポケモンの技の研究をしている。故に、自身で技を受けたりする。吹っ飛ばされるなど日常茶飯事、当然研究所も頑丈に作られている。イワンコの体当たりで飛ばされてぶつかっても、何ともないのだ。

早速今受けた技を記録しようとデスクに向かうククイ。椅子に座ろうとしたその時、外で轟音がした。

「なんだ今の!？」

慌てて外に出ると、暫く前から研究所で預かっている少女、リーリエが唾然とした表情で砂浜を見ていた。リーリエはお嬢様然とした淑やかな少女。そんな彼女がこんな表情をしているとは……。

「リーリエ、どうしたん……んんん?」

見ると、砂浜に大きなクレーターが二つ出来ていた。当然、今朝まではなかったものだ。

そしてクレーターから声が聞こえる。

「……うーん、これは……俺には無理だわ。ごめんローブシン。手伝ってくれ」

その声に反応し、のっそりと顔を覗かせたのは全身砂まみれで片方だけ柱を持ったローブシンだった。彼? はそのままクレーターを出て、声が出た方のクレーターに降りていく。

「よし……せーのっ……!」

「うん、抜けたな。お疲れ……じゃあ上がろうか」

「どうやら声の主が上がってくるらしい。」

「ちよっ、足場崩れるじゃん。お前どうやって上ったの?」

「あ、成る程。じゃあ悪いけど背中借りるわ」

「よっ……と」

クレーターの端に降り立ったのは、奇妙な帽子を被り、アローラシャツの上から白衣を羽織った男だった。目が合う。

「あ、どーも」

「どーも……」

「んー？ あ、ククイ博士ですね。こんにちは、じゃないやアローラ！ お招きいただきありがとうございます。コブシ・レンです。暫くの間よろしくお願いいたします！」

頭を下げた後、満面の笑みで顔を上げる男、コブシ。

「……あ、アローラ！ ククイです。よろしくお願いします。こっちは助手のリーリエです」

「り、リーリエと申します。よろしく、お願いします……」

ぎこちない挨拶、困惑した表情。

帽子がじえるるつぷと笑った気がした。

22

□月○日

俺はきあいパンチ親父のコブシ・レン。

幼なじみでパートナーのローブシンとポケモンリーグに遊びに来ていたが、破壊光線厨の男が書類と格闘しているのを目撃した。

仕事に茶々入れるのに夢中になっていた俺は、背後から近付くもう一人の男（ハガネール使いの筋肉マン）に気付かなかった。

俺はその男につまみ出され、気がついてたら……きあいパンチしてしまっていた!!

……いつも通りだったわ。

つまみ出された後のことを話そう。

詳細は省くが、新しくポケモンリーグができるらしい。

で、その視察だかなんだか、まあ、要は行って見てこいって話だった。

アローラ地方まで。

観光地だぜ。やったぜ。

ついでに言うところの世界に落ちたのはアローラ地方の小島だったからある意味俺の第二の故郷とも言える。いや言わないかもしれない。どっちでもいいや。

軽はずみだったとは思うけど、バカンスだと思えば悪くない。勿論仕事はちゃんとする。

アローラ地方はいいなあ。空は青い。海も青い。リーリエちゃんは白い。帽子ちゃんも白い。

実にバカンスって感じだよ。クワイ博士は茶色かった。この茶色さも「ザ・日焼け!!」って感じで南国感を煽るよね。

俺はいつも通り「ザ・きあいパンチ!!」って感じだけど。

こんな青空の下できあいパンチをしたらきつとさぞかし気持ちいいだろう。

それはそれとしてクワイ博士の格好ってあれだよ。あの、ほら、あれだよ。……出てこない。

あの格好の意図するところはなんだろう？

技の研究してる人だからやっぱり技は自分の肌で直に受けた方がいいってことか？

或いは技を受ける中で服が破れてしまうから着ていないのか？

いや、だとすると白衣を着ているのはおかしい。服が破れるなら白衣も破れて然るべきだ。ついでに言うとも脱いだ方が理に叶っている筈だ。……まさか白衣は特別な素材で出来ているのか……？ いや、そんな便利な白衣があるならもつと流行ったっておかしくないはず。ならどうして……？

破れてしまおうとしても白衣を着るのだとすると……そうか、研究者としてのアイデンティティか。俺だって博士として仕事しだしてからは基本白衣を着ている。

うん。博士だからな。当然だ（思考の放棄）

まあ、ククイ博士の格好に關しての考察は置いておいて……挨拶の後、コゴミさんを迎へに行った訳だが、なんか弟子ができた。

俺のファンらしい。いるんだねそういう人。

俺が悪ふざけでグッズ化した帽子ちゃん型の帽子を持っていた。たぶん結構ガチな人だ。

美少女なのね。勿体無いね。アイドルにキヤーキヤー言ってる方が似合いそうなんだけど。

第一声が「きあいパンチお願いします!!」とはね。その後のことも含めびつくりした。サインでも握手でも写真でもなくきあいパンチな辺り相当なものだよ。率直に言つて頭おかしいと思う（褒め言葉）。

カントーから越してきたばかりらしい。なんと、こないだのワタルさんとのドンパチも見に行つたそうだ。

もうすぐトレーナーデビューするとのこと。初めからきあいパンチに触れられるなんて将来有望だよ。今後に期待しよう。

「ここが私の、アナザースカイ！」

「……？」

「言つてみたかったです。失礼しました。立ち話もなんですし、座りましょうか」

と言つて、砂浜に腰を下ろす不審者、コブシ。

「いやいや、とりあえず中にどうぞ」

と言って、コブシを小屋の中に案内するのが、現地の博士であり、今回のコブシがさせられる仕事の元凶であるククイ。

そして、この状況に困惑したまま固まっているのが、どこぞの財団のご令嬢であらせられるリーリエである。

「さて、改めて自己紹介をさせてもらいますね。俺はコブシ・レン。短パン小僧兼きあいパンチ親父兼ポケモントレーナー兼ポケモン博士をやっています。俺の方が年下なのでどうぞタメ口でお願いします」

「肩書きが……いや、だからこそ色んな所で名前を聞くのかな？ 堅苦しいのは苦手だから、そうさせてもらうよ」

所変わってククイ博士の研究所。

シンプルなテーブルを囲むのは上半身裸の上に白衣を着たメガネの男性、全体的に白

い少女、不思議な帽子を被りアローラシャツの上から白衣を羽織った長ズボンの男性。端から見ても奇妙な組み合わせであった。

「今回は遠いところをわざわざ来てくれてありがとう。仕事の説明をさせてもらっても？」

「ええ、勿論ですよ」

と、衝撃的な登場とよくわからない自己紹介ではあったものの、ここまでなら同席していたリーリエも平気であった。ここまでなら。

「成る程、論文に書いてあったのはそういうことか！ だから柱でここまで来たんだね？」

「ええ、そうです。やはり実物を見たらよく分かるでしょう？」

「わかるわかる。確かにきあいつて凄い。研究するだけの価値はあるよ。……ん？ と
いうことは、うちのイワンコもきあいつパンチが……」

「そういうことです」

「マジかよ……やったぜ」

「そういうものです」

「じえるるっぷ」

いつの間にやら研究談義が始まっていた。仕事の話はどうなったのか。リーリエは頭は悪くない。寧ろ良い方である。が、しかし、研究者の会話に着いていける程ではなかった。

つまり何を言ってるのかわからない。

正直この場を離れたかった。しかし丁度いい言い訳も出てこない。

「きあいパンチってのは……」

「ええ、きあいパンチは……」

二人の間で絶えず飛び交う「きあいパンチ」というワード。これがリーリエの思考を妨げる。何故この大人達はきあいパンチなどというワードでここまで盛り上がれるのだろうか？ 当たり前のように繰り返されるものだから、ついにリーリエは「きあいパン

ちってなんでしたっけ？」という哲学的な問いに至っていた。

「ところでリーリエちゃん」

「は、はい！」

「ククイ博士の助手はどのくらいやってるの？」

「え、と……3ヶ月くらいです」

「へええ、じゃあまだまだ新人さんなんだね！」

「はい……まだまだ博士のお力にはなれていません」

「そんなことないよリーリエ。だいぶ助かってる」

「羨ましいですねククイ博士。こんな可愛い子を助手にしちゃって」

「まあね。存分に羨ましがってよ……あ、そういえば、コブシくんの助手は？　いないの？」

「いますいます！　あ、そういやそろそろ着く頃ですかね？　チケット送つといたんで」

「そうだねえ。元々の予定ではこのくらいの時間に君を迎えに行く筈だったんだけど

……」

「まあ、きあいパンチですから」

「違うないね。……じゃあ、助手さんを迎えに行くかい？」

「そうしましよかね。案内をお願いできますか？」

「オーケー、任せてくれ。じゃありーりエ、すまないけど留守番を頼むよ」

「はい、わかりました」

そうして、変人二人は出掛けていった。

一人残されたリーリエは、一つため息をついた。何とも言えない疲労感が彼女を襲っていた。

コブシ博士の去り際、帽子が「じえるるつぶ」と笑った気がした。

いよいよ疲れているらしい。

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

着いて早々空港内のお土産屋さんに行つてしまつたお母さんを待つ私は、椅子に座つてコブシ博士とお揃いの帽子、略してコブ子を押して暇を潰していた。

一応、お父さんのお土産として買ったものだったが、結局私が欲しくなつて貰つてしまつたのだ。

ファンつてそういうものだよね。そうに違いない。

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「べのめのん」

「ええっ!？」

今絶対いつもと違う音が出た！ 何だ「べのめのん」つて！

シークレットボイス的なの!? 説明書にはそんなこと書いてなかつたけど……。

その後何度も押すが「べのめのん」とは鳴らない。

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「じえるるつぶ」

「駄目だ……」

「お困りみたいね」

「え……？」

「その帽子……コブシ博士とお揃いの帽子 略してコブ子でしょ？」

「は、はい。お姉さん、知ってるんですか？」

「知ってるわよ」

「凄いい、こんな、キャリアアウーマンみたいな感じのなんか意識高そうなお姉さんでもコブ子を知ってるんだ。コブ子すごい。」

「強めに押すと良いわ。そう、それこそきあいパンチみたいに」

「え、きあいパンチみたいになって言われても……」

「難しかった？　ちよつと借りるわ……こう、よ」

お姉さんが「こう」と言い終わる頃には、いや、言い終わるよりも早く、その拳がコブ子に突き刺さっていた。

「べのめのん」

「おおー！」

思わず声が出た。シークレットボイスが出たことに、そして、お姉さんの拳の速さと重さに。

きあいパンチの人ことコブシ博士のファンとして、目の前で繰り出されたパンチの良し悪しの判断はできて当然だ。

その目で見て、驚いた。そのパンチは凄く凄かったのだ。自分の語彙力のなさを実感せざるを得ない。

「凄いですねお姉さん！」

「ふふふ、しかも通常音声とは違ってこうすると」

またお姉さんの拳が消える。

「ベベベベベのめのん」

「おおおお!! すごいすごい!!」

捉えることはできなかったが、音から察するに連続でパンチを叩き込んだみたいだ。

「でしよう?」

「いえ、そうではなくて、さっきのパンチです!」

「え、そっち?」

「はい! いや勿論コブ子もいいけど! お姉さんのパンチ凄いですよ!! 今の何回入れたんですか?」

「ええつと……五回くらいかな?」

「つべーですよお姉さん! 弟子にしてほしいくらいです!」

「そ、そうなの……」

「そうです!」

なんか引かれてる？ あ、しまった！ 見ず知らずの小娘からこんな勢いで話されたら引いちゃうよね！

「あ、ごめんなさい。私はミズキって言います！ カントーから引つ越してきました！」
「え……あら、そうなの。アタシは「あ、いたいた」

なんか、アローラシャツの上に白衣来て、さらにコブ子被ってサングラスかけてる男の人と、上半身裸の上に白衣きてる人の二人組が近づいてきた。

「探しましたよ。助手なんだからしっかりしてくれないと」

「は？ いやいや、普通、飛行機でいくじゃん。チケット送ってきたんだからさ、一緒に行くって思うじゃん」

「そんなこと一言も手紙には書いてなかったでしょ？」

「そうだけど……一緒に行きかけた……。どこ行こうか、とかさ、何しようか、とかさ、話したかった……」

「えっ……あー……ごめん」

コブ子サンングラスの人とお姉さんが話始めた。知り合いらしい。

私はと言えば、半裸白衣の人と面識がある。半裸白衣の人とはすなわちククイ博士だ。私がトレーナーデビューするときにお世話になる博士である。

「ククイ博士じゃないですか！」

「やあミズキ、アローラ！ 今日越してくるのは聞いてたけど、ここで会うとは思わなかったよ！」

「私もまさかここで会うなんて！ てつきり荷ほどき中にひよっこり訪ねてくると思つてましたよ！」

「ええ……なんだいその想像？ 確かにやりそうだけでも」

「ククイ博士はどうしてここに？」

「ボクはあそこの彼の付き添いというか、案内をね」

あそこの彼、というと、コブ子サンングラスの人か。お姉さんにまだ謝っている。

一体何者なん……ッ!?

……あの白衣……そして、今にもきあいパンチを撃つてきそうな両手、短パン小僧で

あるという主張が滲み出ている長ズボン、いつでもきあいパンチを撃てそうな隙のなさ、あの指紋、声紋、虹彩、骨格！

まさかまさか、いやでも現に私の五感（ほぼ視覚情報）がそう言っている！
あれは、間違いなく……！！

コブシ博士だ!!!

「きあいパンチお願いします!!」

そして私は目の前が真っ白になった。

あ、いや、殴られた訳じゃないよ。嬉失神ってやつ。

23

私がコブシ博士と出会って嬉失神した翌日。

私とママは朝ご飯を食べていた。今日は一日荷物の整理で終わりそうかなあ……。と、玄関のチャイムがなった。

「私出るね！」

「ありがとー」

パツと動ける私はとてもいい子である。これはきつといいことが起きるに違いない。

「はーい、どちら様で……」

「やつほーミツキちゃん！ 師匠だよ！」

「」

「えっ……？！」

……

「はっ！」

「お、目が覚めたみたいだね」

「え、ククイ博士？ あれ？ 師匠は？」

「ここに居るよ」

と、ククイ博士の後ろから顔を覗かせる師匠。

あ、駄目だヤバいかも……。

「おやすみなさい……」

「おっと、わかった。慣れるまではこうしてククイ博士の後ろに隠れとくよ」

「え、なにそれ面倒なんだけど……」

「ミツキちゃんが早く慣れてくれれば解決ですよ」

「早く慣れるんだミツキ」

「え、普通にまだ無理です」

ククイ博士越しても伝わるきあいパンチ力。これはマジヤバイ。師匠ったらマジきあいパンチ。

でも師匠になつてくれたんだからなんとか慣れないとどうにもならないよね。

「その、私も頑張るので、顔隠すとかなんかこう、コブシ博士感を薄めてもらえませんか？」

「顔隠すつたつて……どうしようかなあ……」

「紙袋でも被つたらどうだい？」

「うーん……あ、そうだ。ククイ博士、あれ貸して下さいよ」

「あれ……？」

「ダイナマイトアローラ？ だかなんだかのマスク」

「は？ なにそれ。知らないんだけど」

「あれ、違つたつけな……うーん……あ、思い出したロイヤルマスクだ！」

「な、なんのことかな？」

「え、あれロイヤルマスクのマスクじゃないんですか？」

「ち、違うよ。というかアローラに来たばかりの君が何でロイヤルマスクなんて知つてるの？ マイナーでしょ？」

「空港の本屋さんの雑誌に載ってましたよ、ロイヤルマスク。今話題のご当地ロイヤルマスクなんですよね？ あれでしょ？ ロイヤルロイヤル！ ってやるんではよ？ 面白そうですよね！」

謎の動きをしながら「ロイヤルロイヤル！」と叫ぶ師匠。ロイヤルマスクって知らないけど、師匠の言ってる通りならなんかヤバそうな人だね。

「いやそんなこと一度もやったことないし！」

「ん？」

「え？」

「いや、ロイヤルマスクが、だよ？ ボクはロイヤルマスクじゃないから!!」

「ええく？ほんとですかあ？」

「ほんとだつて！ ていうか結局どうするのか決まってるじゃないよ！」

「だからロイヤルマスクのマスク貸して下さいって」

「だから駄目だつて！ ……いや違うそんなの持ってないって！」

結局、マスクの件はうやむやになった。ロイヤルマスクって何者なんだろうね。

「……仕方ない。じゃあ、こうしよう」

帽子についてる布？ ひも？ ひだ？ 触手？ まあよくわからないけど帽子についてるやつを顔に巻き付け、目だけを出す師匠。成る程、パツと見、ただの不審者だ。誰も師匠とはわからないだろう。さすが師匠、良い子は真似しないでねって言いたくなるようなことを平然とやってのける。私はいいい子だから絶対真似しないもんね！

でもこれ、薄まってんの？ 薄まってないよね師匠感。こんなんやるの師匠くらいだし。

「これで大丈夫そうかな？」

「……はい、大丈夫そうです」

「じえるるっぴ」

でも意外と大丈夫だったのでよしとする。

うん、ほんと、不審者にしか見えない。そして逆に師匠感じる。これで師匠感強まるってことは、つまり、師匠は不審者ってことだ。不審者を師匠に選ぶって……もしか

して私の目は節穴だった……？

いやでもまあ、きあいを感じるのは視覚に限らないって本に書いてあったし、視覚的に師匠かはわかりにくくなったからこそ、きあいが強く感じられるのだろう。曇りの日の方が紫外線が強くなるらしい、これもそういうことだろう。

「それで、ご用件は？」

「ククイ博士からどうぞ」

「今日のお昼に島キングのハラさんのところに行ってポケモンを貰うって話を伝えてなかった気がしたから、伝えに来たんだ。言ってたっけ？」

「初耳だと思います」

シマキングってなんだ。ニドキングみたいなものだろうか。アローラにはカントーのポケモンの通常種とは違う姿の奴がいるって言うし、シマキングもその一種かな。いや待った。それだと私はポケモンからポケモンを貰うってこと？ 違うよね？

「おっと、それはごめんよ。今日はお祭りだね、島の守り神に捧げるポケモンバトルもやったりするんだ」

「へえ。誰が戦うんですか？」

「初めてポケモンを貰うトレーナー同士のバトルだったりすることが多いけど……」

「つてことはそこが私のデビュー戦ですね！ わかりました！」

「いい返事だ。バトル、期待してるよ！ じゃ、ボクの用件は終わり！ また後でね！」

「はい！ それで、師匠のご用件は？」

「うん、バトルまで時間あるし、島キングに挨拶する前に島の守り神に挨拶しに行こうって誘いに来たんだよ」

「成る程、わかりました！ つて島の守り神ですか？ 一体どんな……」

「まあポケモンだし、会えるかはわかんないけどね。どうする？」

「うーん……」

「行つてきなさいよミヅキ。どうせ部屋の片付けは飽きちやつたでしょう？」

「え、いいの？」

「ただし、帰ってからちゃんとやること」

「はあい……というわけで師匠！ 行きます！」

「よし！ じゃあ出発だ！」

「あ、まだご飯食べてる途中なので待つてくださいね」

「あ、うん」

真の英雄は目で殺す、という。

一級の英雄ならば、できて当然のこと。力を持つものならば、視線一つで物理的破壊を生じさせることができる。

それは、眼力のようなものなのかもしれないし、英雄に至った者が持つ超能力のようなものなのかもしれない。

さて、それは人間の話。

ポケモンならどうだろうか。

シンオウ地方の神話によれば、ヒトとポケモンは同じであったらしい。結婚して子を成す者たちもいたそうだ。ルージユラやサーナイトのような、比較的人間に近い容姿を

したポケモンがいるのがその証拠であろう。

さて、人とポケモンが同じであることが指すのは、そう、ポケモンもまた、目で殺すことができるということだ。

人間にすら可能であるなら、ポケモンには造作もないだろう。ポケモンは我々人間よりも遥かに優れた力を持っているのだから。

だが、待つてほしい。「にらみつける」「へびにらみ」等、目に関する技は存在する。だが、目を使った攻撃技は存在しない。

だとすると、ポケモンはどうやって「目で殺す」のか。

その謎を解く鍵が、きあいパンチである（既に読者の皆さんは察していただろうが）。

きあいパンチは攻撃技である。であれば相手を殺す（もちろん比喻である。殺すことができるのは事実であるが）ことは可能だ。

今更、「目からきあいパンチなんてできるわけない」と思われる読者は居るまい。ここまで読んできた読者の皆さんからしたら蛇足でしかないかもしれないが、一応解説しておく。

(中略)

まとめると、

きあいパンチは腕の有無に関わらずすべてのポケモンに可能である。そして、ほとんどのポケモンには目がある。よって、きあいパンチは目で撃てる

といったところだろうか。

ご納得頂けたらう。

コブシ・レン 著『我々はまだきあいパンチを知らない』より

「とまあ、こういうわけだから、貰うポケモンがどんな子でも心配は要らないよ」
「成る程お」

「どんな子達なんだろうね。ワクワクするなあ」

「師匠がワクワクしてどうするんですか」

「いいじゃないか別に」

「いいですけど」

所変わってリリイタウン（とか言う所）。師匠と二人、島の守り神に挨拶しに向かっている。

勿論、師匠の格好は帽子巻きスタイル。

美少女（私のこと）と並んで歩いている姿は、率直に言って変質者だ。

道中、貰うポケモンにローブシンみたいに立派な腕がついてなかったらどうしよう……、みたいなことが私がを咬いたら、師匠がその不安を吹っ飛ばしてくれた。

まあ、言ってることのほとんどは意味わかんなかったんだけどね！

師匠ができるって言ってるんだから、たぶんできるんですよ。私は師匠を信じるし、未来の私のポケモンちゃんを信じることにした。根拠はない。

師匠の言うことを無条件に信じる私は素直かわいい。それは間違いない。

「あ、おまわりさん！ あいつです！」

「む、本当だ！ あからさまに不審者だ！ その二人、止まりなさい！」

「それにしても師匠、守り神に挨拶なんて、随分信心深いんですね」

「いや、信心深いって言うか……神って居るからさ」

「え、居るんですか？ どこに？」

「シンオウ地方とか……あと神って言うていいかわからないけど反転世界とか」
「待ってって言うてるだろう！」

「え？」

「ちよつと話を聞かせてもらいましょうか」

「ちよつ」

そのままおまわりさんに連れていかれそうになる師匠。

「え、師匠？ 何かやったんですか？」

「身に覚えがないんだけど……」

「そんな怪しい格好して歩いてるのを見過ごさせるわけないだろ！」

あつ……。

これ、私のせい？

「いやあ、助かったよコゴミさん」

結局連れてかれた師匠。私も必死に説明したけど、脅されてるとか勘違いされてかえって師匠が問い詰められる始末。昨日のお姉さん（コゴミさん）に連絡して、なんやかんやあつて無事解放された。一件落着。

でも……。

「朝起きたらいないし電話きたと思ったらなんかしよつぴかれてるし……なに考えてんの!？」

「いやあ、起こしたら悪いかなあと思つて」

お姉さんは激おこです。一難去つてまた一難だね。さすが師匠。

「どうしてこうじつとしてられないワケ!?　いくら旅先だからって、仕事あるでしょうが!」

「いや、仕事はするさ。データ取りを」

「だったら計測機器の1つでも持っていきなさいよ!」

「結局俺の目が一番正確なんだよね」

「そうだろうけど……」

え、そうなのか……。師匠すげー。

「でも!!　……ちゃんと、おはようとかさ……言いたいじゃん」

「え……ごめん」

かわいい。コゴミお姉さんがかわいい。怒ってるけどかわいい。年上だけと思わずかわいいと思ってしまった。恐ろしい人……!

「全くもう……それで?　今何しに向かってんの?」

「ちよつと島の守り神に挨拶を……」

「そんなの行かなくなつて……それあたしも行きたい！」

行きたいの!? と声に出さなかつた私は我慢強い子。あとで自分にご褒美をあげよう。

そして、結局メンバーにお姉さんも加えることになった。やる気のある人を師匠が拒むはずがない。いわんやコゴミお姉さんをや（反語）。

お祭りの屋台には目もくれず、でもバトルの会場になるであろう広場はちゃんと確認しておいた。

木製の土俵みたいなステージだった。いかにも試練の場つて感じ。戦う場所を見て私もなんかワクワクしてきた。早くポケモンちゃんにも会いたいな。

と、そんなことを考えながら私達は参道に入った。

ついさつきまではワイワイガヤガヤとしていたが、静かなものだ。

神聖な気配とでも言えばいいんだろうか。思わず姿勢を正してしまうような……。

こういう雰囲気の場合だと師匠も神妙な感じになるようだ。

「嗚呼、いいなあ……」

「え……?」

「間違いなく、居る。歓迎してくれてるみたいだね……!」

と思っていたがそうでもなかった。師匠が何かを受信した。私置いてきぼりだ。寂しいのでゴゴミお姉さんの方を見る。きつとお姉さんなら私の気持ちをわかってくれる。

「……」

お姉さんはお姉さんで念入りに拳を固めていた。やる気満々じゃないですかやだ。完全に置いてきぼりじゃん。

「あの、挨拶、するんですよね?」

私はこう、お参りする的なニュアンスの挨拶を想像してたんどけど。

「ああ、きあいパンチだよ?」

あつ……。師匠の顔が、ちよつと頭おかしい博士の顔から、歴戦の戦士の顔に変わっているのを見て、自分の考えが間違っているのを悟った。

一步一步、遺跡に近付く度に、雰囲気が濃くなる。成る程、師匠の言っていたことがわかった。確かに何かがあるのだろう。この雰囲気を作り出すほどの力を持った何か。それがきつと、この島の守り神。なんだか緊張してきた。どのみち、今回私は見るだけだろうけど、こうして立ち会うだけで、得られるものは多い、そんな気がする。

そして、遺跡にたどり着いたのだが……。

「カプウーコッコ!!」

雄叫びをあげながら雷を撒き散らし勢いよく飛んできた何かと、

「はじめまして!! これからよろしく!!」

それを迎え撃つ師匠のきあいパンチとの激突による余波で、私の意識はあつという間にさよならバイバイしたのであった。

□月☆日 晴れ

間違えたと気付いた時には、すでにぶつかり合っていた。

生身で守護神に突っ込むとか、正気か俺は。

……よくあることだった。

つい、昂って飛び出してしまった。シンオウに限らず、どこ行っただって凄そうな奴を見ると飛び出してしまふ。俺は野生のポケモンかってんだ。

まあ、それはそれとして。

流石守護神。正直ご当地守り神とか思っただけで少し悔ってた。ごめん。殴られた腹がまだヒリヒリするぜ。やっぱ神は神だったわ。

まあ、俺も殴られた回数の方が、顔面に叩き込んでやったけどね。

……嘘ついた。倍は叩き込んでない。せいぜい七回だ。

フーデインは何がしたかったのか……きあいパンチか。いつも通りだなこいつも。知能指数5000オーバーの鑑だよ。でも勝手に出てくるのはやめてくれよな。お前を手持ちに入れた覚えはないぜ。いつの間にヤングースと入れ替わってたんだか。

ヤングースには後でお詫びにポケマメの旨そうなのをあげた。喜んでいたのでよしとする。

さて、今日はイベント目白押しだった。カプ・コケコに挨拶したあと、しばらく友情を育んだ。で、なんか石をくれた。これをこう、なんかしたらしい感じのアクセサリーになりそうな、そんな感じの石だ。ローブシンに倣って鈍器にしてもいいかもしれない。

で、カプ・コケコはその石をミツキちゃんの分もくれた。なんか才能を感じたらしい。わかるぜその気持ち。

でなきや弟子になんて……いや、頼まれたらするわ。

振り返ったら俺って弟子割というよね。先代きあいパンチ親父とか、ミツルくんとか
e t c .

まあ、カプ・コケコの件はこのくらいでいいだろう。

ミツキちゃんのバトルだ。

お相手は島キングのハラさんのお孫さんのハウくん。明るい笑顔が印象的な男の子だ。

まずはポケモン選びから。モクロー、ニャビー、アシマリの三体から選ぶ。俺の見識

からすると、最終的にきあいパンチに一番向いてる形になりそうなのはニヤビーだった。

なんかこう、まん丸お目目じやない感じも逆にかわいい。

そんな理由で選んだりはしないけどな。

じゃあ何で選ぶのか？ それはもう、「きあい」ただ一つだよ。

パツと見て、こいつつて思ったやつ選んどけば間違いはない。

もつと言えば好みで選んだっていい。

その子が最終的にどんな成長を果たしても受け入れられるなら。

まあそれはさておき、ミツキちゃんが選んだのはモクロー。丸くてかわいい。

一方ハウくんが選んだのはアシマリ。どう見てもタイプ相性は不利だ。きあいパンチ親父的には、相性不利をひっくり返して勝ってもらいたいものだけど。

バトル前、ミツキちゃんが初めてのバトルできあいパンチできるか不安そうだったので焚き付けるつもりで、「無理しなくていいよ。最初つからきあいパンチできるやつなんて俺くらいのもんだし」って言ったたら、「できらあ!!」と威勢のいい返事をしてくれた。その後少し不安になったけど。

まあしかし、ミツキちゃんもモクローもよく頑張ったと思う。特にモクローのガッツは素晴らしい。俺を唸らせるんだから大したもんだよ。

一応付け足しておくが、ハウくんもよくやってた。今後に期待する。
あと余ったニャビーは俺が貰った。かわいい。

——
とんでもないものを見してしまった。

ほしぐもちゃんがバッグから飛び出して行ったのを追いかけてみたら、目を疑う光景が待ち受けていたのだ。

ポケモンと、それも守護神と呼ばれるような、伝説クラスのポケモンと、肉弾戦をするような人間がいるだろうか。

世界中にたくさんいる空手王（王とは一体……？）でもそうそうやらない。

一部のマゾなポケモナーでもそこまではしない。

まして、仮にもポケモン博士の資格を持つ存在が、そんなことをすると思うだろうか。自身が現在世話になっている変態博士は、日々ポケモンの技を受けているが、彼でもここまではするまい。

故に彼女は、疑問に思った。

あの方は本当に人間なんでしょうか？

しかし、彼は人間なのであった。事實は小説より奇なりである。

そして、ほしぐもちゃんは「すごいすごい！」とでも言うように、楽しんで跳ねながら見ている。

ほしぐもちゃんの未来が真剣に心配になった。

でも、ほしぐもちゃんもあれだけ戦えるようになれば、私が守ってあげる必要もなくなるかもしれません……。

筋骨隆々の太い腕（のようなもの）で、ワラワラと群がる財団職員をなぎ倒すほしぐもちゃんを想像した。当然ほしぐもちゃんは満面の笑み。倒しきった後、褒めてとでも言うようにリーリエの方へ飛び付く……とところまで想像して振り払った。

ほしぐもちゃんがそんなに強くなるのが正しいのかは甚だ疑問です。

そんなことをさせるくらいなら、私が何がなんでも守ってあげればいいんです。

そう決意したリーリエの脳裏に、筋肉モリモリマッチョウーマンとなった自身の姿が

浮かんだが、即座に振り払った。

いくらほしぐもちやんを守るためとは言え、そこまで女を捨てる気は無いのである。

そんなリーリエの様子に、どこからか「じえるるつぶ」と笑う声が聞こえた気がした。

新天地に降り立ち十余年。

研鑽を重ねたフリーデインは、ある境地に至った。

知能指数の測定値が、「きあいパンチ」と表示されるようになったのである。

さまざまな機械で計測したのだから間違いない。多面的かつ多角的な診断に間違いなどあつていい筈がない。

フリーデインは遂に、知能指数：きあいパンチ になったのだ！

しかし、だからと言ってフリーデインの生活に変化はない。ただ研鑽を積み重ねるのみである。

そんな中で降って湧いた守護神チャレンジ。

当然、参加する。

しかし悲しいかな。長い付き合いになるきあいパンチ親父は、イツシユで出会った緑のあいつと同じく基本的に地産地消派の人間である。

故に、手持ちに採用するのは、アゴジムシ他数体の現地産の新入り。と、大先輩ローブシンである。

羨ましい、と指を啜えてみているのは知能指数の低いポケモン。

連れていってとアピールするのはやる気のあるポケモン。

その点、きあいパンチ親父の元で鍛えられたポケモン達は違う。指を啜えて見ていたところで何も伝わりはしない。連れていってとアピールしたところで、きあいパンチ親父の決定にはそうそう変更はないと理解している。

故に、ただ己を磨くのだ。

来るべき時に備えて、牙を……否、拳を研ぐのだ。あるものは角。あるものは唇。あるものは足。それぞれに、それぞれの拳がある。千差万別十人十色、きあいパンチとは無限。鍛えるべき拳もまた無数にあるのだ。

まあそれはそれとして、訓練されたきあいパンチ親父のポケモンの行動は上記の通り。

だが、フーデインは違った。

フリーデインもまた、きあいパンチ親父に鍛えられたポケモンの一体であり、空間の穴を通じてこの世界にアローラする前からいる、最古参の一体でもある。

しかし、それだけではない。

フリーデインは、知能指数：きあいパンチなのだ。

故にその行動は既存の枠に捉われるものではない。

モンスターボールを入れ換えることなど、知能指数：きあいパンチからすれば造作もないことなのだ。おやつのポケマメーつで交代にに応じてくれたヤングースも大変物分りがよかった。

そして、遂にその時。颯爽登場からのきあいパンチのはずが、生身で守護神に突っ込む我らがきあいパンチ親父。

これには流石のフリーデインも苦笑い。

しかし考えてみればあり得ない話ではなかった。寧ろ、そのくらいでなければきあいパンチ親父はきあいパンチ親父たり得ない。

殴る殴る殴られる。電撃が飛ぶ。避ける。拳圧が飛ぶ。タツクルからの零距离放電を受け、倒れるもすぐに起き上がる。

凡そ生身ですることではない。

きあいパンチ使用とはここまでできるものなのか。

……愚問であった。できるできないではなくやるのだ。結果は後からついてくる。駄目だったら次で決めるのみ。それがきあいパンチ。

長い付き合いではあったが、改めて、きあいパンチというものを再確認させられた。きあいパンチ親父は流石である。

だがそれはそれ。守護神チャレンジに参加しない理由にはならない。

体勢を崩したきあいパンチ親父に守護神の拳が迫る。

ここだ。

愛用の右スプーンで拳を受け止め、空いた左スプーンで殴り付ける。

順調な滑り出しだ。どうだという顔できあいパンチ親父の方を振り向いたフリーディ

ンの後頭部に電撃が浴びせられたのはその直後のことであった。

一発良いのを食らうと思つたら、手持ちに入れた覚えのないやつが割つて入つてきた。

「は？」

思わずそう声を漏らした俺は悪くない。

どや顔で俺に振り向いたフリーデインに迫るカプ・コケコ。フリーデイン後ろ！ と言うには遅いと思つたので黙っていることにした。

……もしかしたら間に合つてただろうか。

電撃を食らい、飛ばされるフリーデイン。が、奴は俺のポケモン達の中でもかなり古参。バトル出没率（勝手に出てくるから採用とは言わない）も高い。故に、この程度では倒れない。案の定、普通に起き上がった。

通常、フリーデインはあまり打たれ強くはないのだが、まあ、改めて語る必要もないだろう。

要は「きあいパンチ」

以上。

ここからは俺が相手だ。とでも言うように、カプ・コケコに向かって構えるフリーデイン。

……まあ、いい。そもそも俺が戦うのはなんかおかしいよな。

「……きあいパンチ！」

指示したときには既にフリーデインは動いていた。むしろフライングしていたかもしれない。きあいパンチの「き」の字が聞こえたか聞こえなかったか位のタイミグで動いていた。それも当然。かれこれ十余年。俺が出した指示なんてほとんどがきあいパンチなのだから。

恐ろしく早いきあいパンチ。俺でなきや見逃しちゃうね。

と思ったがそうでもないらしい。カプ・コケコはしっかり反応していた。やってくれ
るぜ。

「やっぱり一筋縄じゃいかないな！ わかってるよなフリーデイン！」

フリーデインはコクリとうなずく。

「プランKだ！」

別に示し合わせていた訳ではないが、フリーデインは知能指数きあいパンチなので問題ない。アドリブに強いのがうちのポケモン達である。

急な作戦変更にも容易に対応できる。

ちなみにプランKのKとはきあいパンチのKである。

「きあいパンチ……と見せかけてきあいパンチだ！」

難しい注文だとは自分でも思うが、これもフリーデインへの信頼あればこそ。

先程と同じく恐ろしく早いきあいパンチがカプ・コケコを襲う、かと思いきや襲われない。

そして、明後日の方向からのきあいパンチがカプ・コケコを襲うのである。

これぞきあいパンチときあいパンチの合わせ技。強力なサイコパワーと高い技術を併せ持つフリーデインだからこそ成しうる超絶技巧だ。

ローブシンなら合わせ技にするまでもなく超強いか言っちゃいけない。

オオスバメなら攻撃食らいながらも確実に一発ぶちかますとか言っちゃいけない。

ギャラドスなら相性不利でもその巨体を活かしてまず逃がさないとか言っちゃいけない。

ケツキングなら今頃とつくに戦いを終わらせて寝てるとか言っちゃいけない。

ジバコイルなら近付かせずに上手く立ち回るとか言っちゃいけない。

ね。こんな風に考えてもさ。今他の古参メンバーはローブシン以外連れてきてないんだから、あんまり言っちゃ可哀想だよ（言ってはいない）。

別に勝つのが目的じゃないしね。今日は挨拶。見失うな俺。

「しかし……」

そうは言っても、理屈ではわかってても……

「まだ終われないよなあ!! 交代だ! ぶちかませ!! ロープシン!!」

激闘は終わらない。

「おーい、ミヅキちゃん?」

「はっ!!」

あまりのバトルに呆然としていた。師匠つよい。

「戻りましょう?」

「え、いいんですか?」

「ああなつたらしばらく終わんないわよ」

「そうでしようけど」

「それにほら、時計見て」

「……あ」

もう少しでお昼だ。バトルだ。こうしちやいられない。

「ポケモン！ もらわなきゃ!!」

「レン、先 رفتてるからねーって聞いちゃいけないか。行きましょ」

「いいんですかね」

「良いの良いの。子供じゃないんだから」

と、来た道に戻ろうとするゴゴミとミツキ。

そこで、もう一人（と一匹）の観客に気づく。

「あら、私達の他にも居たのね」

「あ、えつと、私は……「かわいい！」えつ」

もう一人の観客であつた少女は、ミツキ的にドストライクな美少女であつた。

「あなた名前は？ 私、ミツキ。これからトレーナーになるの！ 連れてるその子はあなたのポケモン？ 初めて見るなあ。なんて名前なの？」

その言葉は機関銃の如し。次から次へと投げ掛けられる問いに少女は目を白黒させ

るばかりである。

「待ちなさいミヅキちゃん」

「お姉さん……」

「困ってるわよその子」

「あ……ごめん、あんまり可愛かったからつい」

「あ、いえ、大丈夫、です」

突然話しかけられ、かなりびびっていた少女ことリーリエ。箱入りお嬢様なリーリエ、略して箱入りリーリエな彼女としては、こんななグイグイ来られると引いてしまうのだ。正直大丈夫ではない。大丈夫だと答えたのも大丈夫ではないからこそである。

「私は、リーリエといいます」

それでも、聞かれたことには答える辺り、彼女の人の良さが伺えるというものだ。

「えー、名前から既にかわいい！ ヤバいですねお姉さん！」

「ごめん、私、ミヅキちゃんの言ってることがよくわからない」

「それで、リーリエちゃんはどうしてここに？」

「私は、この子……ほしぐもちゃんが、ここにやって来たのを追いかけて来たんです」

「へええ、ほしぐもちゃんっていうんだねこの子。師匠のバトルに引き寄せられたのかな？ 将来有望だね！」

「そうなのですか……?」

リーリエは訝しんだ。狂人の奇行に引き寄せられる野次馬根性と変わらないような行動をどうして将来有望と言えようか。

自分の感性はおかしくないはずだ。つまりおかしいのはこの少女であろう。せつかく話しかけてはもらったが、あまり近づかない方がよいのかもしれない。

「つと、こうしちやいられない！ 行きましようお姉さん！ リーリエちゃんまたね！」
「あ、はい」

と、考えているうちに向こうの方から離れてくれるようだ。安心安全。リーリエの平穩は守られた。

心を落ち着かせ、来た道に戻る。後ろではまだドカンドカンと花火でもキメているような音が聞こえるがリーリエには関係のない話なのだ。

じえるるつぶ、とからかうような声が聞こえたのも気のせいだ。

さて、静かな（後ろは騒がしいが）参道を抜け、広場へ戻る。

先程までとはまた違った種類の騒がしき。祭りの喧騒が聞こえる。人が多いがリー

リエは、この騒がしきは苦手ではない。なぜなら誰も彼女を気にしないから。

こちらを認識し、注目してこないのであれば、人なんて歩く木のようなものである。次々に人をすり抜けていくと、目的地が見える。この祭りの中心。木で作られた円形のバトルフィールドである。

その側には現在世話になっているククイ博士の姿……と、さらに二人。あれは……。

「あ、リーリエちゃん!! やっほー!! さつきぶり!!」

再会が早すぎる。

いきなりリーリエでびつくリーリエであった。リーリエの平穩は守られない。

25

□月☆日 続き

カプ・コケコへの挨拶（物理）の後の話をしよう。

ミツキちゃんのバトルだ。

お相手は島キングのハラさんのお孫さんのハウくん。明るい笑顔が印象的な男の子だ。前にハラさんに会ったのは……こっちに来たばかりのころだったから、大体10年前。でも覚えててくれた。人格者は一味違う。その孫なのでハウ君も一味違うことを期待したいけど、その手の期待はうんざりしてるだろうから、俺は毛ほども期待しないことにする。

いや、毛ほども期待されないのも可哀想だからやっぱり期待はしておこう。

まずはポケモン選びから。モクロー、ニャビー、アシマリの三体から選ぶ。俺の見識からすると、最終的にきあいパンチに一番向いてる形になりそうなのはニャビーだった。

なんかこう、まん丸お目目じゃない感じも逆にかわいい。

そんな理由で選んだりはしないが。

じゃあ何で選ぶのか？ それはもう、「きあい」ただ一つだよ。パツと見て、こいつつて思ったやつ選んどけば間違いはない。もつと言えば好みで選んだっていい。

その子が最終的にどんな成長を果たしても受け入れられるなら。

まあそれはさておき、ミツキちゃんが選んだのはモクロー。丸くてかわいい。

一方ハウくんが選んだのはアシマリ。どう見てもタイプ相性は不利だ。

きあいパンチ親父的には、相性不利をひっくり返して勝ってもらいたい。しかし言つてしまつてはなんだがハウ君はあんまりきあいパンチつて感じがしない。実際どうかは知らないが。

バトル前、ミツキちゃんが初めてのバトルできあいパンチできるか不安そうだったの
で「無理しなくていいよ。最初っからきあいパンチできるやつなんて俺くらいのもんだし」つて言つたら、「できますよお!!」と威勢のいい返事をしてくれた。

実際、ミツキちゃんもモクローもよく頑張つたと思う。特にガッツが素晴らしい。俺を唸らせるんだから大したもんだよ。

一応付け足しておくが、ハウくんもよくやつてた。今後に期待する。

あとニャビーちゃんは俺が貰つた。かわいい。

ハラさんに会って思い出したけどグズマは元気だろうか。最近連絡とってなかったの
でちよつと連絡してみよう。

「もうリーリエと会ってたんだね、ミツキ」

「はい！　こんな早くまた会えて嬉しいです！」

「これでほとんど揃ったわけだけど……コブシ君は？」

「カプ・コケコにまだきあいあいいパンチさしてる……かな？」

「へえ、土地の守り神にお参りなんて、殊勝な心掛けだねえ」

殊勝な心掛け、と言われ、私とコゴミさんは顔を見合わせた。

「殊勝……？」

「……まあ、挨拶は大事よね」

「え、それは、どういう反応なの？」

「そりゃあ……「おーい！」ん？」

参道のある方から声がする。多分師匠だろう。

そのうち人波を掻き分けて現れるだろう。

「……おいあれ」

「うわ、まじか」

「ママー、なんか飛んでるよー」

「あら、ツツケラさんかしら……えっ」

俄にさわがしくなる。皆が見ているのは、空……あつ。

華麗に空を舞うスワンナのように、両手を広げる師匠の姿がそこにあつた。まるでそこに居るのが当然とでも言うような表情だ。

正確には、顔は隠れて見えないけれど、きつとそんな顔をしているに違いない。

当然のように宙を舞っていた師匠。やがて、私達の姿を見つけたのか、大きく手を降り始めた。

「おーいー!」

「師匠ー! こつちですよー」

「助けてー」

「え?」

ぐんぐん近付く師匠。しかし、減速する様子はない。まさか自力で飛んでるわけじゃないの!?

ど、どうしよう。流石に師匠でもこの勢いで激突するのはヤバいんじゃないか……。

地面に激突すると思ったその瞬間。私は見てしまった。師匠の帽子が一気に開き、何本かのヒラヒラが衝撃から守るように師匠を包み込んだのを。そして、余った数本は地面に突き刺さり、地面にぶつかるのを食い止め、見事に落下と地面への直撃を防いだのを。

恐ろしく早い緊急展開。私程のファンじゃなきや見逃しちゃうね。

あれなら師匠は無事……。いやまあ、止まった瞬間に首とかガクンってなってそうだけど……。

「いやあ、帽子がなければ即死だったね」

「大丈夫なんですか？」

「うん、いつもこの帽子には助けられてるよ」

「帽子が、助けてくれるんですか？ 帽子なのに？」

「……あー。いや、うん、まあ、そういう機能があるんだよ。エアバッグ的なね」

エアバッグどころではないと思うんだけど。触れない方がいい感じだろうか。だもしたらやめるのも吝かではない。私は空気の読める美少女だから。

「師匠の帽子は一味違うんですね」

という感じでまとめておけば間違いはない、はず。

「じえるるっぶ」

おい誰だ今帽子鳴らしたやつ。

「おまたせしました」

「お参りは済んだのかい？」

周囲の人が啞然とする中、ククイ博士は特に普段と変わらない。何故なら、彼は既にきあいパンチ慣れしていたのだ。コブシの論文を読破していた彼にとっては、人が空を飛ぶなど、「まあそんなこともあるかな」程度の事態にすぎない。

「お参り……？ ああ、はい。バツチリかましてきましたよ」

「かますって何を？」

「そりゃきあいパンチですよ？」

「……？ うん、まあいいや。……ああ、丁度いらっしやっただみたいだね。ハラサーン！」

「おお、ククイ博士。そちらのお嬢さんが今回の？ それに……」

「覚えてますか？ ハラサーン」

「ええ、覚えていきますとも。レン、コゴミ。二人とも立派になったようで何よりですな」
え、師匠達、知り合いなの……?」

「あの時の台風のような少年が、天変地異のようなポケモン博士になったのですから、月日の流れを感じるものですね」

「いやいや、俺なんてまだまだです」

誉められてるの……?」

「それ、誉めてるんですか?」

あ、ククイ博士が聞いてくれた。

「ビッグになったのは確かですね。ハツハツハ」

ハラさんは、意味深なコメントをして豪快に笑った。師匠も笑っている。それでいいのか師匠。

いやでもまあ、そんなもんなのか。

「と、旧交を温めるのもよいですが、本題はこれではありませんでしたな。ハウ！ こつちにおいで」

「はいはい。おー、知らない人がいっぱいだあ」

ハラさんに呼ばれて男の子が一人歩いてくる。のんびりした口調だけど、なんというか、強そう。

こういう雰囲気ゆるそうな人はなんだかんだ強キャラだったりするのだ。そして実は敵のスパイだったりするのだ。彼もその手のタイプに違いない。

……という妄想。

普通にいい人そうだと安心している。よかったよかった。ちゃんと友達になれそう。

すっかり私の踏み台になってもらおう。……なんちゃってね。

「はじめまして！ 私、ミツキ！ 今日、あなたとバトルするのは私なの！ よろしくね！」

「俺はハウだよ。よろしくね」

「ふむ、では早速ですが、バトルの準備といきましようかな」

そう言ってハラさんが取り出したのは3つのモンスターボール。まとめて投げると、中から三匹のポケモンが飛び出した。

「えっ、かわいい……」

その声を漏らしたのは師匠だった。

でもかわいいのは否定しない。

「この三匹は右から順にニャビー、モクロー、アシマリって言うんだ。かわいいよね」

「この中から一匹きずつ、ハウとミツキにさしあげますぞ」

「おぉ」

どの子もかわいいな。どうしようかな。

「ミヅキ、先に選んでいいよ〜」

「え、いいの？　ありがとう！」

と、お礼を言ったものの、こうして先に私に選ばせるというのは、後で自分が有利なポケモンを選ぶためなのではないかと邪推してしまう私がいる。

「うーん……」

「俺はニャビーちゃんがいいです」

「もし余ってしまったら引き取りますかな？」

「え、いいんですか？」

「かまいませんぞ。ポケモン博士になったお祝いにいいでしょう。成長した君がどんなポケモンを育てるのが、楽しみですか」

「さっすがハラさん！　太っ腹ですね！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」
まだ私選んでないんですけど。

そんな気持ちが見線に現れていたのだろう。

目が合った師匠は申し訳なさそうに一言。

「ごめん、ニャビーちゃんは俺が貰うね」

ってそうじゃないでしょうよ。

そこは、「ごめん、ミツキちゃんを選んでる途中だったね。俺のことは気にしなくていいから、君の思うように選んだらいいよ」とか言うところでしょうよ。

という内心はおくびにも出さず、

「大丈夫ですよ。私はこの子に決めてましたから」

と、目の前のモクローを抱き上げた。

私ってなんてできる女。

「なら俺はアシマリにするね。よろしくな〜アシマリ〜」

と、ハウ君もハウ君で余裕の対応。なかなかできる。いや、できるどころか寧ろぐう聖なのでは……？

邪推してごめんなさい。

「ふむ、では約束通り、この子は君が貰うといいでしょう」

「やったぜ。よろしくニャビーちゃん」

この師匠ルンルンである。主役は私達なんだけどなあ。

「さて、時間も頃合い、ポケモンも決まった。強いて言えば少しくらい練習する時間を与えたいところではありますが、これも経験。早速バトルに進みましょうぞ」

ついにこの時が来た。胸に抱えるモクローと目が合う。

かわいい。

しかし、こんなかわいいモクローをバトルで戦わせなければならぬ。可哀想な気もする。でも、それが私が憧れたポケモントレーナーの世界。

師匠がいる世界。

ならば、私も行くしかない。

「モクロー」

「？」

「頑張ろうね!!」

「モクロー」

とは言え、やっぱり初めては不安だ。でもこんな時こそ師匠の出番だろう。

そのための師匠。そのためのきあいパンチ。

早速私は助言を求めた。

「師匠！」

「ほーら高い高い」

「にゃん」

「グルグルしちゃうぞ」

「にゃん」

「師匠!!」

「おつ、ごめんねミヅキちゃん。あんまりニヤビーちゃんがかわいいものだから」

「かわいい弟子が初バトルですよ! 何かアドバイスは無いですか?」

「これでも緊張してるのだ。緊張ほぐしたりとかしてほしい。」

「そうだなあ……まあ、無理にきあいパンチしようとしないうことだよ。肩の力抜いていきなよ。最初っからきあいパンチできるのなんて俺くらいのもんだし」

「肩の力を抜いていけど、そのアドバイスは理解できる。しかし、その後が解らなかつた。何と、言われた? 最初っからきあいパンチなんてできない?」

「理解した時、思わず反論していた。」

「できませんよお!」

「え、なんだって?」

「きあいパンチを使って勝ってやるって言ってるんですよお!!」

「ほお」

「あら……」

「ええ……」

「それならそれでいいんじゃないかな、うん」

上から順に師匠、コゴミお姉さん、リーリエ、ククイ博士の反応だ。

「なら、見せて貰おうじゃないか。きあいパンチ一発で勝つところを」

「えっ……きあいパンチ一発で？」

「きあいパンチ、できるって言ったよね？」

「言いました……」

「きあいパンチつてのはね……派手でも地味でもどっちでもいいし、なんならパンチかどうかなんて大した問題じゃないんだ」

「なら……」

「でも、それでも、きあいパンチでなくてはならない」

「……っ！ 成程……」

なんて奥深い世界だろう。つまり、きあいパンチしろってことだ。それなら師匠が一発で決めろって言ってるのも頷ける。きあいパンチはきあいパンチだから、きあいパンチでなければならぬ。つまりそういうことだ。

「……ねえ、じいちゃん？ オレ、ミツキ達が言ってること全然わからないんだけど」

「安心しなさいハウ。私にもわからないし、わからなくて困るものではないよ」

「………いってきます!!」

「うん、いい表情だ。大丈夫。きつとうまくいくよ」

「信じるんだ。自分を、モクローを、そして……きあいパンチを」

まだ、不安が消えたわけじゃないけれど、なんとかなりそうな気がする。

「勝者、ミツキ!!」

なんとかなったわ。

ここは、アーカラ島、シエードジャングル。木々が鬱蒼と生い茂り、沢山の木の実にそれを食べるポケモン達で賑わう島巡りの試練の場にもなっている場所だ。

そんなシエードジャングルだが、ある一画に、不気味なほど静まり返った空間がある。

他の場所では、木々のざわめきや、ポケモン達の鳴き声でうるさいくらいなのだが、そこだけは、木々すらも息を潜めているかのように、音がな

ぬしポケモンの住処？

いや、違う。

だが、よく見ると、とあるポケモンの姿が目に入る。
カリキリである。

木の実のなっている木の前で、カマを振り上げ、草のように擬態しているのだ。

だが、獲物は取れない。カリキリの擬態が下手くそだとか、そういう話ではない。いや、ある意味では、そんなのだが。

そのカリキリはあまりにも、強すぎた。自我が、意思が、肉体があまりにも同種のそれとはかけ離れていた。

獲物が取れないなら木の実を食べればいい。その通り。だが、このカリキリはそれをしていない。彼の肉体は獲物を捕まえるだけの力があると、理解していたから。その力を思う存分振りたいと思っていたから。

故に、擬態し、待つ。

だが、そう、先に述べたように、この一画はカリキリ以外にポケモンはいない。なぜか？

それは、カリキリから滲み出る圧が、他のポケモンを寄せ付けないからだ。

何がいるかはわからないが、近付いたらヤバい。

そう思わせるだけの圧が、滲み出ている。さながらそれは、道に唐突に現れて圧倒的な存在感を放つテラキオンのように。

野生のポケモンは彼我の実力差を感じ取る力が優れている。明らかにヤバそうなものには近付かないのが吉。それが本能レベルで染み付いている。そうでなければ生きていけない。それが野生の世界。

今日も彼は獲物にありつくことができず、大人しく木の実をかつ食らう。もはや、彼が潜むこの一画に近づく者はほとんどいないし、今後現れることもないだろう。

ある者たちを除いては……。

出会いの日は近い。

「もしもし？ あん？ おう、グズマさんだぜえ？」

「えっ、コブシ？ コブシ・レン？ まじかよ久し振りじゃねえか」

「おう、俺はまあ、元気にやってるぜ。お前は？」

「そりやよかった。で、お前は、あー、そーいやポケモン博士だったっけか。出世してんな。おめつとさん」

「あん？ 俺？ あー、まあ、あれだよ。エーテル財団って知ってるか？ おう、そうそう」

「そのまあ、下請けって言うかな、下部組織？ みてえなの。うん、で、そのこう、リーダーつつうか？ 代表つつうか？ まあ、そんな感じだよ、うん」

「いやいや、そんな大したもんじゃねえって。んで、なんで電話なんか……ああ？　アローラに？　マジかよお前」

「明日？　あー、うん、あいてるぜ。ホントは忙しいんだけどな。たまたまな」

「えっ、うち来るって？　いや、今俺実家に居ねえし。あ？　ウラウラ島だけだよ。え、来る？　いやいや待って待って！　……切りやがった」

「何の電話だったんスカ？　グズマさん」

「何ってそりやあ……きあいパンチだ。……あー、しかしどうすつかな……」

「プルメリさん呼んできましようか？」

「……ああ、頼む」